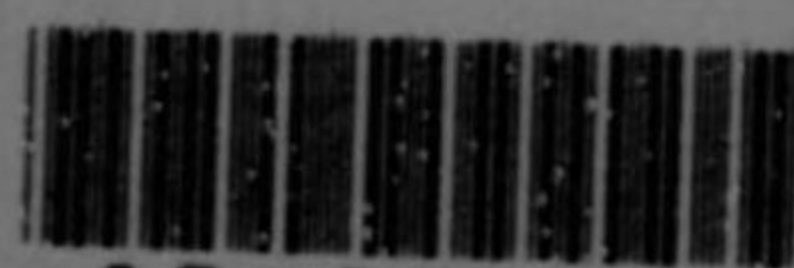


A56

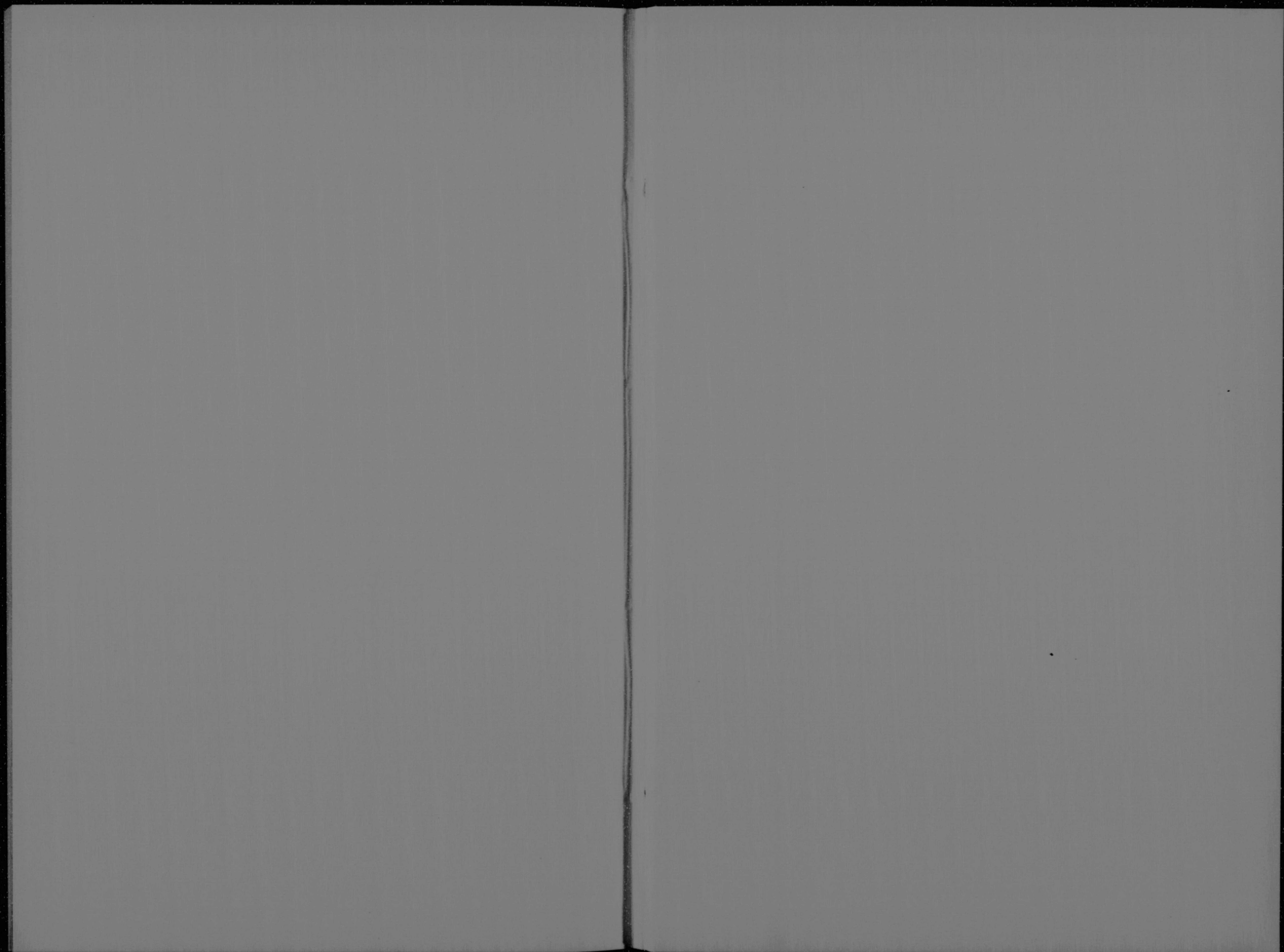
R5

23



83402853







2484-2



全「ソ」聯邦共產黨史（下卷）

昭和十三年五月

調第一二二號

外務省調査部



全「ソ」聯邦共產黨史 下卷

贈

左野

新毅



A56  
R5  
23



83W02853

## 凡 例

一、本書は四月刊行のヤロスラフスキー著『全「ソ」聯邦共産黨史』上巻の續きをなすもので、歐洲戦争の結果、帝制ロシアの危機が激化し、一九一七年二月の革命が勃發するに至つたところより説き始め十月の社會主義革命が如何に共産黨によつて準備されたか、また革命當時共産黨が如何なる戰術を展開したかを詳論し、戰時共産主義時代、新經濟政策時代及び五ヶ年計畫時代に於ける共産黨の政策を取扱ひ、これらの政策を巡つて起つた黨内の對立及び反對派の活動に對しては殊に注意を拂つて筆を盡すめてゐる。スターリニズムとトロツキズム、ブハーリン主義との關係、兩者間の對立の根據は本書によつて充分闡明されてゐる。

二、本書は一九三三年九月を以て終つてゐる。従つてソ聯邦共産黨第十七回大會（一九三四年）やコミンテルン第七回大會（一九三六年）新憲法を採用せる第八回臨時ソヴェト大會、昨年の中央委員會二月、三月總會、更にまた昨年末の最高會議總選舉、昨今の全面的肅正工作については遺憾ながら觸れてゐない。しかし本書がこれらの最近の政治的諸事件の理



解に資する所が大なることは言ふ迄もあるまい。

三、卷末の全「ソ」聯邦共産黨史及び革命運動史年表、全「ソ」聯邦共産黨史總人名索引は黨史研究者のみならず、一般に「ソ」聯邦研究者に對して多大の便宜を與へるものと信ずる。

昭和十三年六月

外務省調査部第三課

目次

第十三章 一九一七年の二月革命と『黨の新しき態度』……………一―五二

二月革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーと黨の役割……………一。二月革命における自由主義的ブルジョアジーと西歐資本との役割……………ハ。労働者および兵士代表ソヴェトと臨時政府。二重支配とその社會的根據……………二。黨の新しき態度の時期(三―四月)……………三。一九一七年四月四(十七)日のヴェ・イー・レーニンのテーゼ……………三六。黨の四月會議。革命におけるプロレタリアートの任務の評価における日和見主義者との闘争……………三五。四月會議と農業問題および民族問題……………四九。第十三章参考文献……………五二。

第十四章 十月への途上における黨……………五三―五九

大衆の革命的動員の時期……………五三。一九一七年四月二十一―二十一日の示威運動……………六二。聯立政府。第一回ソヴェト大會。六月十八日の示威運動。ケレンスキーの攻勢。軍隊における影響のためのボルシェヴィキの闘争……………六四。一九一七年七月三―五日の事件。



大衆の先頭に立つた黨……七三。第六回黨大會（一九一七年七月二十六日—八月三日）。大會における同志スターリンの役割……八〇。區際派とトロツキー……九三。八月の國家協議會……九七。コルニロフ暴動……一〇〇。突撃組織の時期（九—十月）……一〇五。『民主主義協議會』、『豫備議會』とボルシエヴィキの戰術……一二三。武装暴動の準備。ジノヴィエフとカメネフの罷業破りの暴露……一二四。暴動の組織と實行……一二九。第十四章參考文獻……一三八。

## 第十五章 プロレタリア革命とソヴィエト權力の第一歩 ……一三一—一四〇

一九一七年十月二十五日（十一月七日）の社會主義革命とその國際的意義……一三三。農民層に對する黨のスローガン……一三六。權力を握つたプロレタリアートの諸任務。ソヴィエト權力の最初の諸布告……一四二。ソヴィエト政府の設立。反革命に對する闘争……一四九。黨内における意見の相違……一五〇。憲法議會の解散……一五八。プレスト講和。『左翼共產主義者』およびトロツキー派に對する闘争……一六二。第七回黨大會（一九一八年三月六—八日）……一七五。一九一八年春のレーニンの經濟計畫……一七六。内亂の發

展……一八三。貧農委員會。『穀物のための闘争は社會主義のための闘争である』……一八六。左翼社會革命黨員との聯合の決裂……一九一。ドイツにおける革命……一九三。第十五章參考文獻……一九三。

## 第十六章 戦時共產主義 ……一九五—二六〇

戦時共產主義の社會經濟的本質。労働者階級と農民層との軍事的政治的同盟……一九五。全露非常委員會の組織……二〇一。赤軍……二〇四。内亂中における同志スターリン……二〇七。第八回黨大會（一九一九年三月十八—二十三日）。黨綱領の審議と採用……二二四。第八回黨大會における軍事問題……二三二。第八回黨大會における農民問題……二三四。内亂の終結への途上……二三六。ウランゲルの清算。ワルソ—遠征……二三〇。第八回黨會議（一九一九年十二月二—四日）……二三六。第九回黨大會（一九二〇年三月二十九日—四月五日）……二四三。第九回大會における經濟問題……二四三。第九回大會における軍事問題……二四六。レーニンおよびスターリンと全國の電化……二四九。第九回黨會議（一九二〇年九月）……二五三。民族共產黨の組織……二五四。第三（共產）インターナショナルの



組織……二五五。第十六章参考文献……二六〇。

四

## 第十七章 新經濟政策への移行（第十回および第十一回黨大會）……二六一—二三三

戰時共產主義時代のレーニンの評價……二六二。ネップへの移行の諸原因……二六三。新經濟政策の意義と本質……二六七。一九二〇—一九二一年の労働組合に關する討論。トロツキー主義に對する鬭争……二七四。労働組合討論における黨の見地……二七九。労働者反對派に對する黨の鬭争……二八三。第十回黨大會における民族問題……二八七。第十一回黨大會。農民層との結合。ネップの第一年の總結果……二九〇。『誰が誰を?』。標語『取引することを學べ』……二九七。第十一回大會における反對派側からの黨の批判……三〇〇。黨の肅清……三〇四。第十一回大會における労働組合問題……三〇八。金融政策について……三一〇。第十七章参考文献……三三三。

## 第十八章 第十一回黨大會乃至第十三回大會のネップの途

上における社會主義的攻撃……三三五—三七三

第十二回黨會議（一九二二年八月四—七日）……三五五。ヴェ・イー・レーニンの最後の政治的進出……三三八。レーニンの協同組合計畫……三三〇。レーニンと國家機構の改善……三三四。黨の政策と世界革命の勝利のための鬭争……三三六。第十二回黨大會。國家の指導における黨の役割……三三八。外國資本に對する法外の讓歩に對する鬭争……三三二。第十二回大會と國營工業……三三六。第十二回黨大會における民族問題……三三九。組織問題に關する第十二回大會の諸決議……三四八。反革命的グループ『労働者グループ』および『労働者の眞理』の黨からの追放……三五〇。一九二三年秋トロツキスト反對派に對する黨の鬭争……三五五。第十三回會議と黨内情勢および經濟政策……三六六。一九二三年秋の國際情勢……三七二。第十八章参考文献……三七三。

## 第十九章 第十三回大會から第十四回黨會議に至る時期に

おける黨……三七五—四一六

レーニンの死。レーニンの召集と黨のプロレタリア的隊伍の鞏固化……三七五。第十三回黨大會。商業および協同組合の問題……三七九。この時期における農村における黨の

五



活動……三六。トロツキーの『十月の教訓』に對する鬭争……三六。一九二四年中央委員會十月總會。下級ソヴェト機構の鞏固化。ソヴェトの活潑化……三九。第十四回黨會議。農村における戰時共產主義の殘存物の清算について……三八。第十四回黨會議における協同組合問題……四四。第十四回黨會議の決議の日和見主義的歪曲に對する黨の鬭争……四七。第十四回黨會議と一國における社會主義の勝利……四九。第十九章參考文獻……四六。

第二十章 第十四回黨大會—工業化の大會 …………… 四七—四五

第十四回會議後の意見の相違。『新反對派』……二七。第十四回黨大會當時における經濟的成功……四三。第十四回黨大會と一國における社會主義の勝利……四四。我發展の一般の方針について……四三。第十四回大會とネップおよび國家資本主義の本質……四三。第十四回大會と農民層、中農、貧農およびクラーク的危險性……三七。第十四回大會における組織問題。黨と階級。反對派はアクセリロッドへ轉落する……四一。黨の新規約……四八。第十四回大會と共產青年同盟……五一。共產青年同盟におけるプロレタリ

ア的指導の問題……四五。第十四回大會と労働組合……四六。第二十章參考文獻……四五八。

第二十一章 復興期から社會主義的改造期へ（第十四回大會と

第十五回大會との間）…………… 四五—五六

トロツキーのヘゲモニーの下における反對派ブロックの形成……四五。第十四回大會と第十五回大會との間における黨……四六。工業化のテンポと方法とについて……四六。物價政策と賃銀……四八。失業に對する鬭争……四七。社會主義的蓄積と個人資本に對する鬭争……四七。租稅政策……四七。プロレタリアートの獨裁の問題における黨の政策と反對派の政策……四五。反對派の地下的および分裂主義的活動に對する黨の鬭争……四九。一九二六年十月十六日の反對派の二心ある聲明……四八。反對派の社會民主主義的偏向に關する第十五回黨會議の決議……四六。國際政策の問題に關するトロツキスト反對派に對する鬭争……四九。一九二七年中央委員會および中央統制委員會七月總會……四九。『八十三人政綱』と『十五人グループ』の暴露……四九。第二十一章參



考文献……五〇五。

八

第二十二章 第十五回大會—集團化の大會……………五〇七—五三二

トロツキー主義は反革命的ブルジョアジーの前衛となる……五〇七。第十五回大會における社會主義建設の諸問題……五三三。第十五回大會と國民經濟の五ヶ年計畫……五五五。第十五回大會における農村における活動に關する諸問題。『農村は大集團的經營へ前進』……五八。第十五回大會におけるトロツキスト反對派の除名……五二一。第十五回大會以後のトロツキー派……五七。第二十二章参考文献……五三三。

第二十三章 國民經濟の社會主義的改造の途上……………五三三—五七七

穀物買上難とクラークに對する非常方策……五三三。穀物ソフホーズの組織について……五三七。シャハト事件とその教訓……五三八。自己批判の展開……五四〇。幹部の養成……五四二。二つの戦線における闘争および和解主義に對する闘争における黨……五四三。右翼的偏向の形成。この時期の主要な危険性としての右翼的偏向……五四七。コミンテルン第六回大會と全ソ聯邦共產黨……五五二。偏向の社會的根據……五五三。黨内におけるクラーク

の手先としての右翼日和見主義に對する闘争における黨……五五七。第十六回全ソ聯邦共產黨會議……五六三。コミンテルン執行委員會第十回總會と全ソ聯邦共產黨……五六五。一九二九年中央委員會十一月總會……五六六。農業の全面的集團化と階級としてのクラーク層の清算の問題……五七三。第二十三章参考文献……五七六。

第二十四章 第十六回黨大會—展開された社會主義的攻撃  
の大會……………五七九—六一六

大會前の情勢……五七九。第十六回大會の前夜における右翼的および『左翼的』偏向に對する闘争……五八一。第十六回黨大會の歴史的意義……五八六。第十六回大會における工業化の諸問題……五八七。第十六回大會における集團化の諸問題……五九二。第十六回大會におけるソフホーズ建設の諸問題……五九四。この時期におけるソヴェト聯邦の國際的地位……五九八。二つの體制……六〇〇。第十六回大會と右翼的および『左翼的』偏向に對する闘争……六〇二。第十六回大會における民族問題……六一〇。第二十四章参考文献……六一六。

九



## 第二十五章 第十六回大會と第十七回黨會議との間……………六七一—六四二

ソヴェト聯邦に對する經濟封鎖と干渉の諸問題……………六二七。スィルツォフ——ロミナー  
 ジェ——シャツキンの右翼的『左傾的』ブロック……………六三〇。中央委員會および中央統制  
 委員會（一九三〇年）十二月聯合總會……………六三三。メンシエヴィキの反革命的組織事件……………  
 六三七。一九三一年中央委員會六月および十月總會……………六三三。鐵道運輸の再組織……………六三四。  
 ソヴェト聯邦の都市經營の發展……………六三六。ソヴェト商業の展開と労働者への供給の  
 改善の諸問題……………六四〇。第二十五章参考文献……………六四二。

## 第二十六章 現段階における黨……………六四三—六九〇

『新しい仕方では活動せよ——新しい仕方では指導せよ』……………六四三。この決定的な時期にお  
 ける同志スターリンの理論的活動の意義……………六四六。第十七回黨會議……………六五〇。ソヴェ  
 ト聯邦國民經濟第二次五ヶ年計畫の作成に關する指令。第十七回黨會議の歴史的意義  
 ……六五三。階級敵、この時期におけるその闘争の諸形態……………六五六。この時期における敵  
 對的諸階級の遺物に對する闘争におけるプロレタリア獨裁……………六五九。労働規律の向上

のために。明かに活動的な、廉價な國家機構のために……………六六二。中央委員會および中  
 央統制委員會一月總會。その歴史的意義……………六六四。機械トラクター配給所およびソフ  
 ホーズの政治部の組織。同志スターリンの演説『農村における活動について』……………六六七。コ  
 黨の肅清に關する決議……………六七四。日和見主義は反革命的組織の旗となつた……………六七七。コ  
 ルホーズ農場員Ⅱ突撃隊員第一回全ソ聯邦大會……………六八一。運輸における政治部……………六八  
 七。

## 結 語……………六九一—六九三

## 全ソ聯邦共產黨史および革命運動史年表……………六九五—七二〇

## 全ソ聯邦共產黨史總人名索引……………七二一—八〇四



## 第十三章 一九一七年二月革命と『黨の新しき態度』

### 二月革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーと 黨の役割

叛亂した労働者と農民、兵士の壓迫の下に帝政は顛覆された。一九一七年二月ブルジョア民主主義革命は勝利した。労働者階級が革命の指導者として進出した。二月革命前にペテルブルグ（現在のレニングラード）において始まった有力な、廣泛な同盟罷業運動は、ウクライナ（ハリコフ、ドンバス）、バクー、ブリャンスクの金屬工、イヴァノヴォおよびコストロマの紡織工およびその他多くの工業地方を把握した。最初經濟的であつた同盟罷業は、ツァーリズムの顛覆といふスローガンの下に、非常に急速に政治的罷業に移行した。労働者はバンのため、物質的狀態の改善のための闘争を戦争や専制政體に對する闘争と結びつけた。労働者階級はボルシェヴィキ黨の、スローガンの下に闘争した。一九一七年一月同盟罷業の波は嵐の如く發展した。一九一七年一月ペテルブルグでは二十萬人の労働者が、モスクワでは三萬人以上が罷業し、また他の多くの都市におい



でも同盟罷業は展開された。一九一七年二月にはたゞベテルブルグだけでも四十三萬二千人の労働者が罷業した。一九一七年一月における同盟罷業總數のうち政治的罷業は六六・四%であつたが、二月には九五・六%であつた。

ボルシエヴィキ黨のスターガンの下における労働者の革命的進出、軍隊の労働者の側への移行、農民闘争（兵士）とプロレタリアートの革命的闘争との結合は、ツァール専制政治の運命を決定した。ブルジョア民主主義革命は勝利し、そして八ヶ月後に展開された社會主義的十月革命の序幕であつた。

『數世紀および一九〇五—一九〇七年の最大の國民的階級的戰闘の三年間維持され、何物にも拘らず維持された君主制が、僅か八日間——ミリュエーコフ氏が國外におけるロシアのすべての代表者にあてゝ自慢の電報の中で述べた期間——に崩壊したといふやうな「奇蹟」がどうして起りえたか?』——とレーニンは、二月革命のこの第一段階を解剖しつゝ、一九一七年三月國外で書いた『遠方からの手紙\*』の中で質問してゐる。そこには何等の奇蹟もなかつた、たゞ俗物にのみこの革命が奇蹟に見えたことは、我々がすでに見たところである。革命が如何に巨大な力を蓄積し且つ解放したか、それが如何に革命的な創造力を促進したかを我々は知つてゐる。我國の労働

者階級がこの革命のために基本的な準備を持つてゐたことを忘れてはならぬ。レーニンは二月革命の成功の主要な原因の一つとして、一九〇五—一九〇七年の第一革命、それに續く一九〇七—一九一〇年の反革命時代および帝國主義戰爭前の一九一一—一九一四年の新しき昂揚期を指摘してゐる。

\* レーニン、第二十卷、一三頁。

『一九〇五—一九〇七年のロシア・プロレタリアートの最大の階級的戰闘と革命的エネルギーとの三年間なくしては、數日間におけるその初期の段階の完了といふ意味で、かくも急速な第二革命は不可能であつたらう。第一（一九〇五年の）革命は基礎を深く爆破し、數世紀來の偏見を根こぎにし、數百萬の労働者と數千萬の農民とを政治生活および政治闘争に目覺まし、ロシア社會のすべての階級（およびすべての主要な黨）をそれらの眞實の性質において、それらの利益、それらの勢力、それらの行動能力、それらの當面および今後の目的の眞實の相互關係において、相互に——また全世界に——示した。第一革命とそれに續く反革命時代（一九〇七—一九一四年）は、ツァール君主制のすべての本質を暴露し、それを「最後の一線」に導き、そのすべての腐敗性、恐るべきラスプーチンを先頭に持ったツァールの徒黨のすべてのシニズムと淫蕩、ロマノフ



家、即ちロシアをユダヤ人、労働者、革命家の血で氾濫させたこの虐殺者、數百萬ヘクタールの土地を所有して、この自己および自己の階級の、「神聖な財産」を保存するためにあらゆる野蠻行為、あらゆる犯罪、任意の數の市民の破壊と絞殺を行ふところの、「同等の地主の中のこの第一人者」のすべての野蠻行為を暴露した。

『一九〇五—一九〇七年の革命なくしては、一九〇七—一九一四年の反革命なくしては、一九一七年二月革命の八日間に現はれたやうな、ロシア民族およびロシアに居住する諸民族のすべての階級のかかる嚴密な「自決」、これらの階級の相互およびツァール君主制に対する態度の決定は不可能であつたであらう\*』。

\* レーニン、第二十卷、一三一—一四頁。

これにはなほ、世界帝國主義戦争が世界史の流れを大規模に促進し、經濟的、政治的、民族のおよび國際的な世界的危機の未曾有の力を生み、そしてその急な曲り角の一つにおいて『血と泥にまみれたツァール君主制の車輪が一擧に顛覆した』ことを附け加へなければならぬ。

我々はすでに、労働者階級が革命の首魁であつて、『平和と自由のために』數百萬の大衆の先頭に立つたことを見た。二、三月革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーは、それな

くいては革命が勝利しえなかつたところの條件であつた。ブルジョア的およびメンシエヴィキ的歴史家はプロレタリアートのこの役割を縮少し、抹殺しようとしてゐる。

『プロレタリアートは革命を遂行し、彼等は英雄主義を發揮し、彼等は血を流し、彼等は勤勞者および最も貧しい住民の最も廣汎な大衆を自己の味方に引き入れた……\*』——レーニンは革命の初めに書いた。農民および兵士大衆および都市の貧者を自己の味方に引き入れた労働者階級の武装暴動によつて、ツァーリズムが正に顛覆された、といふ事實は、歴史上巨大な意義を持つてゐる。我黨による武装暴動、労働者階級と農民層との同盟のスローガンの宣傳、権力の萌芽的機關および暴動の機關としての一九〇五年におけるソヴェートのための闘争、帝國主義戦争の内亂への轉化のための闘争——そして二月革命は實にかゝる移行であつた——すべてのこれらの事實は、革命的前衛として、プロレタリアートの參謀本部としての我黨の活動が如何に巨大な意義を有したかを示してゐる。それがために我黨が多年日和見主義者に對して闘争したこれらおよびその他の革命的スローガンは、深く大衆の意識に入つた。ツァーリズムの警察の追求、特に戦争中におけるそれは、我々の黨組織を解體させた。それにも拘らず二月革命の前夜および革命中における大衆に對する我黨の觀念的および組織的影響は巨大であつた。



\* レーニン、第二十卷、二二—二四頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

ベトログラードの黨組織および特にヴィボルグ黨委員會（それは二月二十五日ペテルブルグ委員會の逮捕と關聯して實際においてその機能を遂行した）は、労働者の同盟罷業運動を直接指導し、闘争に組織を與へ且つ同盟罷業の武装暴動への移行を助長した。

ボルシェヴィキは闘争の前衛のうちにあつた。レーニンはかう書いた——

「……我黨は、すでに一九一四年における我々の代議士の逮捕およびシベリアへの流刑にも拘らず、ペテルブルグ委員會が戦争に反對し、またツァーリズムに反對する戦時における自己の非法的活動のために受けた絶望的な追求にも拘らず、大衆と共にあり、革命的プロレタリアートと共にあつた\*」と。

\* レーニン、第二十卷、二五頁。

アー・シュリャブニコフはその著書『十七年』において革命の純メンシェヴィキ的特徴づけを與へた。そしてこの書において彼は二—三月革命を自然發生的過程として描き出し、そこではボルシェヴィキ黨の組織的役割が彼において全く消滅してをり、そこでは彼は、プロレタリアートは一九一七年十月前には決して主<sup>ヘゲモン</sup>導者ではなかつた等々といふが如きことにまで言及してゐる。だが實

際において事情はどうであつたか？

ボルシェヴィキの方針に對抗して、當時の中央委員會局委員の一人シュリャブニコフは\*、メンシェヴィキ的戰術を實現しようとした。工場の代表者、労働者—ボルシェヴィキが労働者の即時の武装と民兵の即時の組織とを固執したのに反し、シュリャブニコフは、労働者を武装するのではなくて、兵士を獲得しなければならぬ、と聲明した。しかしこれはシュリャブニコフの『方針』であつて、黨中央委員會局の方針ではなかつた。

\* 中央委員會局は同志モロトフ、ザルツキー、およびシュリャブニコフから成り立つてゐた。

黨、労働者—ボルシェヴィキは大衆の先頭に立つてゐた、そして労働者の革命的進出が、ボルシェヴィキのスコロガンの下に行はれたことは、それによつて説明されなければならぬ。ボルシェヴィキは、労働者を武装し、ツァーリズムに對する武装的闘争を展開し、そして自己の戰闘的活動によつて軍隊をプロレタリアートの味方に引き入れよ、といふレーニンの指示を實際に實現したのである。



## 二月革命における自由主義的ブルジョアジーと西 歐資本家の役割

労働者階級は革命の主導者であり、農民層は彼等の同盟者として進出した。しかしツァーリズムに勝利したこの推進力と並んで、二月革命には、革命ではなくて、宮廷改革を希望した自由主義的ブルジョアジーと西歐資本家が参加した。

レーニンは第一の『遠方からの手紙』において二度力説してゐる。『……革命がかくも急速に且つかくも——外面上、表面的に一瞥して——「根本的に」勝利したとすれば、それはたゞ非常に獨特の歴史的情勢の故に、全く異つた流れ、全く異つた階級的利益、全く對立的な政治的および社會的志向が、一緒に融合し、而も著しく「友誼的に」融合したからである。即ち、帝國主義戦争の繼續のために、ミリーコフおよびグチコフの一派を権力の奪取に突き進めたところの、英佛帝國主義者の陰謀……だが他方では、パンのため、平和のため、眞正の自由のための革命的性質を有する深刻なプロレタリア的および人民大衆的（都市および農村のすべての最も貧しい住民の）運動\*』。

\*レーニン、第二十卷、一六一—一七頁。

プロレタリアートと農民層とは戦争に對して、ツァーリズムに對して闘争した。労働者階級にとつてツァーリズムに對する勝利はプロレタリアートの獨裁のための直接の闘争の道を開いた。自由主義的ブルジョアジーは常にツァール政府を支持し、戦争が彼等に新資本を投ずる可能性を與へるだらうと期待した。しかしツァールの軍隊は敗北について敗北を喫した。ツァール政府とラスプーチンを頭首とするすべての宮廷の徒黨は、成長しつつある革命を恐れて、ドイツとの單獨（聯合國から離れた）講和を結ぼうとし、言葉の上で、コンスタンチノーブル、アルメニア等々の占領を放棄することに同意した。聯合國から離れて講和を結ぶことは、國內における革命運動を片附けるために、ツァールの徒黨に必要であつた。

ドイツと單獨講和を結ぼうとするツァール政府の企圖と國內における一般的危機の成長とは、ブルジョアジーの不滿を喚び起し、ブルジョアジーをツァーリズムに對して反對派的たらしめた。ブルジョアジーがかゝる單獨講和を恐れたのは、戦争中彼等によつて獲得された數十億の利益をこれによつて放棄しなければならず、新市場の獲得を放棄しなければならなかつたからである。自由主義的ブルジョアジーはプロレタリアートの革命的進出を恐れ、そして革命を許さず、それを



豫防し、宮廷改革を行ひ且つ『味方』を権力に就かしめよう、と何よりも多く努力した。ブルジョアジーは君主制を保存し、そしてたゞ権力をニコライからミハイル・ロマノフへ移動せしめようとした。こゝにロシアの帝國主義的ブルジョアジーの指導者グチコフが宮廷改革案について物語つた言葉がある、『本營とツァールスコエ・セロとの中間の線路において皇帝の列車を占領し、次いでこのペトログラードにおいて期待することが出来る部隊によつて現在の政府を逮捕し、次いで改革や、政府を形成すべき人物について宣言すること』。

西歐の資本主義諸國（イギリス、フランス）の代表者もまたこの時におけるツァール政府の政策に對する不満を發言した。

西歐の資本家達は『ロシアを自己の帝國主義的目的のための副業と見た』（スターリン）。しかしツァール政府は單獨講和に傾き始め、そしてイギリスおよびフランスの帝國主義政府は、たゞ自己の戦線へ敵の勢力を引き延ばしたのみならず、聯合軍を増援した數十萬のロシアの兵士をフランスへ送つたところの、ロシアの如き同盟者を戦争において失ふことを恐れた。

さればこそ西歐の資本はロシアの自由主義的ブルジョアジーが宮廷改革を行はうとするのを支持したのである。『自由主義的ブルジョアジーと聯合國の資本とは大なる戦争のために小さな革命

を欲した』（スターリン）。プロレタリアートと農民層とは自己の革命的進出によつてロシアのブルジョアジーと西歐の資本との計畫を破綻させた。

### 労働者および兵士代表ソヴィエトと臨時政府。二重支

#### 配こそその社會的根據

叛亂したプロレタリアートは労働者および兵士代表ソヴィエトを設立した。一九〇五年の革命は、ソヴィエトが武装暴動の機關と新しい革命的權力の萌芽であることを示した。ソヴィエトの觀念は労働者大衆の中に生きてゐた、そしてペテルブルグの労働者はこの組織をツァーリズムの顛覆の瞬間に設立したのである。一九一七年二月二十七日労働者および兵士代表ソヴィエト——労働者階級と農民層との革命的獨裁の機關が會議を開き始めた。しかしこのソヴィエト、その執行委員會の先頭には（若干のブルジョアキを除いて）、小ブルジョア黨の代表者、即ちメンシエヴィキや社會革命黨員が立つた。

地下で活動したボルシエヴィキ黨の活動分子は、反戰的、革命的活動のために、追求され、逮捕され且つ流刑された。防衛主戰論的立場を取つたメンシエヴィキや社會革命黨員はたゞ追求されな



かつたのみならず、支配階級は彼等を保護さへした。二月革命時代にボルシェヴィキ黨の指導者ヴェ・イー・レーニンは亡命中であつた。ボルシェヴィキの地下的活動の指導者同志スターリン、スヴェルドロフその他はシベリアにをり、そして黨組織の指導は若干弱められてゐた。現存したボルシェヴィキ勢力は大衆運動の直接的指導、ペテルブルグの街路および廣場における革命の勝利のための闘争に従事した。だがこの時軍事革命委員會『労働者グループ』の成員（メンシヴィキと社會革命黨員）その他の小ブルジョア黨の代表者は、タウリド宮殿にあつて、そこにおいて労働者および兵士代表ソヴェートの成立を宣言した。

武装人民、即ち労働者と兵士は、自己の代表者をソヴェートへ送りつゝ、それを人民的權力機關と見た。メンシヴィキと社會革命黨員は、大衆の意識および組織の不十分のために、ソヴェートの指導に動員された。彼等は、大衆の革命的壓力を考慮して、兵士に市民権を提供したところのペトログラード・ソヴェート命令第一號の如き決議を採用しなければならなかつた。しかしメンシヴィキ的ソヴェート指導は、——自己の小ブルジョアの本質の故に——たゞブルジョアの政策以外の政策を實行することができず、そして權力をブルジョアに譲渡するために、それに依存するあらゆる手段を取つた。

それと同時に自由主義的ブルジョアは、革命が勝利したことを明白な事實と認め、そのヨリ以上の發展を阻止することを志して、二月二十七日、第四國會議長君主主義者ロジャンコを頭目とする『國會臨時委員會』を形成した。『臨時委員會』は臨時政府の構成を定めた。

自由主義的ブルジョアの援助によつてソヴェートの漸進的指導が行はれ、そして國會臨時委員會と労働者および兵士代表ソヴェート執行委員會との共同會議において、一九一七年三月二（十五）日、まだ二月革命前にニコライ二世がツァール政府の首相に定めたリヴォフ公爵を頭首とするブルジョアの臨時政府が形成された。臨時政府の中へは『民主主義』の代表者として（ソヴェート執行委員會の承認を得て）社會革命黨のケレンスキーが入つた。メンシヴィキと社會革命黨員とはブルジョアの權力——臨時政府を強化するために、彼等に従屬してゐるあらゆる手段を盡した。

ツァール政府に代つてブルジョアによつて組織された臨時政府は、何ものであつたか？ これは新しい階級——ブルジョアと資本家的地主との代表者であつた。ブルジョアは經濟的にはすでに久しい以前から國を支配してゐたが、政治的には戰爭中に組織されたのであつて、その時專制政治は、戰爭を處理することができないで、ブルジョアに譲歩することを餘儀な



くされ、ゼムストヴ<sup>オ</sup>および都市會議、軍事工業委員會等々の援助によつて自由主義者の組織を助長した。

『……一九一七年二月三月革命前にはロシアにおける國家權力はたゞ一つの舊い階級、即ちニコライ・ロマノフに率ゐられるところの、農奴制擁護論者の『貴族的』地主的階級の掌中にあつた。この革命の後權力は他の新しい階級、即ちブルジョア<sup>シ</sup>の掌中にある\*』。他の個所でレーニンは述べてゐる、『……この政府は人物の偶然的な集合ではない。これは、ロシアにおいて政治的權力に高められた新しい階級、久しい以前から經濟的に我國を支配してゐる資本家的地主とブルジョア<sup>シ</sup>の階級の代表者である。……\*』。『權力が資本家黨の掌中に獲得されたのは、この階級が富と組織と知識との力を掌中に持つてゐたからである\*\*\*』と。

\* レーニン、第二十卷、一〇〇頁。

\*\* 同上、一七頁。

\*\*\* 同上、六九頁。

事實上正にこの臨時政府が權力を掌握した。

しかしブルジョア政府と並んで労働者および兵士代表ソヴェトもまた成長した。

實際においてこの時期における労働者および兵士代表ソヴェトは何物であつたか、その役割、

その權力、臨時政府に對するその關係はどうか？ レーニンは自己の『プロレタリア黨の綱領草案』の中に、一九一七年二月以後作り出された二重軍配の『階級的意義』を次の點に見てゐる——

『……一九一七年三月のロシア革命はたゞツァール君主制全體を掃蕩したのみならず、たゞすべての權力をブルジョア<sup>シ</sup>に移したのみならず、プロレタリアートと農民屬との革命的民主主義的獨裁にまで全面的に到達した。ペトログラードその他の地方の労働者および兵士代表ソヴェトこそは、正に上述の階級のかゝる獨裁（即ち法律に依據しないで、武装住民大衆の直接の力に依據するところの權力）である……』

『……すべてのことによつて判断すれば、大多數の地方ソヴェトの信頼を博してゐる労働者および兵士代表ペトログラード・ソヴェトは國家權力をブルジョア<sup>シ</sup>とその臨時政府に自發的に讓渡し、臨時政府に優位を自發的に讓歩し、政府の支持について協定を結んだ後、憲法議會の召集に對する監視者、統制の役割のみに止まつてゐる（憲法議會の召集期を臨時政府は今まで發表さへしなかつた）\*』。

\* レーニン、第二十卷、一一三—一一四頁。



かくして、二つの獨裁、即ちブルジョア階級の獨裁とプロレタリア階級の獨裁（労働者および兵士代表ソヴェート）との排他的に獨特の絡れあひが現はれた。かゝる二重支配は久しく維持されえたであらうか？ 勿論、否。ブルジョア階級が人民権力の機關としてのソヴェートの意義を無に歸せしめることに努力したのに反して、我黨の任務は、卒抱強い活動によつてブルジョア権力の顛覆を準備し、第二段階のため、社會主義革命のための闘争の必要を大衆に説明することにあつた。

レーニンが過渡的段階として特徴づけた状態が作り出された。それは、ツァール君主制が『破壊されたが、打ちのめされてゐない』ことにあつた（レーニン）。掠奪的帝國主義戦争を『勝利の終結』まで繼續することに關心を持つてゐた十月黨的カデットのブルジョア臨時政府は、権力を保持することができさへすれば、人民に最大限の讓歩と贈物とを約束することを餘儀なくされた。そしてそれと並んで『……労働者および兵士代表ソヴェート……』——労働者政府の萌芽、すべての最も貧しい住民大衆、即ち平和、パン、自由を得ようと努力しつゝある住民の十分の九の利益の代表者\*』が存在した。

\* レーニン、第二十卷、一八頁。

勝利した労働者や農民が自發的に権力をブルジョア階級に渡したことは、何によつて説明すべきか？

『プロレタリア黨の綱領草案』においてレーニンはこれを次の如く説明した。即ち第一に、革命は『……未曾有に多數の俗物を一度に運動に引き入れた。すべての眞實の革命の主要な、科學的な、そして實際的の政治的な徴候の一つは、政治生活、國家機構への活潑な、獨立的な、實際的な参加に移るところの「俗物」の數の非常に急速な、急激な、激烈な増加にある。』

『ロシアでもまたさうだ。ロシアは今や煮えだぎつてゐる。政治的に十年間眠つてゐたところの、ツァーリズムの恐るべき抑壓や地主および工場主のための徒刑的労働によつて政治的に忘れられてゐたところの數百萬労働者および數千萬人が、長夜の眠から覺めて、政治に引き入れられた。だがこの數百萬労働者および數千萬人は何人であるか？ 大部分は小經營主、小ブルジョア、即ち資本家と賃銀労働者との中間に立つ人々である。ロシアは全ヨーロッパ諸國のうち最も小ブルジョア的な國だ。巨大な小ブルジョア的な波はすべてを蔽ひ、たゞその數によつてのみならず、觀念的にもまた意識的プロレタリアートを壓迫した（力點は筆者のもの——ヤロスラフスキー）、即ち政治に對する小ブルジョア的見解を非常に廣汎な労働者社會に感染させ且つそれを巻きこんだのである\*』。



正にこの小ブルジョア大衆の影響とその『……資本家に對する輕信的な無自覺的な態度とによつて』、ベトログラード・ソヴィエトの協同的指導と共にブルジョアジーの権力が作り出されたといふ事實が説明される。今一つの原因は『……ロシアにおけるプロレタリアートの不十分な數、その不十分な意識と組織\*\*』とであつた。

\* レーニン、第二十卷、一一五頁。

\* 同上。

小ブルジョア大衆は『正直な（正直に混迷せる）防衛的主戰論者』であつたが、メンシエヴィキと社會革命黨員とは實際に意識的な防衛的主戰論者であつた。

『……すべてのナロードニキ黨は、——とレーニンは書いた、——社會革命黨に至るまで、常に小ブルジョア黨であつた、組織委員會黨（チヘーゼ、チェレテリその他）も同様。無黨革命家達（ステクロフ\*その他）も同じく彼に降服しまたは波に打ち勝たず、打ち勝つことに成功しなかつた\*\*』と。初期に於けるメンシエヴィキと社會革命黨員とのソヴィエトにおける影響はこれによつて説明される。彼等は俗物的大衆の氣分に最も多く對應した、そしてこれから、『三月社會革命黨員』、即ち社會主義者の假面を着けた小ブルジョアの俗物が生れた。當時、如何に文字通りに數千人の俗物

が胸に赤いリボンを着け且つ社會革命黨の黨員券を取得したかを見た者は、すでに當時、この黨のすべての無原則性、すべての非社會主義性および非革命性をさへも見る事ができ、何故この黨において『秩序』の味方、社會の根本的改造の反對者を豫感して、多くの俗物がこの黨の隊伍に投じたかを見ることができたであらう。社會革命黨の影響の基礎には當時政治生活に目覺めたかなり多數の農民や兵士のこれに對する信頼があつたから、俗物の主たる大衆が正にこの黨に附き纏つたのは、不思議ではない。メンシエヴィキ黨は遙かに少い影響を持つてゐたが、勞働者階級の若干の層は初期にはまだこの黨を支持した。我々は、如何にこれらの黨が俗物的小ブルジョア大衆の中に溶けこんだかを見ることができた。

\* ユー・エム・ステクロフは當時正しい『無黨革命家』の立場を取り、如何なる黨の指令からも全く獨立して進出し、そして最も重要な問題についてホルシエヴィキに反對した。そしてこのことはレーニンおよび黨全體の側から自然の反響を喚び起した。

\* レーニン、第二十卷、一一五頁。

我黨は、レーニンが『十人のジュデクム』即ち社會裏切者『と共にゐるよりもカール・リーブクネヒトと二人きりである方がよい』と述べた戰爭中に、少數派として止まることを選んだ如く、或る時機には少數者として止まることを選んだ。大衆の正直な防衛的主戰論の情勢下に分離した、



階級の意識的先進的少数派は、自己の革命的立場へ労働者階級の大多数を獲得するために闘争を行つた。我黨は、メンシエヴィキや社會革命黨員が非常に喜んで進んだブルジョアジーとの協調——何故なら彼等は常に進行しつゝある革命を純ブルジョア革命と看做し且つこの革命の指導者、主導者をプロレタリアートにおいてではなくて、ブルジョアジーにおいて見たから——に對して、常に敵對的態度を取つた。我々はすでに、一九〇五—一九〇七年にメンシエヴィキが、革命がブルジョア革命である以上、ブルジョアジーが權力を掌握しなければならぬ、といふやうに議論したことを知つてゐる。

また二月革命の後においても、これらの小ブルジョア黨の獨立的政治的指導の完全な無能力、自由主義的ブルジョアジーへのそれらの完全な從屬は、權力をブルジョアジーへ讓渡し、移讓する政策を彼等に暗示した。『……それらは労働者の意識を暗くして、それを明るくせず、ブルジョアの幻影を吹きこんで、それを反駁せず、大衆に對するブルジョアジーの影響を強化して、この影響から大衆を解放しない\*』すでに戰爭中メンシエヴィキと社會革命黨員と防衛的主戰論者は帝國主義的ブルジョアジーの補助者の役割を演じ、軍事工業委員會へ労働者を引入れ、戰爭中に階級平和を擁護し、ロシアのブルジョアジーの側からの戰爭の遂行を『民主主義と文化』の全面的勝利

のためにドイツの帝國主義を片附ける必要があるといふ議論の如き、特殊な、似而非高級議論によつて肯定した。今やメンシエヴィキと社會革命黨員とは臨時政府を人民政府として人民に提示する任務を引き受けた。労働者および農民代表ソヴィエトの活動と臨時政府の活動とを調和すべき『連絡委員會\*\*』が設立された。けれどもこの連絡委員會は殆ど全くブルジョア臨時政府に從屬してゐた。

\* レーニン、第二十卷、九五頁。

\*\* ステクロフ、スハノフ、チヘイゼ、フィリッポフスキー、スコメレフは労働者および兵士代表ソヴィエトから、リゾフ、テレシチエンコ、ネクラソフは臨時政府から。

ボルシエヴィキ黨は新しき情勢のすべてのこれらの事實を考慮しなければならなかつた。辛抱強い説明によつて大衆とソヴィエトの多数派とを獲得し、協調的な黨を孤立させ（大衆なしに残し）、ソヴィエトの小ブルジョアの指導によつて支持される臨時政府の反革命の本質を暴露しなければならなかつた。新しき情勢を考慮しつゝ、レーニンはプロレタリア黨にこの情勢から生ずるその當面する任務を指示した。『……プロレタリアートは組織されてゐず、弱く、無自覺である。

『だからすべての任務は、大衆を眠らし、彼等にブルジョアジーへの信頼を注ぎこむところの小ブルジョアの指導者、謂ゆる社會民主主義者（チヘイゼ、チエレットリ、ステクロフ）と闘争する



ことにある\*』と。

\* レーニン、一九一七年四月三日『政治的任務に關するテーゼの草稿』、一九三三年一月二十一日『プラウダ』に發表されたもの。

### 黨の新しい態度の時期 (三―四月)

二月革命と二重権力によつて作り出された情勢の特性は、黨の『新しい態度』を要求した(スターリン)。黨の幹部には新しい複雑な情勢の中において、闘争の新しい條件の下において學び且つ解剖するために若干の時間が必要であつた。革命の日に監獄や流刑地に散在せしめられてゐた彼等は、これを『一氣に』なし遂げることができなかつた。……しかしこの複雑な情勢の中においてもまたボルシエヴィキ黨の極めて大なる力、正しい方針を見出すその能力は現はれた。黨は二月革命後、レーニンの到着前に、『手さぐりで』新しい態度へ向つて進んだ。『これは、——とスターリンは書いた、——ロシア史における最大の急轉であり、我黨の歴史における未曾有の轉換であつた。直接の顛覆といふ舊い、革命前の綱領は明瞭であり確實であつたが、それはすでに闘争の新しい條件に適しなかつた。政府は防衛的主戰論者の影響下にあつたソヴィエトと結びついてゐたから、今やすでに政府の顛覆に直接進むことができなかった、そして黨は政府に對しても

ソヴィエトに對しても力不相應の戦ひを行はなければならなかつたであらう。しかし臨時政府は帝國主義の政府であつたから、臨時政府の支持の政策を行ふこともできなかつた。闘争の新しい條件の下における黨の新しい態度が必要であつた。黨(とその多数派と)はこの新しい態度へ手さぐりで進んだ。それは平和の問題において臨時政府に對するソヴィエトの壓迫の政策を取り、そしてプロレタリアートと農民層との獨裁といふ舊いスローガンからソヴィエト權力といふ新しいスローガンへ一舉に前進しようとはしなかつた。この中途半端な政策は、ソヴィエトをして平和に關する具體的な問題において臨時政府の眞實の帝國主義的性質を熟視せしめ且つそれによつて兩者を切り離すことを考慮してゐたのである\*。レーニンの到着と共に、一九一七年四月四日の有名なテーゼの發表と共に、黨はこの新しい態度を獲得した。

\* スターリン、反對派について、一〇七頁。

黨またはその多数派がこの時期に半メンシエヴィキ的立場を取つた、といふトロツキーの主張は、黨に對する厭ふべき誹謗である。個々の黨員には動搖があり、誤謬があつた。しかし全體としての黨は急速に正しい道に出で、ボルシエヴィキ黨として止まり、この初期にカメネフが中央委員會委員としてなした防衛主戰論的右翼的誤謬に對して決定的に闘争した。一九一七年三月協議會にお



いて防衛的主戦論者のグループ——セヴルーク、エス・ヴォイチンスキーその他数名——は、正に黨がその壓倒的多数において正しい道にあつたが故に、ボルシエヴィキの隊伍から追放された。これについてはペー・セヴルーク自身が一九三二年一月二十七日附『ブラウダ』にかう書いた、『一九一七年三月および四月、黨内において全くいふに足らぬ大いさをなしたボルシエヴィキの少数のグループ（私をも含めて）は、ブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生の問題において降服者の立場を取つた……現實において降服者のグループは全露ソヴィエト協議會（一九一七年三月末および四月初め）のボルシエヴィキグループにおいて全く孤立してゐた。フラクシヨンの壓倒的多数はすでに當時（レーニンの到着前）、同志カメネフや、フラクシヨンにおいてあれやこれやの形態で臨時政府の支持を曳きずり、戰爭に對して非和解的にレーニンの態度を有する黨と衝突しようとする個々のフラクシヨンの成員の他のすべての試みに、すべてのフラクシヨン協議會においてあらゆる果斷と決定性を以て反撃を與へた\*』と。

\*『ブラウダ』一九三二年一月二十七日第二十六（五千百九十一）號。

三月五日『ブラウダ』の第一號が発行された。同志スターリンとカメネフが流刑地から到着後間もなく編輯部に編入された。モスクワでは機關紙『ソチアール・デモクラート』が、エカテリ

ノスラフ（今日のドネプロベトロフスク）では『ズヴェズダー』が発行され始めた。サマラ、サラトフ、カザンその他幾多の都市にボルシエヴィキの機關紙が生れた。この時期に、レーニンの到着前に、それに對して他の中央委員會委員が闘争したカメネフの誤謬が黨の隊伍において抗議を喚び起したことを指摘しなければならぬ。一九一七年三月十五日『ブラウダ』第九號にカメネフは論文を掲載し、その中でかう書いた、即ち我々のスローガンは、臨時政府をして公然と平和のために進出することを餘儀なくさせることを目的とする『臨時政府の壓迫』だ。しかし臨時政府がさうしない限りは、『各人は自己の位置に止まつてゐなければならぬ』。『軍隊が軍隊に對立してゐる時、その一方に、武器を置いて家路に就くと提議するが如きは、最も愚かな政策であらう。この政策は平和政策ではなくて、奴隸政策であり、自由な人民が憤慨して反駁する政策であらう。否、彼は自己の位置に直立して、銃弾には銃弾を以て、砲弾には砲弾を以て答へるであらう』と。臨時政府に對してはカメネフは『と同じだけ』協力といふ見地を擁護した。彼は『ブラウダ』第八號にかう書いた、『我々はそれを舊き支配の最後の清算において支持しよう、臨時政府のあらゆる不徹底さを批判し且つ暴露しよう』と。

カメネフの論文が黨員の壓倒的多数ではないまでも、かなり多数によつて敵意を以て受取られ



たことは、いふまでもない。一般にボルシェヴィキの中における防衛主戦論的または半防衛主戦論的気分はたゞ例外としてのみ見られた。しかしカメネフにおいてはこの動搖は偶然ではなかつた。それは、彼が戦争中に取り、そしてまだレーニンの到着前に發展させようと試み且つレーニンの到着後完全に展開したところの、彼の右翼日和見主義的立場から生じたのである。これらの論文に對しては多くの黨員が抗議し、特にペトログラード黨委員會執行委員會が抗議した。カメネフのこれらの論文は、ソヴェトを人民の完全な権力の機關に轉化することに黨を向はしたところの、ボルシェヴィキ的『ブラウダ』のすべての調子、すべての精神に反したが故に、正に抗議を喚び起したのである。かくてまだレーニンの到着前に『ブラウダ』にはスターリンの論文『労働者および兵士代表ソヴェト』が掲載され、その中にはかう指示された、『たゞ中央および地方におけるソヴェトの強化のみが反革命に對する眞實の保證である。これらのソヴェトを強化し、それらを普遍的ならしめ、それらを人民の革命的権力機關としての労働者および兵士代表中央ソヴェトを先頭にして互ひに結びつけること、——これが革命的社會民主主義者が活動しなければならぬ方向だ』と。

三月十八日の『ブラウダ』における論文『ロシア革命の勝利の條件について』の中で、同志スターリンはまた、ボルシェヴィキ黨が人民権力の機關としての労働者、兵士および農民代表ソヴェトの強化のために闘争するであらう、といふことを力説してゐる。たゞ中央のみならずまた地方におけるソヴェトの強化につれて、革命が普く強化され、臨時政府がそれにとつて『適法的な楯および掩蔽』であるところの反革命が制壓されるであらう、と。同志スターリンは、労働者を武装する必要と、革命の深化のための今後の闘争にとつて労働者の衛兵隊（赤衛軍）を作る必要を指摘した。『そして革命が常にその奉仕に準備してゐる武力なくしては勝利しえないといふ命題が正しいとすれば、我々の革命もまた、革命の利益と血を以て結ばれた自分自身の衛兵なしにはすまないであらう。』

『労働者の即時の武装、労働者衛兵——これが革命の勝利の第二の條件である\*』。

\* スターリン、十月への道、一〇頁

中央委員會局、その編輯部において同志スターリンが指導的役割を演じた中央委員會の機關紙としての『ブラウダ』は、カメネフが當時『ブラウダ』における諸論文において曳きづらうとした彼の右翼日和見主義的方针に對して闘争した。ヴェーイー・レーニンの到着、一九一七年四月四日の有名なテーゼの發表は、黨およびその指導部において最も完全に支持された。カメネフのグ



ループは党内において孤立化され、それは自己のために、一つの組織をも持たなかつた。

一九一七年四月四(十七)日のヴェイ・レーニンのテ

ーゼ

レーニンが二三月革命および新たに発生した権力の階級的性質に關する最初の、まだ不完全な報道を受取つた時、如何に正しく且つ正確な評價を與へたかは、我々がすでに見たところである。國外にありながら、『遠方からの手紙』の中で、レーニンは、『今や作り出された状態』は『革命の第一段階から第二段階への過渡的段階\*』だ、と書いた。そしてレーニンは同じ手紙の中で次のスローガンを『提起する』ことを勧告した、『……労働者諸君、諸君はツァーリズムに對する内亂においてプロレタリア的、人民的英雄主義の奇蹟を表はした、諸君は革命の第二段階における自己の勝利を準備するために、プロレタリア的、全人民的組織の奇蹟を表はさなければならぬ\*』云々。

\* レーニン、第二十卷、一八頁。

\*\* 同上、一九頁。

レーニンはすでに當時革命の第二段階のため——プロレタリアートの獨裁獲得の闘争のためにプロレタリアートの武裝の任務を提起した。

四月三(十六)日夜レーニンはベトログラードへ到着した。この到着は『黨の新しい態度』、ボルシエヴィキの行動の明白な方針の最終的形成のために巨大な意義を持つてゐた。レーニンはすべての問題の鋭い、截然たる提起によつてボルシエヴィキの立場に明瞭性と決定性を與へ、例へばカメネフの如く、基本的な問題においてボルシエヴィキ的立場に立つてゐなかつた黨員に對して反撃を與へた。翌四月四(十七)日、レーニンは自己の『テーゼ』を以て初めてボルシエヴィキおよびメンシエヴィキの集會に進出した。この集會には、労働者および兵士代表ソヴェエトの協議會に來た多くの代議員が出席してゐた。だからレーニンの見解はベトログラードの活動家に對してのみならず、地方や戦線から來た活動家に對しても説明されたのである。

四月四(十七)日のテーゼは最大の重要性を有する文書であつて、情勢が全く變化したが故に、新しい態度を要する瞬間における我黨の戦略および戦術のすべての最も重要な問題に對して、有かつ明瞭な回答を與へた。

四月四日のテーゼは社會主義革命の勝利のための闘争において明白な立場を與へた。



戦争の帝國主義的、掠奪的性質について述べつゝ、レーニンは帝國主義戦争に對するボルシェヴィキの見解を簡潔に記述し、プロレタリアートはたゞプロレタリアートと貧農との掌中への權力の移行の條件の下において、實際に一切の併合の放棄の條件の下において、資本の利益との實際に完全な分離の條件の下においてのみ、革命戦争に同意することができる、と聲明してゐる。帝國主義戦争と資本の利益との聯關に鑑み、レーニンは、『資本の廢止なくしては眞に民主主義的な平和を以て戦争を終結することができない』ことを労働者、農民および兵士に説明すべきことを要求した。戦線における我軍と我軍の交戦者との交驩のスローガンは大なる意義を持つてゐた。

テーゼは、不十分な意識性と組織性との故にまだブルジョアジーへの勤勞者の信頼の存在する革命の第一期の過渡的性質を指摘した。プロレタリアートと最も貧しい農民層とにする權力の奪取へ勤勞者大衆を準備するために、我々はこの時期の特殊な諸條件を考慮し且つ利用しえなければならぬ。

カメネフの立場——『と同じだけ支持する』——と對抗して臨時政府を少しも支持しないこと。カメネフの立場はテーゼにおいて『幻影を播くところの許すべからざる立場』として特徴づけられてゐる。

レーニンのテーゼは、労働者および兵士代表ソヴェトにおいて我黨は今のところまだすべての小ブルジョア黨のプロックに對して弱い少數派であるといふ事實の承認から出發してゐる。さればこそ我々の任務は、労働者および兵士代表ソヴェトが革命的政府の唯一の可能な形態である、といふことを大衆に説明することにあるのだ。ソヴェトは我黨の辛抱強い大衆的活動によつて征服されなければならぬ。

レーニンはメンシエヴィキや社會革命黨員の議會主義的民主共和國の要求に對抗して、『下から上まで、全國にわたる』労働者、日傭人および農民代表ソヴェト共和國の要求を提起してゐる。土地問題については我々は、すべての地主所有地の沒收（即ち無賠償の取上げ）、國內におけるすべての土地の國有化、および日傭人および農民代表地方ソヴェトの處理へのそれらの移譲といふ我々の舊いボルシェヴィキ的要求を支持しなければならぬ。日傭人代表ソヴェトと大領地からの模範社會化經營の設立に黨の特別の注意が向けられなければならぬ。

レーニンは國內のすべての銀行の單一社會化國立銀行への合同と労働者および兵士代表ソヴェトの側からのそれに対する統一の實施の要求を提起した。すべてのこれらの方策が社會主義革命への移行を巨人的に促進しなければならないことを考慮して、レーニンは、彼が決して社會主



義の即時の『實施』を説教しないこと、現在の瞬間においてはたゞ『社會的生産と生産物の分配のために、労働者および兵士代表ソヴェートの側からの統制に』移ることだけが必要だ、といふことを力説した。

社會主義革命へ向ふこと、ブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生のための闘争、新しきスローガン、即ち『プロレタリアートと貧民層との獨裁』——これらの任務が一九一七年四月四日のレーニンのテーゼに明かに提起されてゐる。

テーゼの中には黨大會の即時の召集、綱領および黨の名稱の改變および修正の要求が提起されてゐる。『今や、——と彼はいつた、——汚れたシャツを脱ぎ棄つべき時だ、今や潔白なものを着るべき時だ\*』と、そして社會民主主義者の名は特に帝國主義時代に俗惡化され且つ汚辱されたものとなつた、と考へた。

\* レーニン、第二十卷、一三五頁。

しかしたゞロシアにおけるボルシェヴィキ黨だけが問題であつたのではない。第二インターナショナルは『惡臭を放つ屍』だ。新インターナショナルを設立しなければならなかつた。そしてレーニンはインターナショナルの創立、即ち共產インターナショナルの設立を要求した。この問題

は、我々が見たやうに、レーニンによつてすでに革命前に提起された。一九一七年三月十六日アー・エム・コロンタイ宛の手紙の中に、レーニンはかう書いてゐる、『……我々は以前の如く自己の特殊な黨を設立し且つ義務的に合法活動と非合法活動とを結合しよう。決して再び第二インターナショナルの型によらないで！ 決してカウツキーとではなしに！ 必ず一層革命的な綱領と戦術……共和主義的宣傳、帝國主義に對する闘争、國際プロレタリア革命と「労働者代表ソヴェートによる」(だがカッテト的詐欺師によらない) 権力の奪取を目的とする以前の如く革命的な宣傳、煽動および闘争\*』。

\* レーニン、第二十卷、五一六頁。

ボルシェヴィキの中における可能的な『統一的』企圖に對して警戒しつゝ、レーニンはかう書いた、『私見によれば今や重要なことは、社會愛國主義者(或ひはもつと危険なことには、組織委員會、トロツキー一派の如き動搖者)との愚劣な「統一的」企圖に巻きこまれないで、徹底的に國際主義的精神で自己の黨の闘争を繼續することだ\*』。

\* レーニン、第二十卷、七頁。

四月四(十七)日のレーニンのテーゼはたゞ我黨全體に對してのみならず、我々の敵に對して



もまた巨大な印象を與へた。メンシエヴィキは直ちに、『危険に瀕した革命』といふ警告を以て始まつた檄を以て労働者に向つた。一體何が革命を脅したか？ 打ちのめされなかつた君主制の遺物か？ 革命の頭を振り曲げようとするブルジョアジーの志向か？ メンシエヴィキと社會革命黨員のブルジョアジーとの協定か？ 然らず！ メンシエヴィキの意見によれば、ボルシエヴィキが『すべての権力をソヴェトへ』といふ『危険な』スローガンを提起したがために、革命は危険に瀕したのである。勿論メンシエヴィキは交驩に反對であり、メンシエヴィキは臨時政府の奸計を軍隊に説明することに反對であり、メンシエヴィキはプロレタリアートと貧農層とによる権力の奪取に反對である、何故ならこれは『馬鹿らしい』、無意味な恐怖、一般的な相互的不満および怨恨を喚起すからである。『我々メンシエヴィキ社會民主主義者は、常に労働者諸君に、レーニン派と無政府主義者の戦術の破壊性を警告して來た』とメンシエヴィキは書いた。ブレハーノフは自己の新聞『エディンストヴオ』に論文を掲載し、その中においてレーニンの演説を『有害な演説』と稱した。ブレハーノフは、『ひとりレーニンだけが革命の外に殘されてゐるが、我々はすべて自己の道を進んでゐる』と聲明したメンシエヴィク・チヘイゼの言葉を引用した。

けれどもボルシエヴィキの中にも、レーニンのテーゼに同意しない右翼日和見主義者のグループがあつた。黨全體はテーゼを大なる満足を以て採用した。何故ならそれは眞に動員するスローガンを與へ、闘争計畫と明瞭な目的とを與へたからである。

四月十二日には、レーニンのテーゼを採用したベトログラード全市會議が開かれ、それに次いで他の組織もまたこのテーゼを採用した。そして四月末にはテーゼは全露黨會議によつて採用された。この會議は『ベトログラード會議の仕事を全露的規模において完成し、單一の黨の立場の周圍に黨の十分の九を結成した』（スターリン）。

レーニンのテーゼはプロレタリアートの獨裁の勝利のための闘争における黨の最も重要な綱領文書であつた。レーニンのテーゼは一九一七年の革命の歴史および我黨の歴史において極めて重要な役割を演じた。

### 黨の四月會議。革命におけるプロレタリアートの任務 の評價における日和見主義者との闘争

レーニンの四月テーゼに對して先づ第一にカメネフが反對した。彼は『ブラウダ』において、レーニンのテーゼは『同志レーニンの個人的意見だ』と聲明した。カメネフは、このテーゼが勞



働者および兵士代表ソヴェト代議員第一回全露協議會においてカメネフによつて宣言された臨時政府および戦争に關する決議と相違してゐることを指摘した。だからカメネフは、かう警告した――

『今後中央委員會の何等かの新しい決議および全露黨會議の決定まで、これらの決議は、我々が「革命的防衛主戰論」の腐敗的影響に對しても、また同志レーニンの批判に對しても固執すべき我々の綱領たるものであらう。』

『同志レーニンの一般的表式についていへば、それはブルジョア民主主義革命を完成されたものと認めることから出發し且つこの革命の社會主義革命への即時の轉生が考慮されてゐる限りにおいて、我々に受け入れ難いものである。この種の評價から出る戰術は、全露大會において「ブラウダ」の代表者がソヴェトの公けの指導者に對しても、ソヴェトを右へ引き摺つたメンシエヴィキに對しても、擁護したところの戰術と深刻に相違してゐる。』

『革命的社會民主黨が宣傳者＝共產主義者のグループに轉化されないで、プロレタリアートの革命的大衆の黨たることを欲し且つ最後までさうあらねばならない限りにおいて、我々は廣汎な討論において革命的社會民主黨にとつても唯一の可能なものとして自己の見地を固執することを

期待しよう\*。』

\* カメネフ、我々の意見の相違、一九一七年四月八(二十一)日『ブラウダ』第二十七號。

大略同じ見地をモスクワの同志のグループもまた擁護した(ヴェ・ペー・ノギン、アー・イー・ルイコフ)。モスクワ地方會議において憲法議會におけるボルシエヴィキの任務について報告しつゝ、同志ルーキンは事の本質において同じ見地を擁護した。即ち彼にあつては社會主義革命が問題ではなくて、たゞ民主共和國の強化が問題であつた。この見地はモスクワ組織において支持を受けなかつた。レーニンの方針に對する日和見主義者の鬭争にも拘らず、すでに四月會議の時にはレーニンのテーゼはボルシエヴィキの組織の壓倒的部分の政綱となつた。

全露ソヴェト協議會(一九一七年四月十一——十六日)において、カメネフは、臨時政府への不信に關するボルシエヴィキの決議を宣言するに際して、メンシエヴィキと共に、『ブルジョア民主主義の統一戰線を破らないこと』に賛成した。

如何なる問題がこの當時特に重大な意見の相違を喚び起したか? 『ブラウダ』におけるカメネフの論文からの前記の抜萃によつて、次に一九一七年四月全露會議における右翼の進出によつて、基本的な論争は次の諸問題について行はれたことが分る。即ち、ブルジョア民主主義は完成され



てゐるかどうか、プロレタリアートと農民層との革命的民主主義的獨裁は、すでに實現されてゐるかどうか、我々は直接社會主義革命に當面してゐるかどうか、またそれは今や我國において可能であるかどうか、この場合臨時政府に對する我々の戦術はどうあらねばならないか、がこれである。

ブルジョア民主主義革命が完成されてゐるかどうか、プロレタリアートと農民層との革命的民主主義的獨裁が實現されてゐるかどうか、といふ問題について、レーニンの次の如き見地に立つた――

『労働者および兵士代表ソヴェトはプロレタリアートと兵士との獨裁の實現である。兵士の中においては大多数が農民である。これは實にプロレタリアートと農民層との獨裁である。』と。

\* ロシア社會民主労働者黨ペトログロド全市および全露會議議事録、一九一七年四月、八頁。カギは筆者のもの――  
ヤロスラフスキー。

しかしそれと同時に排他的な、歴史上未曾有の情勢が作り出された。ロシアにおけるブルジョア革命は、権力がブルジョアの掌中にあつた限りにおいて、完成されたのである。

ボルシェヴィキのスターガンは生活によつて確認されたが、それらは別様に、一層雑多に、一層

獨立的に構成された。『この事實を無視し、忘れることは、――レーニンは言つた、――新しい、生ける現實の特殊性の研究の代りに、暗記した公式を反覆しつゝ、我黨の歴史において一度ならずすでに衰れた役割を演じた「老ボルシェヴィキ」に類似することを意味するであらう』と。ソヴェトにおいてすでに實現されてゐる革命的民主主義的獨裁についてのみこの情勢の下において語る者は、『プロレタリア階級闘争に反對する仕事に移行したものであり、それは「ボルシェヴィキ革命前珍品」アルヒーフ（老ボルシェヴィキ）アルヒーフと呼ぶことができる）へ引渡されなければならぬ』と。ボルシェヴィキ黨の方針は、ソヴェトの内部におけるプロレタリア的要素と半プロレタリア的要素とを分離せしめ、そして『プロレタリアートと貧農層との獨裁』といふ新しいスターガンの下に社會主義革命の勝利への進路を取ることである。

\* レーニン、第二十卷、一〇二頁。

\*\* 同上。

これは、レーニンがブルジョア國家の埒内における闘争が終了されたことを全く意味しなかつた。土地のため、パンのため、平和のための闘争は君主制の叩きのめされてゐない遺物と地主的土地所有とに對する闘争を要求し、それはブルジョア民主主義革命を最後まで行ふこと



を要求した。しかしこれらの任務の完全な實現のためには、労働者階級が貧農と同盟して社會主義革命のための闘争の道に立つことが必要であり、權力を完全に労働者および兵士代表ソヴェトへ移すための闘争を行ふことが必要であり、——そしてすでにソヴェトは社會主義への歩みを如何にして又何物がなしうるかを一層よく、一層實際的に、一層正しく決定してゐる。

このことからレーニンの提議した戦術が生じた。即ちすべての權力をソヴェトへ、兵士および農民大衆を自己の側に征服すること、闘争の他の段階へ——社會主義のための闘争の段階へ準備することがこれである。レーニンの意見によれば、『ブルジョア民主主義革命は社會主義革命に轉生する』。かくして社會主義革命は自己の進行中にブルジョア民主主義革命の任務（地主所有地の沒收等々）を完成する。當時カメネフや彼の支持者は我々の革命のこの特殊性を否認したのである。

この問題と關聯して他の問題もまた存在した。即ち我々は社會主義革命に直接當面してゐるか、どうか、がこれである。レーニンはすでに一九〇五年の第一革命の時代における『二つの戦術』の中にかう書いた——

『プロレタリアートは民主主義革命を最後まで遂行し、農民大衆を自己に結合し、以て専制政

治の抵抗力を撃破し且つブルジョアジーの不安定を麻痺させなければならぬ。プロレタリアートは社會主義革命を遂行し、半プロレタリア的人口要素を自己に結合し、以てブルジョアジーの抵抗力を破砕し且つ農民層および小ブルジョアジーの不安定を麻痺させなければならぬ』と。

\*レーニン、第八卷、九六頁。

戦争の初めレーニンは一九一五年『若干のテーゼ』において同じ思想を發言した。

一九一七年ロシアへの歸國の前夜、レーニンは『スイス労働者への告別の手紙』の中において、何故ロシアの如き後進國が、事態の進行によつて社會主義革命に近づいたかを説明してゐる。

『ロシアは、——と彼は書いた、——農民國であり、ヨーロッパの最も後進國の一つである。そこでは社會主義が直接直ちに勝利することができぬ。しかし貴族地主の巨大に保存された所有地の下における國の農民的性質は、一九〇五年の經驗に基いて、ロシアにおける民主主義革命に巨大な規模を賦與し且つ我々の革命を世界社會主義革命の序幕、その一段階たらしめうるのである』と。

\*レーニン、第二十卷、六八頁。

従つてすでに一九〇五年の第一革命時代に、レーニンおよびボルシェヴィキは、ロシアにおける



社会主義革命が可能である、と考へてゐたのである。最も初期の著作（一八九四年）においてレーニンがブルジョア民主主義革命の社会主義革命への轉生の觀念を提起したことは、我々がすでに見たところである。帝國主義戦争中、一九一五年に、レーニンは一國における社会主義の勝利の可能性に關する問題を提起した。トロツキーと彼の弟子達は、我々が一九一七年前には社会主義革命を可能だと考へなかつたかの如く、一九一七年に我黨が『武装替した』かの如く、問題を描き出すが故に、これを眼中におかなければならないのである。この聲明は、我黨を何等かの小ブルジョア革命的民主主義者の黨として描き出さうとする中傷的な、下らない試みに外ならない。社会主義のための我々の闘争の全史は、プロレタリアートの獨裁と社会主義の建設がその本質たる、帝國主義時代におけるプロレタリア社会主義革命の理論であるところの、マルクスレーニン主義の正しい革命的理論を常に擁護したからこそ、我々が勝利したことを證明した。

ボルシェヴィキは常に唯一の戦略的プラン、即ちプロレタリアートのヘゲモニーの下におけるブルジョア民主主義革命の勝利と社会主義革命へのその即時の轉生のために闘争した。唯一の戦略的プランと一樣ならざる戦略的スローガン、即ちブルジョア民主主義革命の段階においては、プロレタリアートと全農民層との同盟、ブルジョア革命の社会主義革命への轉生の途上においては、

中農の中立化の下におけるプロレタリアートと貧農との同盟。レーニンは四月會議において、彼はトロツキーの『永久革命』論の支持者の如く、小ブルジョア階級を飛び越えることを決して提議しないといふことを説明しなければならなかつた。『然るにもし我々が「ツァール無用、プロレタリアートの獨裁」といふならば、これは小ブルジョア階級を飛び越えることであらう』。

レーニンが四月テーゼにおいて社会主義の即時の『實施』を提議したといふ聲明は、全く正しくない、中傷的なものであつた。君主主義者から始まつてブレハーノフ、メンシエヴィキおよび社会革命黨員に至る我黨の敵のみが、我々が『即時に社会主義を實施すること』を欲してゐるかの如く、事態を描き出したのである。革命が社会主義への移行の任務を全く具體的な形態で、それがまだ何處でも嘗て提起されなかつたやうな形態で、提起した、といふことが問題であつた。

一九一七年におけるカメネフ（および彼を支持した少数者）の右翼日和見主義的誤謬は、彼がブルジョア民主主義革命と社会主義革命とを人為的に區別したこと、ブルジョア民主主義革命が社会主義革命に轉生することを理解しなかつたことにあつた。彼の意見によれば、我々はたゞこのブルジョア民主主義革命を通過してゐるのである。カメネフはたゞこの段階においてのみ農民層とのブロックを考へ、そしてこのブロックは、彼の意見によれば、臨時政府に對するソヴェエトの



統制において、臨時政府に對する壓迫において表現されなければならないのである。

カメネフの第二の誤謬は、彼の意見によれば（トロツキーの『永久革命』論と同様に）、社會主義革命への移行はプロレタリアートと小ブルジョアジー、農民層との不可避的な分離を要求するといふ點にあつた。

實際、カメネフは四月會議においてかう述べた――

『我々は労働者および兵士代表ソヴェトを我々の勢力の中心および權力の中心として語つてゐる。我々はそれが革命の中心的結び目であることを認めなければならぬ。その名稱だけでも、それがまだ完成されないブルジョア民主主義的任務がその前に横はるところの、小ブルジョアの勢力とプロレタリアの勢力とのブロックであることを示してゐる。もしブルジョア民主主義革命が完成されたならば、このブロックは存在することが出來ず、その前には何等の一定の任務も存在せず、プロレタリアートは小ブルジョアのブロックに對して革命的闘争を行ふであらう。共同活動はこの瞬間においては全く不可能であらう』<sup>\*</sup>と。

<sup>\*</sup> 一九一七年四月、ロシア社會民主労働者黨テログラード全市および全露會議議事録、五三―五六頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

カメネフは、農民層の内部に、社會主義革命のための闘争におけるプロレタリアートの同盟者でなければならぬ半プロレタリア的、貧農的層が存在することを否認した。

カメネフは右翼日和見主義の見地に立つて、黨の當面してゐる任務を理解しなかつた。労働者および農民の廣汎な層が自己の階級的地位によつて戦争に利害關係を有しないこと、彼等が『正直な防衛主義論者』、即ち誤解者であること、我々の義務は長期にわたる説明によつて、宣傳によつて彼等の頭の中におけるこの防衛主義論者的熱狂を吹き散らすことにあることを、彼は否認した。

もし我々がレーニンの見地に立つならば、――カメネフは述べた、――『……我々は政治的活動なしに止まり、我々は理論家、即ち來るべき社會主義革命に關する立派な研究を書くが、經驗されつゝある時期のためには政治家として、一定の政黨として遠ざかるところの、宣傳家たるに止まるであらう』<sup>\*</sup>と。

<sup>\*</sup> 一九一七年四月、ロシア社會民主労働者黨テログラード全市および全露會議議事録、五六頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

右翼は、小ブルジョア大衆がブルジョアジーに追隨して革命的防衛主義戰論の熱狂に降参すること



を認めることを拒絶した。我々はプロレタリア的方針を小ブルジョアの方針から解放しなければならぬ。とレーニンは教へた。『……大衆の内部における階級差別を解剖することなしに、プロレタリア大衆をも半プロレタリア大衆をも混合することこそ、防衛主戦論的疫病の条件の一つであつた。』

『プロレタリア的方針の「宣傳者のグループ」について輕蔑的に語ることは、恐らく、あまり相應しくないだらう\*。』

\*レーニン、第二十卷、一〇八頁。

右翼は、社會主義革命が西歐において勝利する以前のロシアにおける社會主義革命の勝利の可能性を否認した。同志リュコフはかう聲明した、『社會革命の動機は西歐において與へられなければならぬ。動機は革命的な兵士の手によつて西歐において生じ、そこにおいてそれは我々の革命の要塞たるべき社會主義革命に轉化するであらう。然らざれば我々の政策は小さな一塊の政策に轉化するであらう……』

『……社會主義革命の太陽は何處から昇るか？ すべての條件、俗物的水準によつて、社會主義革命のイニシアティヴは我々には屬しない、と私は思ふ。我々はこれがための力、客觀的條件を持

つてゐない……我々の前にはプロレタリア革命の問題が存在するが、我々は力を過重評價すべきではない\*と。』

\*一九一七年四月、ロシア社會民主労働者黨ペテログラード全市および全露會議議事録、七一―七二頁。

同志リュコフのこの右翼日和見主義的誤謬が、當時彼が革命の力、プロレタリアートと農民層との力を過小評價したことにあつたことは、明瞭な事實である。これは、また十月における彼の動搖に、農村における資本主義的要素や、クラーク層に對する決定的な社會主義的攻撃への過渡期における後の動搖に導いたところの誤謬であつた。

實際一九一七年四月には論争は臨時政府に對する統制について行はれた。労働者および兵士代表ソヴェト協議會においてカメネフがロシア社會民主労働者黨中央委員會局の名において、『中央および地方における臨時政府の行動に對する注意深い統制を實現し、それを舊制度の完全な清算のための最も精力的な闘争に鼓舞する』要求を提起した。ペトログラード四月會議においてカメネフはこの定式を固執した。それは否決された。レーニンとスターリンとはそれを非ボルシエヴィキ的な公式として殘酷に嘲笑した。『統制するためには、權力を持たねばならぬ』とレーニンは述べた。『よろしい、君は僕を統制せよ、僕は大砲を持つであらう。統制によつて蜜水あれ、と



彼等（資本家）はいふ。彼等は今や人民に拒絶することができないことを知つてゐる。しかし権力なくしては、統制は、ロシア革命の進行と発展とを阻止する小ブルジョアの文句だ。

一九一七年の四月會議は巨大な意義を持つてゐた。革命後初めてボルシェヴィキの會議が合法的に開かれた。黨の多くの代表者は亡命、流刑、投獄によつて多年の間分離せしめられてゐた。革命の開始後初めてここに統一的、ボルシェヴィキ的方針が作成され、戦争に對する態度や、臨時政府に對する態度や、ストックホルムにおける國際社會黨大會の召集や（黨は社會排外主義者との共同協議會の提議に對して否認的態度を取つた）、聯立政府や（黨は労働者および兵士代表ソヴェトが自己の代表者を聯立政府へ送ることに最も決定的に反對した）、黨綱領の修正や、労働者および兵士代表ソヴェトについて、決議が採用された。『インターナショナルにおける情勢とロシア社會民主労働者黨の任務』の問題については、ジノヴィエフが報告者として進出し、彼は、一九一七年夏召集される第三回チンメルワールド會議に我黨が参加すべきことを提議し、そしてこの提議は四月會議によつて採用された。しかしレーニンは自己の演説において、チンメルワールドの多数派が中央派たることを完全に暴露したこと、チンメンワールドから訣別して第三インターナショナルの組織のために精力的に活動しなければならないことを聲明した。もしチンメンワールドにおける

會議へ出席するなら、たゞ情報的な目的のためであつて、その活動への参加のためではない、とレーニンは聲明した。

#### 四月會議と農業問題および民族問題

全露四月會議は、レーニンの報告によつて採用された基本的立場——プロレタリアートと貧農層との獨裁のため、ソヴェト權力のための闘争——から出發して、また農業問題および民族問題を審議した。農業問題に關するレーニンの報告によつて、會議は、農民に直ちに地主所有地を沒收してそれを農民ソヴェトに移せ、と提議した。

メンシエヴィキと社會革命黨員とによつて指導された臨時政府は、農民に憲法議會を待て、そして、それまでは地主から土地を敢て取り上げるな、と提議した。しかしボルシェヴィキは土地のための闘争を組織し且つこれによつて農民大衆に、臨時政府とそれを支持する者が人民の敵であることを證明した。

プロレタリア革命のための闘争においては、沒收された地主の領地で模範的ソヴェト農場を組織しなければならぬところの、農業労働者と半プロレタリアートの組織を農村に設立しな



ければならぬ。黨は土地國有化の要求を提起してゐるが、この任務は、資本家の地主およびブルジョアジーより成る臨時政府によつてではなくて、ゾヴィエト權力——プロレタリアートと貧農との獨裁によつて實現されうであらう。

民族問題については、會議において同志スターリンが報告をなし、それについて活潑な討論が展開され、それにはレーニン、ジノヴィエフ、ビヤタコフ、ジェルジンスキー、マハラージェが参加した。論争は主としてすでに以前我黨内において、特に戦争中に熱烈な論争を喚び起した問題について、即ち完全な分離に至るまでの民族自決権について行はれた。報告者同志スターリンはこの要求に賛成し、委員会の副報告者同志ビヤタコフは、誤つた立場を擁護しつつ、分離に至るまでの民族自決権のスローガンに反対した。これは理論的な論争ではなかつた、この問題は、もと暴力的にロシアへ併合され、今や分離を志向してゐたところの、——ウクライナ、特にフィンランド、——そしてすでに當時自治（獨立）の問題について臨時政府と衝突してゐた（臨時政府は自治に反対であつた）ところの、幾多の國家に對する生活自體によつて、當時提起されたのである。民族問題における黨の決定的且つ徹底的な立場は、社會主義革命のための鬭争期においても、一九一七年十月權力奪取の後においても、被抑壓民族の同情を黨に確保した。

四月會議においては日和見主義的方針（カメネフ、リュコフその他の）が暴露された。四月會議の諸決議におけるレーニンの立場は社會主義革命の勝利のための我々の鬭争に明瞭な見透しを與へた。

### 第十三章 参考文献

レーニン、遠方からの手紙、第一の手紙、全集、第二十卷、一三一—二〇頁。

レーニン、我々の革命におけるプロレタリアートの任務について、同上、八七—九七頁。

レーニン、二重支配について、同上、九四頁。

レーニン、戦術に關する手紙、同上、九九—一〇八頁。

一九一七年四月會議におけるレーニンの報告とカメネフの副報告、討論および結語。一九一七年四月、ロシア社會民主労働者黨ペトログラード全市および全露會議議事録。

スターリン、十月革命とロシア共産主義者の戦術、第三章、『十月の準備期におけるボルシエヴィキの若干の基本的戦術について』、『レーニン主義の諸問題』、八三—九八頁。



## 第十四章 十月への途上における黨

### 大衆の革命的動員の時期

この時期は、同志スターリンの規定によれば、一九一七年五月―八月を包括する。『この時期の特徵的特性と認むべきものは、危機の尖鋭化と、善かれ悪しかれそれに先立つ時期に存在したところの、ソヴェトと臨時政府との間の不安定的な均衡の破壊である。二重支配は双方にとつて耐へ難くなつた……革命は動員され、反革命の動員を喚び起す。反革命は反革命でまた、革命を鞭打ち、革命的満潮の新しき波を喚び起す。新しき階級への権力の移行の問題が當面の問題となる\*』。

\* スターリン、反對派について、一一一頁。

ボルシエヴィキ黨は、四月會議のレーニンのテーゼおよび決議において明白な立場を取得した後、大衆の獲得に關する大なる活動を展開した。この時期における黨の方針は、メンシエヴィキと社會革命黨員との協調政策を暴露しつつ、彼等を大衆から隔離しつつ、我々の政策の辛抱強い説明によつて、ソヴェトにおける多数派を獲得することにあつた。二重支配からソヴェトの統一



支配に進まなければならなかつた。この時期には（七月事件前）ソヴィエトへの権利の平和的移行が可能であつた、何故ならソヴィエトは大衆の武力に立脚してゐたからである。メンシエヴィキ的、社會革命黨員的（當時における）ソヴィエトは、もしそれが臨時政府に決定的に對立したならば、労働者と農民との革命的獨裁の機關であつたであらう。ソヴィエトの内部においてボルシェヴィキはメンシエヴィキと社會革命黨員、彼等の裏切的政策を暴露した。鬭争のこの段階におけるソヴィエトの掌中への全権力の移行は、ボルシェヴィキのためにプロレタリアートの獨裁のための鬭争を容易にしたであらう。

ソヴィエトへの権力の平和的移行のスコロガンは、同志スターリンの言葉によれば、次のことを意味した、即ち『メンシエヴィキおよび社會革命黨員とカデットとのブロックの決裂、メンシエヴィキと社會革命黨員より成るソヴィエト政府の形成（蓋しソヴィエトは當時社會革命黨員的ニメンシエヴィキ的であつたから）、反對派（即ちボルシェヴィキ）にとつて自由な煽動の権利とソヴィエトの内部における黨の自由な鬭争——かかる鬭争によつてボルシェヴィキがソヴィエトを征服し且つ革命の平和的發展のためにソヴィエト政府の構成を改變することを考慮して。このプランは、勿論、プロレタリアートの獨裁を意味しなかつた。しかしそれは疑ひもなく獨裁の確保にとつて必要な條件の準

備を容易ならしめた、何故ならそれは、メンシエヴィキと社會革命黨員とを権力に就かしめ且つ彼等をして實際に自己の反革命的政綱を實行せしめることによつて、これらの黨の眞の性質の暴露を促進し、彼等の孤立化、彼等の大衆との決裂を促進したからである\*』

\* スターリン、反對派について、一五〇頁。

何故ボルシェヴィキがソヴィエトにおいて彼等がまだ少数派であつた時『すべての権力をソヴィエトへ』といふスコロガンを提起したかが、今や奇妙に見えるかも知れぬ。我々がメンシエヴィキと社會革命黨への権力の譲渡に賛成であつたかのやうだ。勿論さうではない。しかし我々はかう考へた、即ちもし労働者がまだメンシエヴィキと社會革命黨員とを信用してゐるとすれば、我々は實踐において、實際において小ブルジョア黨がプロレタリアートのために革命を指導する能力を有しないことを示す義務がある、と。

『権力をソヴィエトへ』いふスコロガンにおける基本的な點は、我々が舊い國家機關を破壊したことにあつたのであつて、トロツキーが考へたやうに、十人のベシエホノフ（小ブルジョア民主主義者）に権力を譲渡する方がよいといふことにあつたのではない。肝要なことは、ブルジョア的ニ農奴制的國家權力機關を破碎することであつた。多数派であつたから、権力を掌握するかも



知れなかつたメンシエヴィキと社會革命黨についていへば、彼等の前には二つの可能性が残されてゐた。或ひは彼等が引續いて足踏して自己を暴露するか、或ひは大衆の壓力の下に、前進して、その程度に彼等が革命の障礙物であるかを、この場合再び急速に示すかである。そして第一の場合にも第二の場合にも我國は自己の倦まざる活動によつて労働者大衆に、我黨が唯一の革命的黨派であることを示し、そしてこのことが黨に革命における指導を確保したであらう。

我々はこの時期にメンシエヴィキと社會革命黨員との影響をソヴェートの内部において根絶しようとするのが可能だと考へた。これもまた一種の『大衆との統一戦線戦術』であつた。しかし、メンシエヴィキと社會革命黨員とはプロレタリアトに對してブルジョアジエとの統一戦線を樹立した、そしてこのことは、我々が後に見る如く、革命的氣分の成長の情勢の下においては、臨時政府に對する労働者および兵士の六月および七月の示威運動に導いた。

ボルシエヴィキは労働者および兵士の大衆の中へ入り、彼等を戦争、飢餓、物價騰貴に對する、ソヴェート權力のため、プロレタリアトと貧農層との獨裁のための闘争に組織し且つ結成した。軍事組織が非常に急速に作られ始めた。ペトログラードにおいてはエヌ・ボドヴォイスキとヴエ・ネフスキとが組織者であつた。この軍事組織にはエフ・ジェルジンスキ、ヤー・スヴェルド

ロフ、イリイン、ジェネフスキ、アントノフ、オヴセenkoその他多くの同志が積極的に參加した。ペトログラードの軍事組織は四月にその機關紙『ソルダートスキ・ゴロス』（後に『ソルダートスカヤ・ブラウダ』）を發行し始めた。モスクワにおいては、オリガ・アフナシエワ、ヴァレンツォワ、エム・シユキリヤトフ、コーガン、チネノフ、アロセフ、クリューコフ、ヴァシリエフスキが軍事組織の設立において大なる役割を演じた。その後スミルノフ、テレンティエフ、ブハリン、ブレハーノフ（労働者）、ステファシキン、ヤロスラフスキ、ムラロフがこの活動に參加した。

二月革命の後黨は民主主義的中央集權の基礎の上に、指導機關の選舉主義の基礎の上に再建された。それは自由に集り、すべての問題を審議し且つ決定し、宣傳および煽動活動を廣汎に行ふ可能性を取得した、そして黨はこれを廣汎に利用した。なほ指摘しなければならないことは、メンシエヴィキと社會革命黨員とが間もなく自己の多数派を利用して、宣傳者および煽動者、ボルシエヴィキの進出の自由を壓迫し始め、軍隊や工場におけるすべての進出はたゞソヴェートの許可によつてのみ——これは當時にあつてはメンシエヴィキと社會革命黨員との許可によることを意味した——可能である、といふ決議を通過させたことである。これは實際において、ボルシエヴィキの多



くの者に煽動を行ふ可能性が與へられず、そして我々がこの煽動をメンシエヴィキのおよび社會革命黨員のソヴェートの頭を越えて強奪的に行はなければならなかつたことを意味した。

我黨が地下運動から出た最初の瞬間から諸企業における我々の細胞は活氣を帯びて來た。黨は労働者および兵士大衆を引きつける中心であつた。我々のボルシエヴィキの組織が如何なる状態にあつたかを、我々は四月の全露會議において知つたが、この會議には、七萬九千二百四人の組織された黨員を代表した四十九人の代議員が出席した。そして組織別では黨員數は次の如く配分されてゐた。即ちペトログラード一萬四千六百人、モスクワ七百人、ウラル一萬四千六百人、ドンバス五千四百人等々。サラトフには四月にすでに約一千人、サマラには約二千七百人、カザンには四百人あつたが、それと同時にソルモヴォ、ブリヤンスキー地方、ツォラその他はまだ組織されてゐなかつた。コーカサスからの代議員は四月會議における自己の報告において、『コーカサスからはたゞ三人の代表者が出席してゐるが、我々はコーカサスでは組織を破壊されてゐるから、それもとゞ審議権のみを以てである』と報告した。たゞ若干の組織、例へばバクーにおいては、最初からボルシエヴィキが優勢であつた。同志スヴェルドロフはウラルについて、ここでは革命前にはたゞ九ヶ所においてのみ非合法活動が行はれたが、四月會議に至ればすでに四十三の組織が代表

された、と報告した。當時如何に、組織が成長したかは、一九一七年七月にすでにペトログラードだけに三萬人以上の黨員があつたことによつてわかる。黨は組織に關する巨大な活動と大衆の戰闘的革命的教育とを行つた。それは革命の最初にかくも巨大な役割を演じたプロレタリア婦人の中における活動を組織した。雑誌『ラポートニツァ』が發行され始めた。黨は八時間労働日の革命的申告の實現における首魁であつた。すべてこれらのことはすべての最も重要な企業において黨と労働者大衆とを非常に急速に接近させた。

この當時、背後および戦線の軍隊における我々の戰闘的活動は特に大きかつた。我々の『オコブナヤ・ブラウダ』や『ソルダートスカヤ・ブラウダ』に對して、ブルジョア黨、社會革命黨およびメンシエヴィキ黨は數百萬部の發行部數を有する數十の新聞を、我黨に對する誹謗に満たされた新聞を兵士大衆に投げかけることができた。だが我黨は、労働者および農民層の最も燒眉の問題に答へ、これらの問題の唯一の正しい革命的解決を與へることによつて、數ヶ月間に大衆をこれらの黨の影響下から分離して、社會主義革命の道への我黨のスローガンの周圍に彼等を結成することができた。さればこそ同志スターリンは、『この移行の歴史は、一方では、社會革命黨員とメンシエヴィキ、他方では、ボルシエヴィキとの、この大衆の獲得のための闘争の歴史である\*』と指摘し



てゐる。

\* スターリン、十月革命とロシア共産主義者の戦術、『レーニン主義の諸問題』、九三頁。

勿論この時期における黨のすべてのこれらの活動においては、ボルシェヴィキ黨による戦争問題の正しい解決が決定的意義を持つてゐた。如何にして戦争を終結するか？——これがこの時期に都市および農村の数百万の労働者および勤勞者の大衆を興奮させた。ボルシェヴィキは戦争の初めからこれに對する解答を與へてゐた。帝國主義者と彼等の手先、彼等の奴僕政府たる政府を清算することなくしては、戦争を終結することはできなかつた。二月革命はたゞ、帝國主義戦争の内亂への轉化の方向への第一歩を意味したにすぎない。内亂なく、社會主義革命なくしては、帝國主義戦争を清算することはできなかつた。大衆の中におけるまた大衆獲得のための我々の闘争の毎週、毎日は、労働者、農民および兵士にボルシェヴィキ的方針の正しさを確信させた。

我黨は地下運動から少數で出て來た、黨の状態は排他的に困難であつたが、その方針はそれのみが革命の客觀的發展と勤勞者大衆の利益に對應するところの、革命的なものであつた。黨のためには第一革命の時代における、反動と新しき昂揚の時代におけるその巨大な意義と指導的役割に關する記憶が保存されてゐた。それは帝國主義戦争時代においてプロレタリアート

の旗に忠實であつた唯一の黨であつた。我黨は一九一七年二月時代に大衆の闘争の先頭に立つた。さればこそ我黨は最も革命的、最もプロレタリア的な要素の犠牲によつて急速に成長し且つ強化した。さればこそすでに一九一七年七月事件の頃にはそれはかくも巨大な勢力を持つてゐた。さればこそそれは十月に勝利した。

### 一九一七年四月二十一—二十一日の示威運動

しかしブルジョア臨時政府は自己の仕事をした。この政府の名において外務大臣ミリュコーフは、四月十八日同盟者に『世界戦争を決定的勝利にまで導く全國民的志向』と『我々の同盟者に對して取られた義務を完全に遂行しようとする』臨時政府の意向とについて聲明した。かくしてロシアの資本家と地主とは英佛の資本家とのツールの條約に忠實を誓ひ、『勝利の結末』の達成のために必要なだけの人民の血をまだ流すことを約束した。四月十九日この聲明（ミリュコーフの覺書）は労働者や兵士に知られた。四月二十日我黨の中央委員會とペトログラド委員會はブルジョアに對する抗議に大衆を召集し、四月二十一—二十一日（舊曆五月三—四日）大衆は、『秘密條約を發表せよ』、『戦争から手を引け』、『すべての權力をソヴェトへ』といふスローガン



を掲げて街上行進した。臨時政府の支持者はネフスキー大通や富裕地区を占領して、臨時政府への忠誠を表はした。労働者階級と兵士とは町はづれから中心へ進んだ。ネフスキー大通その他の場所で衝突が行はれた。コルニロフ將軍の如き最大の反革命家は示威運動を射撃せよと呼びかけ且つその命令を與へさへした。けれどもミハイロフスキー砲兵學校は、かかる命令を受けながら、それを行ふことを拒絶した。

それと同時にクロンシュタット、オラニエンバウム、ガトチンその他の近郊地點における兵士および労働者大衆は、我黨の命令があり次第進出すべく準備してゐた。

示威運動はモスクワにおいても（労働者と第五十六聯隊とが抗議を以て進出した）他の諸都市においてもあつた。これは二重支配の最初の危機であつた。『これは、——とレーニンが書いた、——農民層に最も接近してゐる廣汎な、不安定的な、動搖的な大衆が……資本家から革命的労働者の側へ永久的に動搖したことを意味する\*』と。

\*レーニン、第二十卷、二二七頁。

この示威運動によつて喚び起された権力の危機は、一九一七年五月二日ミリュューコフの引退と最初の臨時内閣の形成とによつて終結された。ペトログラード委員會の同志の一部（エス・ボグ

ダティエフその他）はこの當時臨時政府の逮捕を主張し、示威運動者の一部は、この逮捕を實行するためにマリインスキー宮殿に向つたことを指摘しなければならぬ\*。

\*『この自然發生的運動には……政府を逮捕すべく準備した三萬人の武装兵士を引率した故リントが加はつた』（レーニン、第二十二卷、二〇二頁）。

中央委員會は、我々はまたソヴィエトおよび軍隊における多數派を味方にしてゐないことを正しく考慮して、これに反對した。一九一七年四月會議において、レーニンはこれに關聯してかう述べた——

『我々はたゞ敵の勢力の平和的偵察をするのみで、戦闘をしようとは望まなかつたが、ペトログラード委員會は少しばかり左へ曲つた。そしてこれは、勿論、この場合には非常な犯罪である。組織的機構は鞏固ではなかつた。即ちすべてが我々の決定を實行してはゐない。「労働者および兵士代表ソヴィエト萬歳」といふ正しいスローガンと共に、「臨時政府を仆せ」といふ誤つたスローガンが與へられてゐた。行動の時機に「少しばかり左へ」曲ることは適當ではなかつた。我々はこれを最大の犯罪、組織破壊と見るであらう。もし意識的にこの行動が許されたとすれば、我々は一分間も中央委員會に止まらなかつたであらう\*』と。



\* レーニン、第二十卷、二五二頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

『少しばかり左へ』曲つたベトログラード委員會の同志達が『非常な犯罪』を犯した、といふレーニンのこの直接の聲明にも拘らず、黨中央委員會の側からのこの立場の批判にも拘らず、トロツキーはその後、レーニン自身が左へ曲つたかの如く誹謗的に書いた。實際においては、黨中央委員會の呼びかけによつて労働者階級は四月の示威運動において、『戦争から手を引け』、『すべての権力をソヴェトに』といふレーニンのスローガンの下に進出したのである。

### 聯立政府。第一回ソヴェト大會。六月十八日の示威

運動。ケレンスキーの攻勢。軍隊における影響のた

めのボルシェヴィキの闘争

一九一七年五月二日ミリューコフとグチコフとは、ブルジョアジーのこれらの代表者の政府の構成からの退去の要求を以て四月の示威運動に進出した革命的プロレタリアートと軍隊の革命的部分とに壓迫されて、臨時政府の中から退いた。陸軍大臣たるグチコフは、最初は君主制の維持の支持者として公然現はれたが、それが成功しなかつた時、共和主義者のやうな振りをした。ミリュ

ーコフは労働者階級と軍隊とが獲得した自由の公然の敵として進出した。軍隊の政治的獲得が強化され且つそれらにおける選挙的政治機關が樹立されたベトログラード・ソヴェトの謂ゆる『命令第一號』に對して、グチコフは激しく反對した。彼はこの命令の廢止を要求した。ブルジョアジーは、正にこの命令こそ軍隊を崩壊させた、といふやうに事態を描き出したが、實際においては、それは、帝國主義戦争の目的に役立つ、ツァールやロシアのブルジョアジーによつて『同盟者』に賣られた従順な肉弾の役割を演じたところの、急速に崩壊する軍隊の中に組織を齎したのである。

一九一七年五月五日聯立政府が設立され、その中には資本家や地主の代表者と並んで、『社會主義者』、即ちアー・ケレンスキー、イー・ツェレツェリ、ヴェ・チェルソフ、エム・スコベレフが入つた。けれども『社會主義者』のこの参加はブルジョアジーの行狀を少しも變化させなかつた。政府へのメンシヴィキと社會革命黨員とのこの参加、この『社會主義的』耳飾りの創出は、ブルジョアジーにとつて非常に有利であつた。ブルジョアジーは、その後一度ならずドイツ、イギリスその他の國々のブルジョアジーがしたやうに、ブルジョアジーの全利潤が彼等から取り上げられるだらう、といふことについて、『社會主義者』のブレハーノフやスコベレフに好きだけ喋らした



のである。國家權力の全機構はブルジョアジーの掌中に残されてゐた。労働者と協議しなければならなかつた時には、ブルジョアジーはチェレツテリ、スコベレフ、チェルノフを派遣した、そしてこれらの『社會主義者』は、例へばクロンシュタットの労働者、兵士および水兵が上からの任命者を確認することを拒絶して、自ら委員長を選挙しようとして企てた時、『勧誘主任』として彼等を鎮めに行つた。彼等の各々は、レーニンの言葉によれば、『ブルジョアの仕事は正直に遂行し、辛苦を嘗め、政府を擁護し、資本家の潔白を證明し、約束、約束、約束の反覆によつて、暫く待て、暫く待て、暫く待ての勸告によつて、人民を愚弄した』。『社會革命黨やメンシエヴィキ黨の馬鹿者共は、彼等の指導者の帝國主義的榮譽の光の中に自惚的に浴して、狂喜した。資本家達は、『ソヴィエトの指導者』において人民に對する助手を得、彼等から「戦線における攻撃的行動」、即ち停滯してゐた帝國主義的、掠奪的戦争の更新を支持する約束を得て、満足して手を擦り合つた\*。地主所有地の取引の禁止、土地の賣買の禁止の如き方策をさへも社會革命黨の大臣ヴェ・チ・ヘイゼは實施することができなかつた。だが戦線においては資本家グチョフの役割を今や『勧誘主任』アー・ケレンスキーが成功を以て遂行した。反革命的ブルジョアジーは『社會主義』大臣の掩護と擁護との下に強化され、鞏固になり、『外敵に對しても内敵』即ち革命的労働者に對しても、攻

撃を準備した。

\* レーニン、第二十卷、七三頁。

戦争の繼續と經濟恐慌とは労働者階級に激しい打撃を與へた。必需品の價格は二〇〇—三〇〇%騰貴したが、賃銀は極めて僅かに上昇したにすぎなかつた。

資本家は労働者階級に對して攻勢を取り、同盟罷業に對しては工場閉鎖を以て（すべて罷業者の解雇を以て）答へた。一九一七年四月にはベトログラードにおいて百八の企業が閉鎖され、八千七百人の労働者が解雇された。六月には百二十五企業が閉鎖され、三萬八千七百五十五人の労働者が解雇された。実際にはたゞソヴィエトへの權力の移行によつてのみ實現されうる『食糧品に對する労働者管理のための闘争』といふボルシエヴィキのスローガンは、益々多くの労働者大衆を擱んだ。

『革命は農業の範圍に突入しつゝある——たゞ土地の沒收のみならず、家畜や農具の沒收の問題が提起されつゝある』（スターリン）。一九一七年六月には地主、臨時政府に對する農業騒擾が四十三縣を擱んだ。

我黨の任務は、一八四八年の革命時代に小ブルジョア社會主義者ルイ・ブランがブルジョア政府



において、今日ケレンスキー、ツェレツェリおよびチェルノフが演じたと同様な恥づべき役割を演じたところの、フランスにおけるルイ・ブラン主義を想起せしめたところの、すべてのこの厭ふべき喜劇、臨時政府に入つたメンシエヴィキと社會革命黨員の側からの人民の利益のすべてのこの裏切を暴露することであつた。前述の如く、我々が一九一七年四月に『すべての権力をソヴィエトへ』といふスローガンを提起した時、この時期には権力の移行はまだ平和的に、内亂なくして行はれたであらう。メンシエヴィキと社會革命黨員とはこの平和的な道を進むことを欲しなかつた。労働者、兵士および農民大衆は我々の方針の正しさを益々意識した、特に労働者は。四月の示威運動は、我黨のスローガン——『戦争から手を引け』、『秘密條約を發表せよ』、『すべての権力をソヴィエトに』、『土地の農民への即時の譲渡』、『生産に對する労働者の管理』その他の周圍に、労働者および兵士の大衆が結合されつゝあることを示した。聯立政府に體現されたメンシエヴィキと社會革命黨員とのブルジョアジーとの同盟が、この結合に對立した。ボルシエヴィキのスローガンは益々多く労働者、農民および兵士大衆のスローガンとなつた。五月末ペトログラード工場委員會議においてはすでに都市の大衆の四分の三がボルシエヴィキに味方してゐた。けれどもソヴィエトにおいては我々は依然として少数派であつた。多くの都市においては、革命の初めに選舉さ

れたメンシエヴィキと社會革命黨員とが再選舉に抵抗した。そして例へばモスクワにおいては兵士代表ソヴィエトがこの時代にすでに少しも兵士大衆の氣分を反映しなかつた。

六月の初めに開かれた第一回全露ソヴィエト大會においては、我々はまた少数派であつた、——色々の色彩のメンシエヴィキと社會革命黨員七、八百名に對してボルシエヴィキ百人餘。第一回全露農民代表者大會におけるレーニンの演説は、農民と兵士に大なる印象を與へた。この大會においては社會革命黨員のチェルノフ、ケレンスキー、アヴクセンティエフ、反革命のお婆さんとなつた『ロシア革命のお婆さん』ブレシユコ・ブレシユコフスカヤが支配した。この大會に進出することはレーニンには困難であつた。けれども彼は土地問題の自己の直截明瞭な提起によつて、たゞ労働者、兵士および農民代表ソヴィエト権力のみが平和と土地との問題を解決することができる、といふ自己の教示によつて、多くの農民をしてボルシエヴィキの語ることに傾聽させ、そしてこの瞬間から多くの農民は我黨に對して異つた態度を取り且つ我々の敵の厭ふべき發明を餘り信じなくなつた。即ち彼等はたゞ我黨のみが地主的土地所有の廢絶の問題を恐れず且つ徹底的に提起することを納得した。

第一回ソヴィエト大會の時我黨のペトログラード委員會によつて六月十日の示威運動が準備さ



れた。ソヴィエト執行委員会はそれに吃驚して、この示威運動を禁止した。幾多の出来事、即ちクロンシュタットのボルシェヴィキのベトログラードへの到着、臨時政府のウクライナの軍隊大會との衝突その他多くの事實が革命的な嵐の成長を證明した。けれどもメンシェヴィキと社會革命黨員とはブルジョアジーの捕虜となり續けた。五百三票對百二十六票、留保五十二票を以て彼等は臨時政府の信任に關する決議を採用した。『ボルシェヴィキは、聯合せるカデット、社會革命黨員およびメンシェヴィキに對する絶望的な戦闘に労働者を導くことを全く欲しなかつたので、示威運動を中止した。しかしこれらの聯合勢力は、大衆の信頼のかけらでも保存するために、六月十八日に一般的示威運動を命ずることを餘儀なくされた。ブルジョアジーは、プロレタリアートの側への小ブルジョア民主黨のこの動搖を正當に見且つ民主黨の行動を麻痺させるために戦線における攻勢を決定しつゝ、憤怒のために我を忘れてゐた\*』。

\* その後トロッキーは『十月の教訓』の中に、『レーニンのイニシアティヴによつて』六月九日に示威運動を組織しようとした試みは、四月の進出の性質に不満であつた同志達の側から『冒險主義』と非難された、といふ虚偽を書いた。實際においては、この示威運動はレーニンの完全な同意の下に延期され、そしてレーニンはこの延期をベトログラード委員會の有名な會議における大演説において擁護した（ベトログラード委員會の議事録、およびまたスターリンの論文『トロッキー主義がレーニン主義か』、論集『反對派について』、九九—一二四頁所収、参照）。

黨は新しい示威運動のために精力的に準備した。同志スターリンは『ブラウダ』において、『我の任務はベトログラードにおける示威運動が我々の革命的スローガンの下に行はれることを達成することである』と書いた。

革命の犠牲者の葬儀に際して行はれた六月十八日の示威運動は我黨の勢力の眞の査閲であつた（四十萬人の示威運動者が『戦争反對』、『十人の資本家大臣を仆せ』、『すべての権力をソヴィエトへ』といふスローガンを掲げて行進し、大衆のヨリ以上の革命化を示した。『もし五月六日（聯立政府の形成に關する聲明の日——ヤロスラフスキー）が社會革命黨員とメンシェヴィキとを錨索によつてブルジョアジーの凱旋車に縛りつけたとすれば、六月十八日は彼等を資本家の奴僕として鎖に縛つた』——とレーニンは書いた）。

そして實際、プロレタリアおよび兵士大衆の明瞭に表現された意思にも拘らず、六月十九日にはケレンスキーによつて一般的攻勢が聲明され、そしてそれは非常に急速に敗北を以て終つた。經濟機構および補給機構の崩壊によつて、指揮官の犯罪的怠慢と往々裏切るとによつて喚び起された戦線における不成功は、軍隊の痛憤と労働者および農民大衆の更にヨリ大なる革命化とに導いた。これに對抗してメンシェヴィキと社會革命黨員とは、戦線における壓迫、ボルシェヴィキに對す



る誹謗的カンパニヤおよび彼等の直接の追求を強化した。この頃我黨の軍事組織の會議において（六月二十二日）、背後および戦線における數萬人の兵士が我々の軍事組織に味方し且つ我々を農民大衆と益々密接に結びつけつゝあることが、明かにされた。

それと同時に社會革命黨およびメンシエヴィキ黨においては崩壊が進行した。七月會議においてはボルシエヴィキのペトログラード組織はすでに三萬二千人の黨員を算したが、一方メンシエヴィキは七千人を持つてゐた。この瞬間に當つて非常に重要なことは、協調的な黨からの大衆の公然の離脱とその結果としてのこれらの黨の『左』翼のヨリ判然たる分離である。第二インターナショナルの他の諸黨におけると同様に、大衆の黨からの離脱は『左翼』グループの形成に導き、黨の任務はこの離脱を阻止することであつた。社會革命黨員において當時左翼の一部はソヴィエトへの権力の移行に賛成し、——メンシエヴィキにおいてはメンシエヴィキ國際主義者のグループが形成された。社會革命黨大會はケレンスキー政府の支持の問題について半々に分裂した、即ち百三十六人は反對、百三十四人は賛成であつた。だが『お婆さん』ブレシニコ・ブレシニコフスカヤは左翼社會革命黨員に對する抗議として中央委員會の構成からさへも脱退した。右翼社會革命黨員は自己の機關紙『ヴォーリヤ・ナローダ』において、自己の機關紙『ゼムリャ・イー・ヴォーリヤ』を持つ

てゐた『左翼』に對して進出した。同じことはメンシエヴィキにおいても行はれ、その右翼はブルジョア新聞『デニー』において革命に對して決定的な鬭争を行つたが、マルトフを頭首とする左翼はこの立場を批判しようとした。決定的な階級的前進が行はれた。『カデットは君主制の地位を占め、ツェレツェリとチエルノフとはカデットの地位を占め、プロレタリア民主黨は眞に革命的民主黨の地位を占めた』——とレーニンは當時書いた。

一九一七年七月三―五日の事件。大衆の先頭に

### 立つた黨

打續く戦争は經濟的崩壊を強化した。運輸は全く混亂し、破損した機關車は五〇パーセントに達し、石炭の缺乏、金屬の缺乏、生産物の大なる不足および物價騰貴の増大が激しく現はれた。すべてこれらはメンシエヴィキと社會革命黨員との積極的な参加の下におけるブルジョア臨時政府の管理の結果であつた。

經濟的崩壊、戦線における敗北は軍隊および國內における革命的醗酵を更にヨリ多く深め、そしてそれは一九一七年七月三―五日の新しい進出に導いた。



七月三―五日の事件は、ブルジョアジーが戦争を遂行することを援助するソヴィエトの指導部の協調政策に不満な兵士および労働者の自然發生的進出の結果であつた。

七月三日示威運動はペトログラードのヴィボルグスキー區において始まつた。それは終日繼續した。革命的進出、示威運動は素晴らしい武装示威運動に發展し、それはすべての権力のソヴィエトへの移行に賛成であり、それはプロレタリア革命に味方する、といふことを公然と聲明した。我黨は、それに平和および組織的性質を賦與するために、この示威運動に参加することを決議した。示威運動者に対しては政府に忠實な軍隊、貴族や士官の部隊が出勤され、ペトログラードの街路は労働者や兵士の血で塗られた。モスクワにおいてもあちこちの他の都市においても、かやうな大規模においてではなかつたが、七月四日示威運動が行はれた。この示威運動を権力を奪取しようとするボルシェヴィキの政策として描き出すことは全く誤つてゐる\*。

\* 同志スターリンはその後かう書いた、『七月の武装示威運動に關聯した中央委員會内における「悲劇的な」意見の相違について語る場合、同志トロツキーは、全く誤つてゐる。同志トロツキーは、中央委員會の指導的グループの若干の成員が「七月エピソードにおいて有害な冒險主義を見なければならなかつた」と想像する場合、單に虚構してゐる。また當時我々の中央委員會の中に入らないで、たゞソヴィエト議會主義者たるにすぎなかつたトロツキーは、勿論、中央委員會が七月の示威運動をたゞ敵との接觸の手段と見たことを知ることはできなかつた。中央委員會(およびレーニン)は、

首都のソヴィエトがまだ防衛的主戰論者に味方してゐた瞬間に、示威運動を暴動に轉化させようとは考へなかつた。ボルシェヴィキの中の或者が、實際、七月「敗北」と關聯して泣き出しさうな顔をしたことは、全く可能である』(スターリン、反對派について、一―一―二頁)。

メンシェヴィキと社會革命黨員は、ブルジョアジーと同盟して、労働者および兵士の示威運動を破壊した後、我黨に喰つてかゝつた。『ブラウダ』編輯室は破壊され、『ブラウダ』、『ソルダートスカヤ・ブラウダ』その他多くのボルシェヴィキ機關紙が閉鎖された。ケレンスキーは我黨のモスクワ新聞『ソチアール・デモクラート』の閉鎖を要求した。彼は我々の民兵の武装解除命令を發した。軍隊の革命的部分は戦線へ送られた。街上でボルシェヴィキが制裁された場合があつた。背後でも戦線でも逮捕が行はれた。七月七日にはレーニン、ジノヴィエフ、カメネフ、ボドヴォイスキーその他の逮捕命令が發せられた。カメネフ、トロツキー、ルナチャルスキー、クルイレンコ、コロンタイ、メホノシン、ラスコリニコフその他多くが逮捕された。『トルード』印刷所が破壊された。ただ『リストク・ブラウドゥイ』を賣つたといふ理由で、労働者ヴォイノフが街上で殺された。

メンシェヴィキと社會革命黨員との指導者はボルシェヴィキに對する虐殺に直接參加した。メンシェヴィク・チヘイゼの署名で、革命的労働者および兵士の壓迫のために軍隊の派遣に關する命令が



送られた。社會革命黨員のゴツツとアブクセンティエフは、フィンランドの労働者および兵士がベトログラードの労働者を援助しようとした際には、前者を直ちに制裁すべし、といふ電報をヘルシングファルスへ送つた。

一九一七年七月、レーニンその他多くのボルシェヴィキは叛逆および武装暴動組織のかごで裁判に附せられる、といふベトログラード控訴院検事の通牒が発表された。起訴は軍事探偵スパイ・エルモレンコその他の挑発者の指示に基いて、デニキンの本部で、軍司令部で偽造された。この仕事には裏切者アレクシンスキーおよび辯護士ベレグエルゼフもまた手を着けた。レーニンはこの起訴をベイリス事件\*と比較してゐる。レーニンはこの裁判に出頭すべきかどうか、といふ問題に黨は當面した。もしレーニンが隠れなかつたならば、彼が殺されたであらうことは、何等疑ひがない、丁度一九一九年にドイツの白衛兵がドイツのメンシエヴィキの援助の下にローザ・ルクゼンブルグとカール・リープクネヒトとを殺したやうに。それ故レーニンは非合法状態に移り、ベトログラードの労働者の援助を得てベトログラード郊外の『ラズリフ』の岸に、次いでフィンランドに隠れた。レーニンは全く献身的な人々(労働者エメリヤノフ、シヨットマン、ラヒヤその他)を通じて中央委員會と連絡し且つ黨を指導し続けた。その他の被逮捕者は八月末および九月の初め労働

者、兵士および水兵の要求によつて釋放された、何故なら叛逆や権力奪取の企圖に關する何等の事件をも作り上げることができなかつたからである。

\* ツァール政府は、ユダヤ人に對する憎惡を煽動するために、訴訟事件を組織し、ユダヤ人ベイリスをキリスト教徒の血を宗教的儀式のために使用する目的で少年ユシチンスキーを殺害したとして起訴した。訴訟事件は、少年がこの事件を作り出すために特に黒百人組によつて殺害されたことを明かにした。

メンシエヴィキおよび社會革命黨員にとつて非常に特徴的なことは、レーニンに關する事件が、このベイリス事件においてツァール政府を助けた前検事アレクサンドロフに委ねられたことである。

如何に深刻な變化が國內においてこの期間に行はれたかは、我々がすでに見たところである。『事の本質は、——とレーニンは七月の示威運動の後に小冊子「スローガンについて」の中に書いた、——權力をすでに今日平和的に取ることができない點にある。それはたゞ決定的闘争においてこの瞬間における權力の眞の所有者、即ちベトログラードへ送られた反動的軍隊やカデットや、君主主義者に立脚するところのカヴェニャク\*の軍事的徒黨を克服した後においてのみ、獲得することができ\*\*』と。同志スターリンはこの思想を第六回黨大會における自己の報告において發展させた。

\* カヴェニャク將軍は一八四八年フランスにおける労働者の暴動を鎮壓した。



\* レーニン、第二十一卷、三五頁。

『事の本質は、ただ彼等がプロレタリアートに指導されるといふことのみではなくて、彼等が革命事業を裏切つた社會革命黨とメンシエヴィキを放棄したことが彼等の運動の條件たるころの、革命的人民大衆のみが國家權力のこれらの新しい所有者を克服することができる、といふ點にある\*』。

\* レーニン、第二十一卷、三五頁。

レーニンもまた、聯盟政府の反動的役割の説明、チエルノフおよびツェレツェリの絞刑吏的役割の人民に對する説明をこれまでよりも更に大なる力をこめて展開すべきことを提議した。

論文『木を見て森を見ず』の中でレーニンは同じ思想を明かにしてゐる。『即ち七月四日以前においては、すべての權力をこの、當時のソヴィエトへ移せ、といふスローガンは、唯一の正しいスローガンであつた。當時はこれが平和的に、内亂なくして可能であつた、何故なら當時は、七月四日以後に實行された大衆や人民に對する組織的な暴力がまだ存在しなかつたからである。當時このことがすべての革命の平和的發展、特にソヴィエトの内部における階級および黨の闘争の根絶の可能性を保證した。七月四日以後はソヴィエトへの權力の移行が内亂なくしては不可能に

なつた、何故なら權力は七月四—五日以來カデットと黒百人組に支持された軍事的、ボナバルチスト的徒黨に移したからである\*』。

\* レーニン、第二十一卷、八二頁。

『人民におけるすべての煽動は、軍事的徒黨の權力が顛覆されない限り、社會革命黨やメンシエヴィキ黨が暴露され且つ人民の信頼を奪はれない限り、農民が土地を獲得することは全く望まれないことを説明するやうに再組織されなければならぬ。正に革命的プロレタリアートこそ、一九一七年七月の經驗の後、獨立的に自己の掌中に國家權力を奪取しなければならぬ——これなくしては革命の勝利はありえない\*』。

\* レーニン、第二十一卷、三七—三八頁。

一九一七年二月から七月に至る短期間に、かくして國は三つの危機を経験した。第一の危機は四月二十一—二十一日の示威運動によつて喚び起された。これは、レーニンの言葉によれば、『示威運動に對する黒百人組の射撃とボルシエヴィキの未曾有に野蠻且つ虚偽の非難に導いたところの猛烈に自然發生的な、全く非組織的な』進出であつた。『爆發の後には政治的危機がある\*』。

\* レーニン、危機の教訓、全集、第二十一卷、二二頁。



『第二の場合は、ボルシエヴィキによる示威運動の任命、ソヴェト大會の恐るべき最後通牒と直接の禁止の後におけるその取消、ボルシエヴィキのスローガンの明かな優勢を示した六月十八日の一般的示威運動である』。

『第三の危機は、七月二日これを阻止しようとしたボルシエヴィキの努力にも拘らず、七月三日自然發生的に擴大し、四日には最高熱に達し、五日および六日には反革命の絶頂に至る\*』。

\* レーニン、第二十一卷、二二頁。

レーニンはこの示威運動と危機との特殊な形態を指摘してゐる、『反政府的示威運動——これが形式的には、事件の最も正確な記述であらう。しかしそこに、これが通常の示威運動でなく、これが示威運動よりも著しく大なる、革命よりも小なる或るものである、といふ本質がある。これは同時に、革命と反革命との爆發であり、これは、プロレタリアのおよびブルジョアの要素の猛烈な暴露と關聯した中間的要素の激しい、往々殆ど突然の「洗ひ出し」である\*』。

\* レーニン、全集、第二十一卷、二二—二二頁。

正にここに、この期間に行はれた階級的變動のうち、七月三—五日事件が意味した革命の發展における激變の瞬間の本質がある。『すべての革命は、——とレーニンは一九一七年六月十(二十

七)日に書いた、——もしこれが眞の革命であるならば、階級的變動に歸着する』と。この期間に行はれた階級的變動の本質は何處にあるか？ レーニンは論文『スローガンについて』の中でかう答へてゐる、『黨關係の循環は終つた。二月二十七日にはすべての階級が君主制に反對であつた。七月四日以後反革命的ブルジョアジーは、君主主義者や黒百人組と手に手を取つて、小ブルジョアの社會革命黨員やメンシエヴィキを自己に結合し、部分的には彼等を恫喝して、事實上の國家權力をカヴニャク達の掌中に、戦線においては無罪者を銃殺し、ペトログラードではボルシエヴィキを破壊しつつある軍事的徒黨の掌中に委ねた\*』と。

\* レーニン、第二十一卷、三五頁。

かかる情勢の下において革命の最も重要な問題を決定するために第六回大會が開かれた。

### 第六回黨大會 (一九一七年七月二十六日—八月三日)

#### 大會における同志スターリンの役割

第六回大會は半合法的に、隠れることを餘儀なくされたレーニンの不在のまま、開かれた。けれども大會の壓倒的多数はレーニンの見地に立つてゐたので、この大會の決議に對するレーニン



の影響は非常に大きかつた。レトニンは大會の準備に参加し、大會のすべての最も重要な問題に關する自己の見解を手紙の形で述べた。大會においては同志スターリンとスヴェルドロフに指導的な役割が屬してゐた。大會には決議権を有する百八十七人の代議員と審議権のみを有する百七人が出席した。黨はこの時代に約二十萬人の黨員を有した。即ち七月事件における敗北はたゞ我黨の影響を弱めなかつたのみならず、更にヨリ多く増大した。七月三日黨は、大會において發表された不完全な調査資料によれば、四十一の印刷機關紙を持ち、その中十二はロシア語でなかつた。大會は區際派との統一を形成したが、彼等の中からは大會にマヌイルスキー、ユレネフその他が出席した。メンシエヴィキ國際主義者の名でユー・ラーリンが挨拶を以て進出したが、彼は間もなく自らボルシエヴィキ黨に加入した。挨拶はエル・マルトフとアストロフとの署名の上でメンシエヴィキ國際主義者の中央委員會から持ち出された。當時ツェレテリ、ダンその他のメンシエヴィキをヴェルサイユ派と稱したこれらの人々は、『黨にとつてかくも困難な時に、追求と追獵との眞最中に開かれた』我黨の大會に挨拶し、我々に向けられた誹謗的カンパニヤに對する深刻な憤怒を表現した。けれどもこれは寧ろ不徹底な身振であつた、何故ならその後にはブルジョアの聯立の支持者に對するマルトフ派の降服が続いたからである。

同志スターリンは中央委員會の主要報告者として進出した。第六回大會はこの瞬間にとつて極めて重要な多くの決議を採用した。黨は、プロレタリアートと貧農層との獨裁の實現といふ當面の任務が國際的任務であることを認めた。『極めてありさうなことであるが、ロシア革命の新しい不可避的な昂揚が西歐の資本主義國における革命より以前に労働者および貧農を權力の地位に就かせるならば』、我々は他の國々におけるプロレタリアートの闘争を支持する義務を負ふであらうと。すでに當時第六回黨大會において、西歐における革命の遅延の場合における我國における社會主義の建設の可能性の問題に關する意見の不一致が現はれた。ブレオブラジンスキーは權力の奪取に關する決議において、たゞ西歐におけるプロレタリア革命の存在の下においてのみ我々が國を社會主義的水路に向けるであらう、といふことを述べようと提議した。同志スターリンはこのトロツキ主義的提議に鋭く反對した。『正にロシアこそ社會主義への道を開拓しつつある國だ、といふ可能性は排除されはしない』と同志スターリンは反對した。スターリンは次のことを指摘した、即ちこれまで

『……たゞの一國もロシアにあつたやうな自由を享有せず、生産に對する労働者の管理を實現しようとは試みなかつた。そののみならず、我々の革命の基礎は、西歐におけるよりも廣い……』



我國では労働者を貧農層が支持してゐる。最後に、ドイツにおいては國家權力機構は、自身がヨーロッパ資本の朝貢者たる我々のブルジョアジーの不完全な機構よりも、比較にならぬほど立派に作用する。たゞヨーロッパのみが我々に道を指示することができる、といふ廢れた觀念を投げ棄てなければならぬ。ドグマ的マルクス主義と創造的マルクス主義とが存在する。私は後者の立場に立つものである\*と。

\* 第六回黨大會議事録、二四九頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

大會は同志スターリンの見地に立ち、かくしてすでに一九一七年に、レーニンの方針をプロレタリアートによる權力の奪取の後の我國における社會主義の建設と規定した。大會はスターリンの報告によつて、一九一五年レーニンによつて提起された一國における社會主義の勝利の可能性の見地に立つた。第六回大會の決議『政治情勢について』の中には、當面の革命におけるプロレタリアートと貧農との任務は『自己の掌中への國家權力の奪取のためおよび、先進國のプロレタリアートと同盟して、それを平和と社會の社會主義的再建へ向けることのために、全力を緊張すること\*でなければならぬ、といふことについて述べられてゐる。

\* 第六回黨大會議事録、二五六頁、カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

同志スターリンは大會において、農民は一般に防衛主戰論的氣分を持つてをり、帝國主義者とプロレタリアートを結んでゐて、プロレタリアートに追隨しないであらう、といふ同志ブハーリンの主張に反對した。『我々は種々の農民を持つてゐる、——と同時スターリンはブハーリンに答へた、——右翼とプロレタリアートが結ばれてゐるが、我々は下層の、貧農層を代表する農民を持つてゐる。ここでは彼等にとつてこのプロレタリアートは存在しえなかつた。彼等はブルジョアジーとはプロレタリアートを結ばないで、無自覺のために大ブルジョアジーに追隨し、大ブルジョアジーは簡單に彼等を欺瞞し、自己の味方につけてゐる』と。

同志スターリンはまた革命の二つの様相（段階）に關するブハーリンの反レーニンの理論、即ち第一段階においては、ブルジョア革命においては、全農民層の参加の下に、第二段階においてはプロレタリアートが農民層の参加なくしてヨーロッパのプロレタリアートと同盟して、といふ理論に反對した。同志スターリンは、ブハーリンを反駁しつゝ、プロレタリア革命が最も根本的な農業革命なくしては不可能であり、従つて土地のための農民の闘争と一致せざるをえないことを力説した。十月革命はレーニンおよびスターリンのこの命題をハッキリ確認し且つ完全に正當づけた。



大會は政治情勢に關する決議を採用したが、その中では、革命の平和的發展のすべての可能性は、二重支配が全權力のブルジョアジーの掌中への移行によつて終つたが故に、消滅したことが力説された。ブルジョアジーから權力を分離することはたゞ力によつて可能であるが、ソヴィエトはメンシエヴィキおよび社會革命黨員においてこの瞬間に完全に反革命を支持したが故に、今やすでに『權力をソヴィエトへ』といふスローガンを提議すべきではなくて、『反革命的ブルジョアジーの獨裁の完全な清算』のスローガンを提議すべきである。大會の決議とレーニンの見解との間には深刻な不一致が存在した！ といふ場合、トロツキーがどの程度に『正し』かつたかは、これによつて判断することができる。

大會において同志スターリンは、『すべての權力をソヴィエトへ』といふスローガンの撤廢は、我々がソヴィエトから脱退しなければならないことを決して意味しない、といふことを明かにした。我々は、我々が他の多くの機關（例へば地方デューマ）において活動する如く、それらの中における我々の影響の鞏固化、メンシエヴィキおよび社會革命黨員の暴露の目的を以て、以前の如くその中で活動しなければならぬ。事件の影響を受けてソヴィエトがボルシエヴィキ化したことを、經驗は非常に急速に示した、そして我々はすでに九月初め兩首都のソヴィエトにおいて多數を獲得

した。そして『權力をソヴィエトへ』といふスローガンが異つた意義を有するに至つた時、それはボルシエヴィキ的ソヴィエトへの權力の移行を意味したのである。

大會は多くの要求を定めたが（戦争の清算、土地の國有化、銀行の集中化、多くの企業の國有化、眞實の労働者管理の樹立その他）、それらは勿論臨時政府によつては實現されえないで、その実施のためにはプロレタリアートによる權力の奪取を豫想したのである。これらの要求は我黨にとつて政綱として役立ち、それを基礎にして我々は不満な労働者および農民の大衆を結合し且つブルジョア臨時政府に對する決定的攻撃のために彼等を組織した。

特に指摘しなければならぬことは、第六回大會がそのすべての決議において當面の社會主義革命におけるプロレタリアートと貧農層との同盟といふレーニンのスローガンを特に強く力説したことである。決議『現在の瞬間について』の中には、ただ労働者と貧農層とによる權力の奪取の條件の下においてのみ帝國主義戦争を清算することができる、と述べられてゐた。政治情勢に關する決議の中には、『ただ革命的プロレタリアートのみが貧農層による彼等の支持の條件の下において』反革命的ブルジョアジーの獨裁を清算することができることが指示された。第六回大會の名によつて發表された宣言の中には、『労働者と革命的貧農との同盟萬歳』といふスローガ



ンが提起された。

労働組合に關する決議の中には、労働組合が事件の論理によつて社會主義のための闘争に引き入れられつゝあること、それらが『生産の組織および生産物の分配への國家的干渉の實施に切實に關心を有する』ことが力説された。

大會は労働組合に、『すべてのこれらの責任ある任務はロシアの労働組合によつて、それらが戰闘的階級的組織であり且つ自己の闘争をプロレタリアートの政治的階級的黨との密接な有機的協力の下に行ふ場合においてのみ、實現されうる』ことを注意した。だがこれは、革命的な方法による戦争の最も速かな清算を主張する社會主義黨の勝利のために憲法議會の選舉において労働組合が闘争しなければならぬことを意味した。これは、ブルジョア戦争に反對し、社會主義を求めするための闘争の一般的計畫の作成のために國際的連絡を復興することを意味した。かくして黨は労働組合の中立に決定的に反對し、黨がまた第四回スト、クホルム黨大會以來労働組合について固執した方針を繼續した。

第六回大會は、當時到るところにおいて（こゝかしこで自然發生的に）『青年労働者および労働婦人の獨立組織』として發生したところの、青年同盟に關する決議を採用した。そして労働青年

が全體としての労働者運動にとつて有する巨大な意義を考慮して、大會は、黨組織が、『青年の組織的建設への黨の干渉はそれに對する後見の性質を帯びてはならない』ことを記憶しつゝ、青年の組織に最も眞面目な注意を拂ふことを必要と認めた。その後の活動の結果黨はこの青年組織を黨の貯水池として強化することに成功した。青年同盟が革命およびソヴィエト聯邦の社會主義建設において、また青年共産インターナショナル（キム）の組織事業において如何に巨大な役割を演じたかは、すべての人々が知つてゐる。

大會においてはレーニンの裁判への缺席の問題が熱心に審議された、何故なら我黨には裁判を回避すべきではないと考へた個々の素朴な同志があつたからである。これに關聯して、同志オルジニキ、ゼのメンシエヴィキとの交渉に關する彼の報告の後『同志レーニンの裁判への缺席に關する』決議が採用されたが、その中には、事件はツァール支配の最悪の慣習を復興したところの保安警察的追求法と検事の活動とによつて指導されてゐること、『……かゝる條件の下においてはたゞ公平な訴訟手續のみならず、被告のエレメンタルな安全の何等の保證も絶対に存在しないこと、ロシア社會民主労働者黨大會は革命的プロレタリアートの指導者の不快至極な檢事的探偵的警察的追獵に對する自己の熱烈な抗議を表明し、同志レーニンその他に自己の挨拶を送り、



彼等を再び革命的プロレタリアートの隊伍において見んことを期待する』ことが述べられた。

第六回大會は黨の新規的を採用した。新黨員の加入、合法的および半合法的状态は規約の擴張を要求した。新黨員は二人の黨員の推薦によつて地方組織によつて採用され、總會によつて確認される。すべての組織は民主主義的中央集権の原則によつて建設される。黨の最高機關は毎年召集される黨大會である。大會は中央委員會を選挙し、後者は大會と大會との間のすべての黨活動を指導する。黨はまだ名稱を變更しなかつた（それは第七回大會までロシア社會民主労働者黨と引續き稱せられた）。レーニン、スターリン、スヴェルドルフ、ブハーリン、リュコフ、ジェルジンスキー、アルテム（セルゲエフ）、カメネフ、トロツキー、ジノヴィエフ、ノギン、ウリツキー、ロモフ、ミリューチン、ヨッフエ、クレステンスキーが中央委員會に選挙され、コロンタイ、スタソフ、ブブノフ、ソコリニコフおよびスミルガが候補者に選挙された。

第六回大會の宣言は、すでに暴動の準備への呼びかけであつた。現在の國際的および國內的情勢の明瞭な繪畫を與へつゝ、宣言は次の呼びかけを以て終つてゐる——

『……この格闘に我黨は大旗をかゝげて進む。黨は自己の手に旗を確乎と保持した。黨はそれを暴行者や厭ふべき誹謗者の前に、革命の裏切者や資本の奴僕の前に傾けなかつた。黨は社會主

義のため、諸民族の親睦のために闘争しつゝ、それを前方に高く保持するであらう。何故なら黨は新しい運動が近づき且つ舊世界の臨終が到來しつゝあることを知つてゐるからである。

『されば新しき戦闘に備へよ、我々の戦闘的同志よ！ 挑發に屈服することなく、不拔に、勇敢に、冷靜に、力を蓄積し、戦闘縦列を組織せよ！ 黨旗の下に、プロレタリアおよび兵士よ！ 我々の旗の下に、抑壓された農村よ！\*』

\* 第六回黨大會議事録、二七五頁。

我黨およびプロレタリア革命の歴史上第六回大會の意義は巨大である。若干の我々の勢力の破壊にも拘らず、若干の同志の動搖にも拘らず、大會はプロレタリアートの闘争のすべての根本問題について確乎たる立場を取つた。その諸決議の中には權力に向つて起ち上りつゝある階級の力が反映された。これらの決議は、防禦から反革命の統一勢力に對する攻撃に移つた黨の確乎たる政治的方針を與へた。

この時期の我々の黨内闘争史から指摘しなければならないのは、第二インターナショナルのストゥクホルム社會黨大會へのボルシヴィキの参加の問題に關するカメネフの右翼日和見主義的進出である。全露中央執行委員會議において、彼は自ら個人的に登場するのだ、『我々のフラクシヨ



ンはこの問題を審議しなかつた』と述べた後、カメネフはかう聲明した、『ストックホルムがこの瞬間から帝國主義國家の掌中における盲目の道具ではなくなつたことが、我々に明かになつた』、『その下に世界プロレタリアートの力が動員されるどころの、廣大な革命旗がストックホルムの上に翻へり始める』と。カメネフはこの聲明をなす権利を持たなかつた、何故なら第一には、中央執行委員會のフラクシオンはこの問題を審議しなかつたから、第二には、帝國主義者の手の仕事であつたストックホルム會議への参加に對する否定的態度に關する中央委員會の何人によつても取消されなかつた決議が存在したからである。この場合カメネフは會議への我々の参加に反對する中央委員會の論據を誤つて説明した。レーニンはこの進出の故にカメネフを厳しくやつつけ、この進出の中に社會帝國主義者に對する媚態を見た。『……全世界の前に革命的國際主義に對して責任を有する國際主義者の黨が、——とレーニンは書いた、——ロシアおよびドイツの社會帝國主義者の詭計や、ブルジョア帝國主義政府の大臣、チエルノフ、スコベレフ一派の詭計に對する媚態によつて自己を汚すことを忍ぶことはできぬ\*』と。

\* レーニン、第二十一卷、七九頁。

第六回大會の諸決議の中に、レーニンの論文の中に、また同志スターリンの演説の中に、黨は

プロレタリア革命の勝利のための闘争における明確な方針を得た。

### 區際派ミトロツキー

ペトログラードには戦争中にボルシエヴィキおよびメンシエヴィキの組織の外に、謂ゆる『區際派』メジライオンツィの組織が存在し、それには黨の革命的方針と一致しなかつた舊ボルシエヴィキの一部、左翼メンシエヴィキ——國際主義者が入つてゐた。この組織には數區のグループが結合されてをり、それがために『區際派』の名稱が生じた。區際派は戦争に對する態度の問題については國際主義者であつた。しかしそれと共にプロレタリア政策の基本的諸問題において、これは動搖的要素であつた。二月革命の後彼等は我黨の第六回大會までは別個に存在したが、第六回大會において區際派との統一が行はれた。何故なら二月革命後外國から歸つた多くの社會民主主義者はヨリ決定的な國際主義的立場を取り、我黨にヨリ近い關係に立つたからである。トロツキーもまた區際派の先頭に立つてゐた。

けれどもボルシエヴィキとの統一に對してトロツキーが如何なる態度を取つたかは、同志ゲイ・メリニチャンスキーの思ひ出\*から見られる。



\* メリニチャンスキー、トロツキーのグループ。論集『レーニン主義のために』、四二八—四三二頁所収。

レーニンの立場は當時トロツキーに無縁であつた。デンマークに到着した後トロツキーがベトログラードにおけるレーニンの進出について知つた時、彼は自己の同志に『イリーチは實際に氣が狂つて、自己の進出によつてかういふ妙なことを惹き起したのではないだらうか?』と述べた。彼は『ブラウダ』を通じて我黨の中央委員會に電報を送る提議を拒絶し、豫め中央委員會と連絡することを欲しなかつた。

トロツキーはボルシェヴィキ黨への自己のその後の加入を説明して、彼は個人的には加入しない、區際派のグループ全體を引き入れなければならない、といふレーニンとの契約があつたかの如くいつてゐる。勿論實際には何等のかゝる協定は存在しなかつた。この時期におけるトロツキーのすべての行狀はボルシェヴィキ黨に對する異つた態度を證明してゐる。

彼は區際派の黨への加入を阻止した。彼は例へば、同志メリニチャンスキーが中央委員會との連絡を『急ぎ』且つイリーチ宛の手紙において輕卒であつた、といつて非難した。『貴君は——と彼はメリニチャンスキーにいつた、——「イリーチの制度」を知らない。イリーチは異説者を我慢しない』と。トロツキーは、緊要なグループとして黨に加入し且つ『自己を溶解せしめないやう、

に、黨内においてそれを維持し』なければならぬ、といふことを固執した。レーニンが二人の區際派を中央委員會の中へ入れることを拒絶したことに對して、トロツキーは非常に疑深い態度を取つた。トロツキーがすでにベトログラードへ到着の後、ボルシェヴィキの『組織的保守主義』が國際主義者の統一を妨げてゐることを證明した、といふことは事實である。換言すれば、トロツキーは、ボルシェヴィキが組織問題において彼の、トロツキーの、メンシエヴィキ的見地に立つうと欲しないことをこぼしたのである。ボルシェヴィキと『區際派』との共同協議會の時にレーニンによつてなされた覺書は、この點において興味がある。

『トロツキー（私の直後、順番でなしに發言した……）——私は決議に全く賛成する、だがそれと共に、私はロシアのボルシェヴィズムが國際化された限りに、おいて、賛成する。ボルシェヴィキは非ボルシェヴィキ化した——そして私はボルシェヴィキと稱することはできぬ……しかしボルシェヴィズムの承認を我々から要求することはできぬ』と。

\* 『レーニンスキース・ポルニク』、第四卷、三〇三頁。

かくしてこの時期にトロツキーは、ボルシェヴィキの側へ一步を進めながら、まだボルシェヴィキと稱することができないことを力説し、『ボルシェヴィキは非ボルシェヴィキ化した』と語り、ボ



ルシエ、ウキ、黨内に溶解されない、自己の、トロツキー派の、グループ、自己の、トロツキー派の、分派を維持しようとした。この志向は、我々が後に見る如く、不幸な成果を與へた。

これになほ附加へなければならぬことは、一九一七年五月、レーニンが一九一七年四月會議に關する小冊子のプランを素描しつゝ、トロツキーは彼にとつて當時小ブルジョアジーの動搖の表現者であつた、と特記したことである。このプランの中に我々は次の如き覺書を見出す――

『小ブルジョアジーの動搖——トロツキー、ラーリンおよびビンシュトク、マルトフ、「ノーヴァヤ・ジズニ」\*』。

\* 『レニンスキー・スゴールニク』、第四卷、二九〇頁、下部。

レーニンがトロツキーを當時、彼の國外からの歸國の後、動搖する小ブルジョアジーの左翼の代表者と認め、たことは、全く明瞭だ。第六回大會は、『區際派』を我黨に取り入れると同時に、自己の宣言において、『……すべての社會民主黨の統一といふ危険なスローガンに對立して、階級的革命的スローガン——實際にメンシエヴィキ帝國主義者と決裂したすべての國際主義者の統一を提起する……\*』と聲明した。『區際派』と共にエル・トロツキーもまた黨に採用されたが、彼は入黨した後、一切のメンシエヴィキ的過去と訣別して我黨の立場に立つべきことを聲明した。その後明

かになつたやうに、トロツキーはボルシエヴィキ黨との自己の意見の相違を一時言葉の上で投げ棄てた、それを再び近い將來に持ち出すために。

『……トロツキー主義はトロツキーの我黨への加入前にはメンシエヴィズムの一分派であり、それはトロツキーの我黨への加入後一時共產主義の一分派となり、それはトロツキーの我黨からの放逐後再びメンシエヴィズムの一分派となつた\*』。

\* 『プロレタルスカヤ・レヴォリュチヤ』編輯部の手紙に關聯した同志オンフノヴィチへの同志スターリンの答『ボルシエヴィズムの歴史の若干の問題について』、『ボルシエヴィク』、一九三二年八月三十日第十六號。

## 八月の國家協議會

メンシエヴィキと社會革命黨員との援助によつて、その掌中に完全な權力を獲得した後、ブルジョアジーは、たゞボルシエヴィキ黨に對してのみならず、革命のすべての征服に對してもまた攻撃に移らうとした。臨時政府は一九一七年八月協議會を任命したが、その任務は労働者に對する攻撃について協議することであつた。

第二回全露商工業者大會において、富豪リャブシンスキーは、恐らく現状からの出口は『飢餓



の骨張つた手が、國民的貧困が人民の僞友——民主主義的ソヴェエトおよび委員會の咽喉を攔む時に』到來するだらうといふことに對する期待を表明した。戦線においては野戦軍法會議と、資本金の利潤のために死ぬることを欲しなかつた兵士に對する死刑とが荒れ狂つた。一九一七年八月三日コルニコフ將軍は背後における死刑の實施を要求した。たゞ盲者のみが、ブルジョアジイが反革命的變革を準備しつゝあることを見なかつたのである。

八月十二日モスクワの大劇場において『國家協議會』が開かれた。ボルシエヴィキはモスクワにおいて總同盟罷業を組織したので、代議員は大停車場から徒歩で行かなければならなかつた。コックさへも罷業した。ケレンスキーは自己の演説において、農民および農民委員會を憲法議會の決定より前に地主所有地を委意的に占取しようとする企圖の故に、『鐵と血』を以て脅迫した。大劇場の舞臺ではブルジョアジイと『階級的平和』、即ち『歴史的握手』をしたところの、ブブリコフによつて代表された商工業階級の代表者とツェレテリによつて代表された『社會主義者』との感激的な聯合を結ぼうとする企圖がなされた。ブルジョアの要素が明かに優勢であつた協議會において臨時政府の地位を強化しようとしたこの企圖は、しかしプロレタリアおよび兵士大衆の抵抗に遭遇した。協議會にはブルジョアの『社會安全委員會』(より正しくいへば、社會危險委員會)、都

市デューマ、ゼムストヴォ、將官階級、士官階級等々の代表者が参加することを許されたにも拘らず、首都や地方のソヴェエト代表者は許されなかつた。少數の代表を持つてゐた労働組合の名において、この協議會ではボルシエヴィキの宣言が宣せられた。

カレディン、アレクセエフおよびコルニコフの諸將軍は公然と不遜な振舞をした。カレディン將軍は『委員會やソヴェエトを解散すること』を提議した。

すでに當時準備されつゝあるコルニコフの進出について知られてゐた。モスクワにおける士官階級は大多數コルニコフの味方であつた。ミリューコフはボルシエヴィズムの絶滅、その制裁へ直接呼びかけた。ケレンスキーは、明かに怖氣づきながら、私かに反革命的陰謀に参加した。『その結果、革命的プロレタリアートと貧農に對する防衛的主戰論者と帝國主義的ブルジョアジイの生きた諸勢力との「聯立」が成立した』(スターリン)。『名譽ある聯立』に——ケレンスキー、ミリューコフおよびツェレテリに——、勿論この聯立がロシアの兵士を新しい戦争に驅り立てることに成功するならばといふ條件の下に、五十億の國債が約束された\*。

\* しかしボルシエヴィキはケレンスキーにモスクワにおいてコルニコフを逮捕すべきことを提議したが、卑怯者のケレンスキーはこれを決行しなかつた。



この協議會は行はれた諸事件における種々の黨の役割に對して更にヨリ多く大衆の眼を開いた。

### コルニロフ暴動

かゝる諸條件の下にコルニロフ將軍は、ブルジョアジーの軍事的獨裁を樹立する目的で反革命的變革のために戦線からベトログラードへ反革命的な部隊（『野蠻師團』その他）を呼びよせた。クルイモフ將軍にはコルニロフによつて二つの任務が與へられた。即ち『軍團を以てベトログラードへ進撃し、都市に入り、ボルシエヴィキの運動に参加しようとする準備してゐるベトログラード守備隊の一部を武装解除し、ベトログラードの住民を武装解除し且つソヴィエトを解散せよ』。この任務を遂行した後には『砲兵を有する一旅團をオラニエンバウムに分遣し、そこに到着した後クロンシュタット守備隊から要塞の武装解除と大陸への移行を要求せよ』と。イギリス大使ビュカナンその他の帝國主義強國の代表者もまたこの變革に共鳴し且つ協力したことが確かめられてゐる。

我黨の當面した問題は、権力が社會革命黨員、メンシエヴィキおよびカデットの無力なブロックの

掌中にあつた時、如何に我々はコルニロフ派との鬭争に關係しなければならぬか？ といふことであつた。この瞬間に同志の極めて少部分は無關心な態度——變革に對する中立の見地に立ち、更に一小部分は防衛的主戰論の見地に立つてゐた。レーニン、スターリンおよび中央委員會の多數派、そして彼等と共に黨の壓倒的部分は、個々の同志が提議したメンシエヴィキや社會革命黨員とのブロックおよび臨時政府の支持を無原則主義と認めた。

レーニンは地下から黨中央委員會へ宛てた手紙の中にかう書いた、『……我々は今日においてさへもケレンスキー政府を支持してはならない。それは無原則主義だ。コルニロフに對して本當に戦はないのか？ 人々は質問する。勿論、戦ふのだ！ しかしこれは同じことではない、そこには境がある。他のボルシエヴィキはそれを踏み越えて、「協調主義」に陥り、事件の流れに引き込まれる。

『我々は戦ふであらう、我々はコルニロフ派を戦ふであらう……しかし我々はケレンスキーを支持するのではなくて、彼の弱味を暴露しよう。これが相違點だ……』\*

\* レーニン、第二十一卷、一一六頁。

コルニロフ暴動の歴史的意義は何處にあるか？ 現在の政治情勢に關する決議草案（一九一七



年九月十六〔三〕日)の中に、レーニンはこの問題にかう答へてゐる。『……正にそれが異常な力を以て人民大衆の眼を、社會革命黨員とメンシエヴィキとの協同的文句によつてこれまで隠蔽されてをり且つ現に隠蔽されてゐる眞理に對して開いたことにある。即ちカデット黨を先頭に戴く地主とブルジョアジーおよび彼等の側に立つてゐる將軍や士官が一緒に組織され、彼等が最も未聞の犯罪、即ちリガを(次いでペトログラードをも)ドイツに引渡すこと、戦線を彼等に開放すること、ボルシエヴィキ聯隊に射撃に加へること、叛亂を開放すること、「野蠻師團」を先頭にして軍隊を首都に引き入れること等々を行はうと準備し且つ行ひつゝあることである——すべてこれはすべての権力をブルジョアジーの掌中に奪取するため、農村における地主の権力を強化するため、國を労働者と農民との血によつて洗ふためである。

『コルニロフの暴動は、すべての歴史がすべての國のために證明したこと、即ちブルジョアジーはたゞ人民に對する自己の権力と自己の收入とを固守することさへできれば、祖國を裏切り且つあらゆる犯罪を敢てする、といふことをロシアのために證明した\*』。

\* レーニン、第二十一卷、一三八—一三九頁。

コルニロフ暴動の後我々の戦術は如何なる點で變更されなければならなかつたか？ レーニン

はかう提議した——

『……彼に對する(ケレンスキーに對する——ヤロスラフスキー)敵意を少しも弱めず、彼に對して述べた言葉を一つも撤回せず、ケレンスキーの顛覆の任務を放棄しないで、我々はいふ、時機を考慮しなければならぬ、我々は今ケレンスキーを顛覆しようとはしない、我々は今や他の方法で彼に對する闘争に進まう、即ちケレンスキーの弱味と動搖を(コルニロフに對して闘争しつゝある)人民に説明することである。これは以前にもまたなされた。しかし今やこれは主要なものとなつた。即ちこの點に形態變化がある\*』と。

\* レーニン、第二十一卷、一一九頁。

勿論それと同時に我々は労働者の武装、反革命家の逮捕、革命的部隊の首都への接近、地主所有地の農民への引渡しと食糧品および工場主に對する労働者管理その他の要求を宣言しなければならなかつた、——すべてこれらのことを我々は労働者、兵士および農民の中で宣傳しなければならなかつた。肝要なことは、『今や行動の時だ、コルニロフに對する戦を革命的に行ひ、大衆を引き入れ、彼等を引き上げ、彼等を煽動しなければならぬ(だがケレンスキーは大衆と戦つてをり、人民と戦つてゐる)』ことにあつた。



メンシエヴィキと社會革命黨員とはたゞ軍隊の中における我々の活動を妨害しなかつたのみならず、彼等——狼狽者および驚愕者——は我々の軍事組織の援助に轉ずることを餘儀なくされた、何故なら彼等自身がすでに労働者および兵士大衆の信用を著しく喪失したからである。コルニロフ派との闘争は大衆の中における我黨の權威および影響を高めた。コルニロフ派の敗北は大衆の中に自己の力の意識を吹きこんだ。この時代には赤衛軍の建設と我黨の軍事組織の強化との仕事<sup>が</sup>特に進捗した。

我々は情勢を利用し、可能なところにおいては到るところで、赤衛軍の部隊を武装した。十月十日中央委員會議において同志ウリツキは、ペトログラードの労働者は四萬挺の旋條銃を持つてゐる、と報告した、——これは、主としてコルニロフ事件において、ペトログラードへのコルニロフ派の進撃を撃退するために、取得された武器であつた。

七月事件以前には『すべての権力をソヴィエトへ』といふスローガンは、メンシエヴィキと社會革命黨とが、帝國主義者と決裂して、ソヴィエト政府を樹立するだらう、そしてソヴィエトの内部では『ソヴィエト』黨および諸階級の『平和的』闘争が進行し、この闘争は『プロレタリアートの獨裁の確保にとつて必要な條件の準備』を容易ならしめるであらう、といふことが考慮されてゐた。

七月事件はこの平和的發展を不可能ならしめた。

コルニロフ暴動の敗北は非常に多くのものを變化させた。兩首都におけるものをも含めて、多くのソヴィエトにおいては、ボルシエヴィキが多数派となり且つその掌中に指導的ソヴィエト機關を奪取した。『……すべての権力をソヴィエトへ』といふスローガンが再び日程に上つた。しかし今やこのスローガンは第一段階において有したことをすでに意味しなかつた。今やこのスローガンは帝國主義との完全な分離と権力のボルシエヴィキへの移行を意味した、何故ならソヴィエトはその多数派においてすでにボルシエヴィキ的であつたからである。今やこのスローガンは革命が暴動によるプロレタリアートの獨裁へ直接近づいたことを意味した。そのみならず、今やこのスローガンはプロレタリアートの獨裁の組織と國家形成とを意味した\*。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、九五頁。

### 突撃組織の時期（九—十月）

『この時期の特徴的な特性と認むべきものは、——同志スターリンに書いた、——危機の急速な發展、支配社會の完全な當惑、社會革命黨員およびメンシエヴィキの孤立化および動搖的要素の



ボルシェヴィキの側への大衆的脱走である\*』と。

\* スターリン、反対派について、一一三頁。

國內における革命的危機は發展した。秋になると經濟的崩壊が尖鋭化された。一九一七年九月には石炭採掘高が一九一六年末と比較して七〇%に相當した。ペトログラードとモスクワは石炭の必要高の三〇%を取得した。八、九月の間に更に六萬一千人の労働者を有する二百三十一企業が閉鎖された。労働者階級は飢ゑた。労働者の同盟罷業はたゞ止まなかつたのみならず、益々戰鬥的な性質を帯びた。論文『切迫する破局および如何にそれに對して闘争すべきか』の中でレーニンは、戦争の延引、飢餓、崩壊および大衆の貧困が臨時政府の政策の結果であることを指示した。レーニンはプロレタリアートと貧農との前に、たゞ武装暴動と権力のソヴェトへの移行によつてのみ實現されうる最大の任務を提起した。『……戦争は無容赦である、——とレーニンは書いた、——それは無慈悲な鋭さを以て問題を提起する。或ひは滅亡するか或ひは先進國に追いつき且つそれらを經濟的にもまた追ひ越すか、と\*』。

\* レーニン、第二十一卷、一九一頁。

労働者階級、農民層および軍隊における我黨の影響は強まつた。六月末全露労働組合會議にお

いてボルシェヴィキは代議員の約三分の一——三六・六%を持つてゐたが、九月民主主義協議會においては労働組合代表は百二十人のうちすでに半數以上を持つてゐた——六十九人のボルシェヴィキ（五七・五%）。

同時に我々の連絡が強化され、農村における我々の影響が強まつた。八、九月農業運動が全國において展開された。即ち家畜が搔拂はれ、土地や森林が分割され、穀物が取り上げられた。郡當局は軍隊の援助を要求した。郡執行委員會は私有地を郡土地委員會の掌中に移すことを提議した。一九一七年九月および十月には農民による地主所有地の占取が非常に増進した。地主の邸宅の破壊が行はれ、農民は地主に對しテロルを適用した。

コルニロフの進出は廣汎な農民大衆に、土地が全く彼等の手から泳ぎ去るかも知れないこと、地主的將軍は、ソヴェトを破壊した後、農民層をも壓迫するであらう、といふことを示した。さればこそ貧農層および勤勞農民層は我々の側に移行し始めたのである、即ち彼等はたゞプロレタリア黨のみが革命を最後まで導き、地主を滅ぼし且つ壓迫して、土地を農民に與へうることを理解した。

一九一七年九月には黨は、農民運動の成長、その規模と深さだが、プロレタリアートと貧農層



とに、権力と土地とのために彼等の闘争のうちに、農民層のすべての基本的大衆の支持を確保すると認むべきすべての根拠を持つてゐた。この時期に属するレーニンのすべての手紙や論文のうち、また暴動の問題に關する黨のすべての決議のうち、我々は農民運動のこの發展の考慮を見るのである。一九一七年八月末、レーニンは論文『農民と労働者』の中で、また論文『自然發生的な土地占取について』の中で、メンシエヴィキおよび特に社會革命黨員との闘争を基本的任務の一つとして提起してゐる。實際農民大衆の政治教育と革命化——彼等の独自の『ボルシェヴィキ化』がこの數ヶ月間（二月から十月に至る）に巨人的な歩みを以て進んだ。

『……この八ヶ月は、大衆の政治的啓蒙と革命的教育との見地から見れば、通常の合法的發展の全十年間と大膽に同列に置くことができる、何故ならそれは革命の八ヶ月を意味するからである……』。社會革命黨員に絶望して、農民は彼等から離れ、プロレタリアートの周圍に結成した。この時期の歴史は農民層の獲得、農民層の大多數の獲得のための社會革命黨員（小ブルジョア民主主義）とボルシェヴィキ（プロレタリア民主主義）との闘争の歴史である。社會革命黨員とメンシエヴィキとが土地に對して闘争し、恣意的沒收に對しては懲罰隊の派遣によつて處罰したこと、彼等が戦争の繼續と革命の絞殺との政策を行つたことは、農民大衆の眼を、作り出された状態から

の出口を何處に求むべきか、といふことに對して開いた。だが農民にとつて、土地問題について重要な問題は、平和の問題、如何にして戦争を終結するかといふことであつた。『戦争を終結せよ』、「戦争から分離せよ」、——これが疲弊した國および何よりも先づ農民層の一般的な叫びであつた（スターリン）。だがブルジョアジーの顛覆なくしては、新しき革命——プロレタリア革命なくしては、すでに戦争を終結することができなかつた。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、四〇頁。

しかしレーニンはかう述べた、『人民が資本家との協調に信念を失つたことの徴候の一つは、この協調政策を最後まで實行した二つの黨、社會革命黨とメンシエヴィキとの中に、それらの黨内からの不満、協調主義に對する闘争、最近の社會革命黨、會議およびメンシエヴィキ黨大會において約五分の二（四〇％）に達した反對派が、特に七月以後、益々成長しつゝあることである』\*。

\* レーニン、第二十一卷、一四二頁。

その後のすべての文献においては、農民運動の成長、この時機を逸する危険についてのレーニンの言及が終始一貫してゐる\*。

\* 参照、レーニン、第二十一卷、二二六頁、『農民暴動は成長する』。二九三頁、『農業運動は成長する』。二八八頁、『今ヤソヴェエトの暴動の機關への轉化をボルシェヴィキが拒否することは實に農民に對する裏切であらう』。三三五頁、『最



後にロシアにおける現代生活の最大の事實は農民暴動である」等々。

コルニロフ暴動に對する鬭争は我黨にたゞ軍事組織と赤衛軍のみならず、ソヴィエトにおける我々の影響をも強化する可能性を與へた。ペトログラード、モスクワその他のソヴィエトは大抵ボルシエヴィキ的なものになつた。黨は地方ソヴィエトを征服した。多くの場所において地方都市デューマはボルシエヴィキ的なものになつた。

工場や軍隊は自己の代議員を改選し、メンシエヴィキと社會革命黨員の代りに我黨の代表者をソヴィエトへ送つた。九月十三日にはペトログラード・ソヴィエトにおいて、九月十九日にはモスクワ・ソヴィエトにおいて、多数派はボルシエヴィキ的決議を採用した。多くの地方ソヴィエト（イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク、ルガンスク）がボルシエヴィキによつて征服された。七月事件の後撤回されたスローガン『すべての権力をソヴィエトへ』が再び現實的スローガンとなつた。

しかし、我々が知つてゐるやうに、これはメンシエヴィキ社會革命黨員的ソヴィエトの掌中への権力の移行といふ古いスローガンではなかつた。否、これはプロレタリアートと貧農との掌中への権力の移行を目的とする暴動の、スローガンであつた。

農民ソヴィエトもまた右翼社會革命黨員の影響から解放された。大衆は抑制し難く左翼化し、

ボルシエヴィキ黨の周圍への彼等の結成もまた抑制し難く進行した。幾多の縣において地主所有地の農民委員會による恣意的な占取が行はれた。ケレンスキーは徒に懲罰遠征隊を送り、土地委員を逮捕した、——これは労働者、兵士および農民大衆の革命的氣分を更にヨリ多く灼熱した。ボルシエヴィキの影響は、コルニロフ暴動の後その翌日ボルシエヴィキ的決議を採用したペトログラード・ソヴィエトの決議に先づ第一に述べられてゐる。舊い、メンシエヴィキ的および社會革命黨員的幹部會は退職した。モスクワ・ソヴィエトのボルシエヴィキ化が徐々に進行した。兵士代表ソヴィエトにおいては依然としてメンシエヴィキと社會革命黨員が座席を占め、軍隊の變化した氣分にも拘らず、出て行くことを欲しなかつた。けれどもモスクワ・ソヴィエトもまた多くのボルシエヴィキ的決議、例へばリキンスカヤ製作所の國有化と労働者管理への讓渡に關する決議、また皮革企業の經營者に労働者の要求を實現することを義務づける決議を採用した。これらの決議は、プロレタリアートの利益のために行動するソヴィエト権力が最高権力と認められることを意味した。かゝる決議は最大中心地における他のソヴィエトにおいても社會協調主義者の影響から大衆を解放した。かゝる諸條件の下に、すべての権力のソヴィエトへの讓渡、権力の奪取の問題が全面的に發生した。



## 『民主主義協議會』『豫備議會』とボルシェヴィキの戰術

メンシエヴィキと社會革命黨員はこの益々發展する革命的疾風に何を對置することができたか？最も露骨な反革命家はすでに當時内亂のために兵力を組織してゐた、即ちカレディンとコルニコフとはドン河畔において、ドゥートフはウラルのカザック人の中で。

メンシエヴィキと社會革命黨員は、發展する大衆の革命運動を弱めるために更に一つの試みをした。この目的を以て一九一七年九月十二日協同的ソヴェト、労働組合、商工業社會および軍事組織の代表者より成る『全露民主主義協議會』が召集された。協議會によつて『豫備議會』(臨時共和國ソヴェト)が選出されたが、それは臨時政府のために協議會的性質を持たなければならなかつた(労働者は『豫備議會』を冗談に豫備妖怪と稱した)。この『豫備議會』ほど哀れな無力の見物はまだ歴史上になかつたやうだ\*。

\* たゞ一八四八年三月革命の後ドイツにおけるフランクフルト議會(『フランクフルトのお喋り場所』)を除いて。

勿論ソヴェトの聲は、ボルシェヴィキがボイコットすることを決議したこのお喋りの場所において沈没した。實際、一度にはなくて、若干の動搖の後、ボルシェヴィキ・フラクシオンはこの豫備

議會を見棄した\*。

\* フラクシオン會議においてカメネフとノギンとは参加賛成の報告者として進出し、そしてノギンは、『豫備議會』のボイコットは暴動への直接の召集を意味するだらう、と考へた。カメネフもまたほぼ同じ理由を述べた。スターリンはそれに反對であつた。レーニンは『豫備議會』へのこの一時的参加を極めて重大な誤謬と考へた。

協議會がカデットとの多くの取引および仲買の後彼等との聯立に反對したにも拘らず、ケレンスキーはカデットも参加した新しい聯立を形成し、そして政府には十人の『社會主義者』とコノヴァロフを先頭とする六人の資本家が参加した。レーニンはこの協議會の階級的意義を『政府黨たる社會革命黨およびメンシエヴィキのヨリ以上の崩壊、萬人にとつて明瞭な彼等の革命的民主主義における多數派の喪失、ケレンスキー君並びにツェレツェリ君、チェルノフ一派のポナバルト主義の統一と暴露への一步前進』として規定してゐる。

すでにこの時期に黨は中央委員會の個々の成員の日和見主義的動搖を克服しなければならなかつた。最初カメネフにおいて、次いでジノヴィエフにおいて動搖が特に強かつた。

帝國主義戰爭時代に現はれたカメネフとの意見の相違(デューマ・フラクシオン訴訟事件におけるカメネフの日和見主義的行狀)、二一二月革命の最初の週間および四月會議において、次いでストックホルム會議への参加に關する問題においてもまた現はれた意見の相違は、偶然な意見の



相違ではなかつた。

まだ十月暴動前にこの意見の相違は『民主主義協議會』や謂ゆる豫備議會——全露共和國會議への参加の問題について現はれた。カメネフは『豫備議會』のボイコットに反対であり、黨中央委員會——レーニンとスターリン——はボイコットに賛成であつた。

豫備議會を放置する決議が採用された後、カメネフは、自分はこの決議に同意することができないから、中央執行委員會委員の義務から免除してほしい、と中央委員會において聲明した。これは右翼日和見主義的動搖の繼續であつて、十月の前夜に黨史上未曾有な行動に導いたのである。

### 武装暴動の準備。シノヴィエフとカメネフの罷業破りの暴露

暴動の問題は十月十日の會議において、シノヴィエフとカメネフとの二人に對する全員一致で中央委員會によつて決議された。けれどもこの二人の中央委員會委員は、黨内において憤激を喚び起した無規律と規律上の動搖とを暴露した。十月十一日最も大きな諸組織（モスクワ地方委員會、フィンランド地方委員會、中央執行委員會フラクシオン・ビューロー、北部地方ソヴィエト大會フラクシオン・ビューロー）は、カメネフとシノヴィエフによつて署名された『現在の瞬間に關す

る手紙』を受取つたが、その中においてこの二人の中央委員會委員は暴動に公然反對してゐた。『……我々は最も深く確信してゐる、——と彼等は書いた、——今日武装暴動を宣言することは、たゞ我黨の運命のみならず、ロシア革命と國際革命との運命を賭することを意味する』と。これらの中央委員會委員は次の如く確信した、『……我々はブルジョアジーの軍隊に連發ピストルを突きつけるであらう』、『ブルジョアジーは憲法議會を召集することを餘儀なくされるであらう、そしてこの憲法議會において我々は巨大な影響を有するであらう』、『……憲法議會の選舉に對する我黨の機會は卓絶してゐる』と。彼等は『……ロシアにおいて労働者の大多数と兵士の大部分は我々に味方してゐる』と認めたが、しかし彼等の意見によれば、農民層と國際プロレタリアートの大多数は我々に味方してゐない。『……選擇が我々にかゝつてゐる限り、我々は今や防衛的立場を組織しうるし且つ組織しなければならぬ。大衆の中には戰闘的氣分が存在しない。若干の最も大きな組合（鐵道従業員）においては我々は弱い……』、『……かゝる諸條件の下において、或ひは今日か或ひは永久に然らずか、といふやうなプロレタリア黨の掌中への權力の移行の問題提起は、深刻な歴史的誤謬であらう』と。即時の暴動といふ『有害な政策』に對してシノヴィエフとカメネフは『警告の聲』を擧げた。勿論シノヴィエフとカメネフとのこの手紙は黨外においてよく知られ



るに至り、『ノーヴァ・ジズニ』出身の國際主義者の如き動搖的要素の中で共鳴を喚び起した。

\* シノヴィエフミカメネフの手紙からのすべての抜萃は、レーニン全集、第二十一卷、四九五―四九八頁によつて引用す。

我黨の中央委員會は問題をどう見たか？ 一九一七年十月十日ジ、ハ、ヴ、ハ、エフとカメネフとの投票に對して、武装暴動の時宜に適することゝ必要とに關する決議が中央委員會によつて採用された。

一九一七年十月十六日責任活動家を有する中央委員會は、この決議を完全に是認する決議を採用した。

二つの決議はレーニンによつて作成され且つ提議された。

レーニンは、『危機は熟した』ことおよび暴動の遅延は革命の敗北および破滅の源泉となるべきことを固執した。

論文『危機は熟せり』の中でレーニンはこの危機の最も重要な表象の一つとして農民暴動の成長を指摘してゐる。第二の最も重要な事情は始まつた民族的軋轢である（ウクライナ、フィンランド）。第三は軍隊である、——それはボルシエヴィキに味方してゐる。第四は小ブルジョア階級

ある、——彼等は聯立に顔を背けた。『左翼社會革命黨員と共に我々は今やソヴィエトにおいても軍隊においても國內においても多数派を持つてゐる、この點には少しの疑ひもありえない』。鐵道従業員と郵便従業員は政府と鋭く軋轢してゐた。もし暴動を拒否するならば、我々はプロレタリアの事業、國際主義、農民層、民主主義および自由の『哀れむべき裏切者』であらう。レーニンは、トロツキーが欲したやうに、暴動を是非ソヴィエト大會の時にやらうとすることに反對した。レーニンは、ソヴィエト大會が簡單に權力の移行を布告しうる、とは決して考へなかつた。權力を奪取するには眞面目な武装闘争が必要であつた。さればレーニンは、今や暴動に關する政治問題は軍事問題だ、と考へた。ソヴィエトへの權力の移行が十月二十五日（ソヴィエト大會開會の日）と定められたところの、ペトログラード・ソヴィエトによつて發表された決定を彼は嘲笑した。レーニンは、ペトログラード、モスクワおよびバルト艦隊の三點を不意に攻撃すべきことを提議した。彼はこれを九月二十九日に書いた。

リガがドイツ人に引渡された後、同盟者の兵力の全く怪しい行狀の下に、政府がペトログラードをも引渡すだらう、といふ重大な危険性が存在した。これについて眞面目な協議が行はれ、そして臨時政府のモスクワへの移轉のための委員會さへも設立された。かゝる條件の下においてレ



レーニンは十月八日『正に、ベトログラードを救済するために、ケレンスキーを顛覆して、権力を、兩首都のソヴィエトに奪取しなければならぬ』と書いた。この精神でレーニンは一九一七年十月十日および十六日の中央委員會議における報告を以て進出した。暴動に對するジノヴィエフとカメネフとの進出はレーニンの激しい憤怒を喚び起した。彼はこれらの同志の結論を『かくも恥づべき動搖の説明を思出すことは容易でないやうな、狼狽、恐怖およびボルシエヴィズムと革命的プロレタリアの國際主義とのすべての基本的觀念の崩壊の驚くべき現はれ』（『同志への手紙』）と認めた。レーニンはこの動搖を暴露することが必要だと考へた、何故なら『自己の原則を喪失したこの一組の同志は若干の動亂を持ちこみうる』からである。レーニンは問題を最も鋭く提起した、『或ひはリーベルダン\*への移行、「すべての権力をソヴィエトへ」といふスローガンの公然の拒否か、或ひは暴動か。中間の道はない』と。

\*メンシエヴィキに與へられた嘲笑的な綽名。それは二人の有名なメンシエヴィキ、リーベルおよびダンの苗字の結合から成立した。

だがカメネフのメッセージが彼の名と彼を支持するジノヴィエフの名とによつて『ノーヴァヤ・ジズニ\*』紙上に現はれるや、レーニンは中央委員會へ『ボルシエヴィキ黨員への手紙』を送り、その

中でカメネフおよびジノヴィエフを罷業破りとして中央委員會および黨から除名すべきことを要求した。

\*新聞『ノーヴァヤ・ジズニ』は嘗て黨内において顯著な役割を演じた舊ボルシエヴィキ（アー・ボグダンノフ、ペー・ブライロフ、ペー・バザロフ、ゴリテンベルグ、メシニコフスキー、エス・ヴォリスキー、リンドフ、デスニツキー、ストロエフ）のグループによつて發行された。アー・エム・ゴリキー、アー・ルナチャルスキー、ユー・エム・ステクロフ、メンシエヴィク・スハノフその他が『ノーヴァヤ・ジズニ』に寄稿した。事の本質においてこの新聞はブルジョアシーとの協調と革命をブルジョア民主主義革命に局限することの立場を取つた。新聞はボルシエヴィキを鋭く批判した。そしてこの新聞においてジノヴィエフとカメネフとは黨の決議に反對したのである。

### 暴動の組織と實行

十月革命は我黨の指導の下に労働者および兵士大衆によつて遂行された。そして我黨はこの時に労働者の利益のその決定的擁護によつて、掠奪戦争およびブルジョア政府に對する闘争によつて、大衆の無限の信頼を獲得してゐた。けれども周到な組織的準備なくしては、勝利は殆ど確保されなかつたであらう。我々の軍事組織とベトログラード、モスクワその他の都市の労働者の赤衛軍の組織とが暴動において大なる役割を演じた。この時我黨が最も主要なソヴィエトにおいて



多数派を獲得してゐたことは、我々がすでに見たところである。

大衆の中におけるメンシエヴィキと社會革命黨員との影響の喪失とブルジョア政府の多くの裏切行爲とが我々の成功を助長した。我黨はその壓倒的の大多數において、ジノヴハエフ、カメネフ、その他の日和見主義者の動搖に決定的な打撃を與へた。黨は中央委員會に賛成し、レーニンに賛成した。

レーニンはまだ革命よりずっと前、彼がケレンスキの探偵から隠れなければならなかつた時に書いた同じ表題の小冊子の中で、ボルシエヴィキは國家權力を維持するか、といふ問題を詳しく解剖し且つそれに肯定的に答へた。すべての我々の過去の戰闘的ボルシエヴィキの經驗、一九〇五年の暴動の經驗は、決定的打撃を與へるために、特にこれらの日に集積された。暴動の少し前レーニンは特別の論文『建設されたソヴェト』の中で次のことを注意した、『……武装暴動は、特殊な法則に従屬せる政治闘争の特殊な形態だ、このことを注意深く熟考しなければならぬ。武装暴動は、戦争と同様に、一つの技術だ、と書いたカール・マルクスは、この眞理を極めて浮彫的に表現した。

『この技術の主なる規則の中からマルクスは次のものを列挙した——

(一) 決して暴動を遊ぶことなく、一たびそれを開始したならば、最後まで進まなければならぬことを、確乎と知れ。

(二) 決定的な場所、決定的な瞬間に、優勢な兵力を集結しなければならぬ、何故ならさうでなかつたら、ヨリ良き準備と組織とを有する敵が、叛亂者を撃破するであらうから。

(三) 一たび暴動が開始されたならば、最大の決断を以て行動し、不變的に、無條件的に攻撃に移らなければならぬ。「防禦は武装暴動の死だ」。

(四) 不意に敵を襲撃し、敵の軍隊が分散してゐる瞬間を捕へるやうに努めなければならぬ。

(五) 小さな成功でも毎日(たゞ一都市のみが問題であるならば毎時、といはねばならぬ)達成し、是非とも、「道德的優位」を維持しなければならぬ。

マルクスは武装暴動に關するすべての革命の教訓を「歴史上最大の革命的戰術の大家ダントンの、勇氣、勇氣、そして今一度勇氣」といふ言葉を以て結んだ\*。

\*レーニン、第二十一卷、三一九—三二〇頁。

暴動の技術のそれらの規則に言及した後、レーニンは、全線の攻撃をも含めて、同時に攻撃を行ひ、決定的な中心地において巨人的な優勢な兵力を作り出し、最も重要な機關を占領し、最も



重要な動作への参加のために、最も決定的な要素、特に労働者青年を分出しなければならぬことについて具體的な指示を與へた。レーニンのこの助言は暴動の成功にとつて巨大な意義を持つてゐた。

ペトログラードの軍隊を恐れて、ケレンスキーは、北軍司令官チェレミソフを通じて、ペトログラードから革命的部分を撤退して彼等を戦線へ輸送せよ、といふ命令を發した。ボルシェヴィキに指導されたペトログラード・ソヴェトは、自己の委員をすべての部隊に任命するところの、軍事革命委員會を設立すべきことを決議した。決してたゞ一つの命令もこれらの委員の承知と承諾なくしては遂行されなかつた\*。

\* モスクワではかかる機關は暴動自體の前夜設立された。

革命的な軍隊は首都から撤退されなかつた。守備隊は一部隊一部隊とボルシェヴィキの味方についた。

同志スターリンは『革命が自己の攻撃の各々の歩みまたは殆ど各々の歩みを防禦の形の下になすやうに努力することにある』ところの、ボルシェヴィキの戦術の獨特な特殊性の一つを指摘した。ソヴェトはペトログラードからの軍隊の撤退に反対し、自己の委員を部隊に派遣し等々した。

『……革命はそれによつて非決定的、動搖的要素を自己の軌道に引き入れるために、防禦の外被によつて自己の攻撃的行爲を隠蔽したかのやうであつた\*』。

\* スターリン、反對派について、一一四頁。

暴動の政治的指導は中央委員會とペトログラード委員會との掌中にあつた。暴動の實行における實際的指導のために、中央委員會と最も重要な組織の代表者との會議において、スターリン、スヴェルドロフ、ジエリンスキ、ブブノフおよびウリツキより成る中央部が我黨によつて設立された。この中央部こそ(そして他の何物でもなく)暴動に参加したすべての組織を指導したのである(革命的な部隊、赤衛軍)。我々のボルシェヴィキ新聞、特に『ブラウダ』と『ソルダトスカヤ・ブラウダ』との巨大な役割を特記しなければならぬ。『ブラウダ』は、それが我黨の革命的スローガンの下に新しい革命的昂揚へ大衆を動員した戦前時代においてすでに獲得された、名譽ある名前を持つてゐた。今や『ブラウダ』はプロレタリア革命の警鐘となつた。レーニンとスターリンとの論文は大衆の革命的、ボルシェヴィキ的教育の仕事において巨大な意義を持ち、革命の任務を明かにした。戦争の終結のあらゆる閃光を貪るやうに捕へた背後や戦線や塹壕における兵士大衆の中で、『ソルダトスカヤ・ブラウダ』はこの唯一の道——帝國主義戦争の内亂への



轉化』を指示し、『敵は自己の祖國にある』ことを倦まず憊まず説明した。

一九一七年十月二十四日臨時政府は我々の新聞『ラボーチー・ブーティ』と『ソルダート』との閉鎖命令を發した。軍事革命委員會は十月二十五日、『革命的新聞の印刷所を開き、それらの發行を續け、そして革命的印刷所の保護をリトフスキー聯隊の兵士および第六豫備工兵大隊に委ねる』ことを決議した。かくしてこの時すでに臨時政府の権力は全く擬制的なものであつた。

十月二十五日赤衛軍と革命軍によつて最も重要な政府の諸機關、大停車場、郵便局、電信局、電報通信社、國立銀行、冬宮が占領され、豫備議會の會議が解散された。スモルヌイは革命の軍事的本部となり、そこから軍事命令がでて、そこで赤衛軍が武装された。ペトログラードの勞働者はこれらの日に、彼等がボルシエヴィキ黨の指導の下に優秀な學校を卒業してゐたことを示した。我々の軍事組織の活動によつて暴動に準備された革命部隊は、軍事命令を正確に遂行し、赤衛軍と並んで戦つた。しかし最初から我々の艦隊が革命の味方であつたといふ事情は、特に大なる——軍事的および道徳的・政治的——意義を持つてゐた。クロンシュタットは最初からボルシエヴィキ黨の要塞であつて、ここでは臨時政府の権力は認められてゐなかつた。巡洋艦『アウロラ』はその大砲の響きによつて十月二十五日新しき時代——プロレタリア社會主義革命の開始を知ら

せた。十月革命の勝利におけるよりも劣らぬ名譽の役割が、始まつた内亂の多くの英雄的遠征において赤色艦隊水兵に屬してゐる。

臨時政府は無力であつた。

政府の側にはいふに足らぬ兵力があつたのみであり、また住民大衆の何等の同情もなかつたために、ペトログラードにおける十月革命は比較的小さな犠牲によつて行はれた。

ボルシエヴィキ黨は大衆の中における組織的活動によつて、革命的スローガンの明晰さによつて、巧みな組織によつて、協調的黨派を暴露し、大衆を革命の味方に獲得した。

トロツキーにとつてはボルシエヴィキ黨のすべてのこの活動は特殊な意義を持つてゐない。

トロツキーは、我々ボルシエヴィキがすでに一九一七年の初めに、權力を奪取すべく準備された政治的軍隊を持つてゐたかのやうに、事態を誤つて描き出した。同志スターリンは次のことを指摘した、『……實際においてはボルシエヴィキは一九一七年三月に準備された政治的軍隊を持つてゐなかつたし、また持ちえなかつた。ボルシエヴィキは漸くかゝる軍隊を一九一七年四月から十月までの諸階級の闘争と衝突との進行中に作り出した（それを最後に、一九一七年十月に作り出した）、それを四月の示威運動を通じて、また六月および七月の示威運動を通じて、地方議會および



全露議會の選舉を通じて、また反革命との闘争を通じて、またソヴェートの獲得を通じて作り出したのである\*』。

\* スターリン、十月革命とロシア共産主義者の戦術、『レーニン主義の諸問題』、九〇頁。

その後トロツキーは、彼が十月革命においてかくも特殊な、排他的に重要な役割を演じたかの如く問題を描き出さうと試みた。我々はすでに、トロツキーが暴動の指導的、實際的、戦闘的中央部にさへも選出されなかつたことを見た。トロツキーの特殊な役割に關するこの傳説は、その後、レーニンの死後トロツキーが十月革命の徹頭徹尾偽造的な描寫を與へたところの自己の『十月の教訓』を以て進出した時、暴露された。

トロツキーは、ボルシェヴィキではなくて、彼トロツキーが十月革命を完成したかのやうに事態を考へようとした。彼の提議によれば、ペトログラード・ソヴェトが首都からの革命軍の不撤退に關する決議を採用し、そしてこれによつて十月革命の四分の三はすでに完成された、そして十月二十五日暴動は『補助的性質』を持つてゐた、といふのである。然るに事實は全く別のことを物語つてゐる。暴動、即ち権力の獲得は、ソヴェト大會前に行はれ、そして十月革命の結果を決定した。暴動は我黨の中央委員會、その軍事組織によつて準備された。十月二十一日すべての

革命部隊に軍事革命委員會の委員が派遣された。暴動前毎日精力的な戦闘準備が行はれた。軍艦——巡洋艦『アウロラ』と『ザリャー・スヴィボドイ』とは一定の課題を與へられた。戦闘的な『五人』の中で二十五日冬宮を攻撃することが決議された。かやうに十月革命におけるトロツキーの特殊な役割に關する傳説は、事實を吟味する場合には崩壊するのである。『……事件はレーニンが全く正しかつたことを示した。周知の如く、暴動は全露ソヴェト大會前に開始された。周知の如く、権力は全露ソヴェト大會の開會前に事實上奪取された\*』。

\* スターリン、反對派について、一一七頁。

黨は一九一七年二月革命において、組織的に弱められて、地下運動から出て來た。それは自己の闘争において『大衆運動の自然發生的昂揚』(スターリン)に立脚し、十月の政治的軍隊を形成した。『十月のすべての準備は一つの黨、ボルシェヴィキ黨の指導の下に行はれた』、だから十月における権力もまたこの一つの黨の掌中にあつた。それは數百萬の勞働者、農民、兵士を小ブルジョアの協調主義的黨の影響下から引き離した。それはソヴェトをボルシェヴィキ化し、それを執拗な闘争において征服し、それを暴動と革命的権力との機關に轉化し、大衆をして自己の經驗に基いてボルシェヴィキのスローガンの正しさを納得させた\*。



\* 参照、スターリン、十月革命とロシア共産主義者の戦術、『レーニン主義の諸問題』、八九―九八頁。

そして十月二十五日に自己の會議を開いた第二回ソヴェト大會は、ペトログラードの労働者および兵士大衆によつて獲得された權力を採用した。

敵と信念の浅い者とのあらゆる豫言にも拘らず、十月革命は勝利した。歴史上初めて權力がプロレタリアートによつて地球の六分の一の廣さの上に獲得された。敵の抵抗を克服し、この權力を維持し、最初の成功を社會主義の道へ固め、社會主義建設の可能性を確保するためには、労働者大衆の英雄的努力、社會主義の事業への彼等の最大の献身、彼等の集團的指導者——共産主義者（ボルシエヴィキ）の黨の搖ぎなき堅忍不拔が必要であつた。これは、黨が徹底的に社會主義的プロレタリアートの前衛部隊であり、國の二つの基本的階級——プロレタリアートと農民層——とに對して正しい政策を行ひ、そしてソヴェト聯邦に居住するすべての民族の勤勞者大衆の同盟を設立することができたが故に、達成されたのである。

#### 第十四章 参考文献

レーニン、三つの危機、全集、第二十一卷、二〇―二四頁。  
 レーニン、スローガンについて、同上、三三―三八頁。

レーニン、憲法的幻影について、同上、四八―五九頁。  
 レーニン、ボルシエヴィキは國家權力を維持するか、同上、二四三―二八四頁。  
 レーニン、評論家の日記から、同上、二二〇頁、四二四頁。  
 レーニン、マルクス主義と暴動、同上、一三五―一三九頁。  
 レーニン、建設されたソヴェト、同上、三一七頁。  
 レーニン、ボルシエヴィキ黨員宛の手紙、同上、三五〇―三五六頁。  
 レーニン、國家と革命、全集、第二十一卷。  
 スターリン、第六回黨大會における報告、論集『十月への道』。  
 スターリン、十月革命とロシア共産主義者の戦術、第一、二、四章、『レーニン主義の諸問題』。



## 第十五章 プロレタリア革命とソヴィエト權力の

### 第一歩

一九一七年十月二十五日(十一月七日)の社會主義革

命とその國際的意義

その後(一九一九年三月)採用された我黨の綱領の中には、最初にかう書かれてゐる、『ロシアに於ける十月革命(一九一七年十月二十五日(十一月七日))は、貧農層または半プロレタリアートの支持の下に、共產主義社會の基礎を設立し始めたところの、プロレタリアートの獨裁を實現した』と。そして更に、すべての先進國に於ける革命運動の事實を指摘しつゝ、我々の綱領は、『世界プロレタリア共產主義革命の時代が始まつた』ことを特記してゐる。これらの簡単な言葉の中には、ソヴェト國家が十月の後の翌日、貧農層または半プロレタリアートに立脚するところのプロレタリアートの獨裁であつた、といふ十分正確な記述が含まれてゐる、この國家は如何なる根本任務に當面したか? 『共產主義社會の基礎を設立する』ことである。だがこれは、我々



が當時、十月の後の最初の週および月においてもまた、我々が社會主義を建設し始めたこと考へたことを意味し、これは、我々が當時においてもまた社會主義の勝利を信じてゐた——何故なら社會主義は共產主義社會の基礎であるから——ことを意味する。我々は常に、我々の社會主義建設の成功が他の國々におけるプロレタリアートの運動と結びついてゐると考へてゐた。我々は當時においてもまた、『世界プロレタリア共產主義革命が始まつた』ことを特記したのである。すでに一九一七年十月二十六日労働者および兵士代表ベトログラード・ソヴェトにおける十月革命に關する最初の演説において、レーニンは次のことを指摘した——

『……今やロシア史における新しい時代が到来しつゝある、そしてこの第三ロシア革命はその終局の結果において社會主義の勝利に導かなければならぬ』と。

彼はいつた——

『ロシアにおいて我々は今やプロレタリア社會主義國家の建設に従事しなければならぬ』と。

\* レーニン、第二十二卷、四五頁。力點は到るころ筆者のもの——ヤロスラフスキー。

しかしこれは急激な歴史的轉換であり、たゞロシアのみでない急激な急變であつた。『世界的急變が行はれた、——とレーニンは書いた。——世界史の新しい頁が、プロレタリア獨裁の時代

が始まつた』と。『……十月革命は新時代を、帝國主義の國々におけるプロレタリア革命の時代を開いた\*』。それと共に十月革命は、ロシアにおいて半植地的および植地的民族の状態にあつた數十民族を解放して、民族革命に衝撃を與へた。『……これは、十月革命が新時代を、世界の被抑壓諸國において、プロレタリアートの指導の下に、プロレタリアートの同盟に導かれるところの植地革命の時代を開いたことを意味する\*\*』。

\* スターリン、論集『反對派について』、一三〇頁。

\*\* 同上、一三二頁。

一九一七年十月二十五日（十一月七日）以來二つの世界——二つの體制が存在する。資本主義體制は一般的危機と労働者および勤勞者大衆の革命的闘争の成長との打撃の下に破滅に向つて進んでゐる。社會主義體制は成長し、強化し、帝國主義によつて抑壓された大衆に對して革命的影響を示しつゝある。

十月革命の世界的意義は、同志スターリンの言葉によれば、『たゞそれが帝國主義體制の突破における一國の偉大なイニシアティブおよび帝國主義諸國の大洋における社會主義の最初の根據地たることのみにあるのではなくて、また世界革命の第一段階およびそのヨリ以上の展開の強力な



基礎を成してゐることに\*ある。コミンテルン綱領にはかう述べられてゐる、『……全世界資本主義の強力な震動、階級闘争の尖鋭化の基礎の上に、またプロレタリアートの十月革命の直接的影響の下にヨーロッパ大陸においても植民地および半植民地諸國においても、多くの革命および革命的進歩が行はれた。即ち一九一八年一月にはフィンランドにおける労働者革命、一九一八年八月には日本における謂ゆる「米騒動」、一九一八年十一月には、半封建的君主制の支配を顛覆したところのオーストリーおよびドイツにおける革命、一九一九年にはハンガリーにおけるプロレタリア革命と朝鮮における暴動、一九一九年四月にはバールツァリアにおけるソヴェト権力、一九二〇年一月にはトルコにおけるブルジョア民族革命、一九二〇年九月にはイタリアにおける労働者の工場占領、一九二一年三月にはドイツにおける先進的労働者の暴動、一九二三年九月にはブルガリアにおける暴動、一九二三年秋にはドイツにおける革命的危機、一九二四年十二月にはエストニアにおける暴動、一九二五年四月にはモロッコにおける暴動、八月にはシリアにおける暴動、一九二六年五月にはイギリスにおける総同盟罷業、一九二七年七月にはウィーンにおける労働者の暴動。すべてこれらの事實および最後に、インドネシアにおける暴動、インドにおける深刻な動搖、全アジア大陸を震動させた大支那革命の如き事件は、資本主義の極めて深い一般的危機の一部を

成す一つの國際革命的な鎖の諸々の環である\*\*』と。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、一〇一頁。

\*\* コミンテルン綱領、七四頁、第二章第一節。

十月革命は、この革命の先頭に立ち且つそれを組織した黨が唯一の正しいレーニンの理論によつて指導されたが故に勝利した。だから十月革命は、レーニン主義の勝利である。『……十月革命の偉大な意義は、就中、それが世界労働者運動における社會民主主義に對するレーニン主義の不可避的勝利を印づけることにある。

『労働者運動における第二インターナショナルと社會民主主義との支配の時代に終結した。レーニン主義と第三インターナショナルとの支配の時代が到來した\*』。

\* スターリン、『十月革命について』、一三六頁。

世界萬國において労働者および勤勞者が十月革命に關する報道を自己の革命の勝利として欣喜雀躍して迎へたことは、何等の不思議もない。さればこそ第二インターナショナルの指導者——カウツキー、オットー・バウアーその他はこの革命をブルジョア革命として評價して、ロシアのメンシエヴィキと共に、十月革命の社會主義的性質を否認したのである。



十月革命の極めて大なる経験は、それに續いた内亂の経験および社會主義社會の建設の経験と共に、巨大な國際的意義を持つてゐる。我黨は『これが如何になさるべきか』を示した。この経験はすべての共產黨の財産となつた。だからコミンテルン綱領は、ブルジョアジーの支配を顛覆して世界社會主義革命の端初を据ゑた革命として、十月革命を評價したのである。

### 農民層に對する黨のスローガン

レーニンはかう書いた、『……一九一七年十一月七日（十月二十五日）の革命はロシアにおいて、貧農層または半プロレタリアートに支持されたプロレタリアートの獨裁を實現した\*』と。

\*レーニン、第二十二卷、三六八頁。

十月の準備と十月革命の勝利とは、農民層に對するボルシェヴィキの第二の戰略的スローガン、即ち『貧農との同盟、クラークに對する鬭争と中農の中立化』の實現の下において可能であつた。

ツァールと地主とに對する鬭争において我黨は全農民層の支持を受けた。だから『全農民層と共に、ツァールおよび地主に反對、ブルジョア民主主義革命の勝利のためのブルジョアジーの中立

の下に』といふスローガンは、革命の第一段階における我黨の基本的スローガンであつた。革命のこの段階——ブルジョア民主主義革命——においては農民層は異種的であり、彼等の内部には階級鬭争が行はれ、そして貧農は往々農村の富農、クラーク農民、農村の『不正利得者』に對して進出したにも拘らず、このスローガンは全く正しかつた。この農村の不正利得者はそれでもた自己流に地主を憎惡して、彼等の權力を覆さうと準備してゐた。だからレーニンは、一度ならず次のことを力説した、即ちツァールと地主との權力の顛覆の仕事において『……農民層は全體に、おいて我々に味方した。社會主義的プロレタリアートに對する彼等の對立は一時には現はれえなかつた……農民層の内部における階級分裂はまだ成熟せず、まだ明かに分れてゐなかつた\*』と。

\*レーニン、第二十三卷、三九二頁。

二月革命とメンシェヴィキおよび社會革命黨と同盟したブルジョアジーの八ヶ月間の權力掌握とはブルジョア民主主義革命を最後まで導かず、地主の支配と農奴制の遺物とを殆ど手を觸れないで残したから、地主と彼等の支配とに對する鬭争の問題の解決において全農民層が十月革命においてプロレタリアートを支持した。十月に全農民層は、主要且つ基本的な社會主義革命が『通りすがら、序に』ブルジョア革命の課題を解決した限りにおいて、我々を支持した、とレーニンは



述べた。

これについてレーニンは一九一八年十二月十一日土地部、貧農委員會およびコミューン第一回全露大會における演説の中で述べた。彼はかういつた——

『……地主に對するこの闘争に人々は起ち上らざるをえなかつた、そして實際において全農民が起ち上つた。この闘争は他人の勞働の搾取によつて生活しない最も貧しい勤勞農民層を結合した。この闘争はまた貸銀勞働なくしてはやつて行けない最も富裕な且つ最も高貴でさへもある部分の農民層をも結合した\*』と。

\*レーニン、第二十三卷、四二〇頁。

これと同じ思想を同志スターリンは同志ヤン——スキーに對する自己の答『農民問題に關する黨の三つの基本的スローガンについて』の中で説明してゐる。

『十月革命がブルジョア革命を最後まで導くことを自己の主要任務の一つとしたこと、十月革命なくしてはそれが最後まで導かれえなかつたこと、それと同時にブルジョア革命を最後まで導くことなくしては十月革命自體が鞏固にされえず、そして十月革命がブルジョア革命を最後まで導いた限りにおいて、これが全農民の側から同情を受けなければならなかつたことは、何等争ふ餘

地がない\*』と。

\*スターリン、レーニン主義の諸問題、二四七頁。

しかしこのことは、一九一七年二月革命の後においてもまた、『全農民層と共に』といふ革命の第一段階のスローガンが依然として正しかつたことを決して意味しなかつた。ブルジョア政府の顛覆はすでにクラーク層の利益に觸れるものであつた。レーニンは四月テーゼの中に、『ロシアにおける現在の瞬間の特殊性は、プロレタリアートの不十分な意識と組織との故に權力をブルジョアジーに與へたところの革命の第一段階から、權力をプロレタリアートと最貧農層に與へなければならぬところの第二段階への移行にある』と書いた。従つてすでに一九一七年四月レーニンは、農民層に對する第二の戰略的スローガンのための闘争の任務を提起した、何故なら、クラーク層がプロレタリアートの權力のために、土地私有權の撤廢のために、帝國主義戦争の内亂への轉化のために闘争しえなかつたことは、全く明瞭だからである。

だから一九一七年二月と十月との中間期に、黨はすでに一九〇五年にレーニンによつて發言された次の思想によつて指導された、『プロレタリアートは社會主義革命を行ひ、半プロレタリア的人口要素の大衆を自己に結合し、以て力によつてブルジョアジーの抵抗を撃破し且つ農民層や小



ブルジョアジーの不安定を麻痺させなければならぬ\*』と。

\* レーニン、第八卷、九六頁。

かくてこの段階においてボルシェヴィキ黨はプロレタリアートの前に、貧農層と結合し、『革命が社會主義となる限りにおいて、農村の富者、クラーク、投機業者を含めて、資本主義に對して、全被搾取者と\*』結合する任務を提起した。

\* レーニン、第二十三卷、三九一頁。

黨のこのスローガンは中農の中立化を要求した。個々の地方において彼等の異つた動搖が存在する場合における中農のこの中立化は、一九一八年末—一九一九年初めまで繼續され、そしてその時第八回黨大會において、『クラークに對する闘争、貧農の支持の下における中農との鞏固な同盟』といふ農民層に對する第三の戰略的スローガンの問題がレーニンによつて提起され且つ解決された。

そして最後に、階級としてのクラーク層の清算を基礎とする全面的集團化の時期においては、農民層に對する第三のスローガンは異つた内容を帯びた。即ちコルホーズに参加した中農は貧農と共にソヴェト權力の支柱に轉化しつゝある、と。

これらの種々のスローガンの交替はソヴェト聯邦の構造における深刻な社會的變化を意味し、偉大な歴史的意義の社會的前進を意味し、新しい農民層の社會主義のための闘争への吸引、彼等の社會主義の側への移行を意味した。黨のこれらのスローガンの明瞭な理解は、ソヴェト聯邦における社會主義の成功が農民層に對するプロレタリアートの政策の正しさに著しく依存するだけに、一層必要だ。他の國々においてもまた革命の成功はこのことに著しく依存してゐる。

權力を握つたプロレタリアートの諸任務。ソヴェト

權力の最初の諸布告

今や權力奪取の後、レーニンは、ペトログラード・ソヴェト會議に進出して、かう聲明した、『……この労働者および農民革命は如何なる意義を有するか？ 何よりも先づこの革命の意義は、我々がソヴェト政府、ブルジョアジーが少しも参加しない我々自身の權力機關を有するであらうことにある。被抑壓大衆自身が權力を創造しつゝある。舊國家機構は根本的に破壊され、ソヴェト組織のうちに新機構が創造されるであらう\*』と。ソヴェトはプロレタリアートの國家權力の新形態である。



ソヴィエトはすべての民族の勤労者を結合するところのすべてを包括する、大衆的および國際的な組織である。ソヴィエトは勤労者大衆にプロレタリアートの側からの指導を確保する。ソヴィエトは資本主義に對して闘争を行ひうるどころの強力な組織である。『……ソヴィエトは大衆自身の直接的組織であり、それは最も民主主義的な組織、即ち新しい國家の組織およびその管理への参加を大衆に最大限に保證し、舊制度の破壊のための闘争および新しいプロレタリア的制度のための闘争における大衆の革命的エネルギー、イニシアティブ、創造能力を最大限に發揮させるどころの、大衆の最も權威ある組織である』\*。

\* スターリン、レーニン主義の諸問題、三四頁。

我黨の方は、我々が中途に止まらなかつたこと、我々がたゞプロレタリアート、半プロレタリアートおよび廣汎な勤労者大衆のためにプロレタリア國家の基礎の上にロシアの根本的改造を實現することを約束したのみならず、我々がこの約束を直ちに實現し始めたことにある。

一九一七年十月二十六日第二回ソヴィエト大會において採用された講和に關する最初の布告は、『すべての交戦諸國民と彼等の政府とに即時に公正な民主主義的講和について談判を開始するこ

と』を提議してゐる。ソヴィエト政府は、講和談判を行ふために、少くとも三ヶ月間の即時休戦を提議した。すべての交戦國の政府および國民に向ふと同時に、ロシアの勤労者農民政府は、『人類の三つの最も先進的な民族および今日の戦争に参加してゐる最大國家——イギリス、フランスおよびドイツの意識的勤労者に』向つた。それはこれらの勤労者に『講和の仕事およびそれと共にあらゆる奴隷制並びにあらゆる搾取からの勤労および被搾取大衆の解放の仕事を最後まで成功的に導くやうに』、『全面的な、決定的なそして献身的に精力的な活動によつて』我々を援助せよと呼びかけた。講和に關するこの布告は、それと共に、帝國主義戦争の内亂への浮彫的な轉化の指標として、巨大な國際的意義を持つてゐた。

同じ十月二十六日午前二時、『地主的土地所有は何等の賠償なしに即時に廢止される』といふ土地に關する布告が採用された。『地主の領地、並びにすべての土地——分割地、修道院所有地、教會所有地——はその家畜および農具と共に……憲法議會に至るまで郷土地委員會および農民代表郡ソヴィエトの處理に移る』。二百四十二の地方農民命令を基礎にして作成された農民命令が、最初の土地法として採用された。この命令によつて平和的土地利用を伴ふ謂ゆる土地の社會化が實行された。土地私有權は永久に廢止された。『土地は賣買することができず、賃貸することが



できず、他の如何なる方法でも譲渡することができない。すべての土地は無賠償で全國民の財産に轉化され、全勤勞者の利用に移る。』社會化の基礎——平等性——は命令の第七條によつて定式化され、その中にはかう述べられた、『土地の利用は平等的でなければならぬ、即ち土地は、地方的諸條件、勤勞的または消費的規準を考慮して、勤勞者の間に分配される。』この場合『平農民と平カザックとの土地は沒收されない』ことが特記された。しかし正に土地の社會化はボルシェヴィキの綱領ではなかつた。何故我々は土地の社會化に同意したか？ 一九一七年十一月十八日レーニンが論文『勤勞者と勤勞および被搾取農民との同盟』の中で、何故我々がこれに同意しなければならぬかを説明してゐる。

農民層のかなりの部分は當時左翼社會革命黨員に賛成してゐた。農民層は自己の土地綱領を土地の社會化の要求の形態で表現した。勤勞者階級と農民大衆との同盟の設立、農民層による十月革命の支持の問題は、社會主義の事業を害さないで、社會主義への過渡的方策であるやうな、勤勞および被搾取農民によつて提議される過渡的方策に同意することにあつた。

その後レーニンは、自己の著書『共產主義における「左翼主義」の小兒病』の中でこの問題に觸れて、この協定を正に政治的ブロックとして説明した。『……十月革命のその瞬間に我々は小

ブルジョアの農民層との形式的ではなくて、非常に重要な（そして非常に成功的な）政治的ブロックを結び、社會革命黨の農業綱領をそつくり、何等の變化をも加へずに採用した、即ち我々は彼等の長子相續化（ソヴエト大會における投票數の壓迫——ヤロスラフスキー）を欲しないで、彼等との協定を欲することを農民に證明するために、疑ひもなき妥協を結んだのである\*』と。

\* レーニン、第二十五卷、二二三頁。

我々が見たやうに、我々の民族政策は、特に大なる意義を持つてゐた。十月革命はすべての民族的抑壓を終結させ、ツァーリズムとケレンスキー政府によつて抑壓されてゐた勤勞者を自己の周圍に結成した。

今や十月革命の後レーニンおよびスターリンの署名の上で『ロシア人民の權利宣言』が發表されたが、それはたゞ宣言たるのみではなかつた。何故ならその後にはフィンランドとウクライナとの獨立の承認が続いたからである。人民委員會議は同志スターリンによつて起草された『ロシアおよび東洋の全勤勞回教徒に與ふ』るソヴエト權力のメッセージを採用した。このメッセージの中には、ソヴエト權力がツァーリズムおよび臨時政府の民族政策から決定的に決裂すること、プロレタリア獨裁は帝國主義者の抑壓政策に根本的に敵對的な新民族政策の模範であることを實際に



ベルシヤやトルコの國民およびその他の國家に示してゐることが述べられた。その後の數年間に於ける黨のすべての活動は大國的排外主義並びに地方的民族主義の殘存物に對する鬭争に向けられ、往々無法な民族的邊疆の政治的、經濟的および文化的成長や、民族的反目の根絶や、以前のロシア——『諸民族の監獄』と相違する強力なソヴェト社會主義共和國聯邦の設立やに導くところのプロレタリア的政策の實現であつた。この正しい政策はソヴェト權力に内亂における勝利を確保し、東洋における民族解放運動の發展をも、これらの運動とプロレタリア革命との間の連絡の強化をも助長した。

ソヴェト權力の最初の數日間の布告は、社會主義的方策と並んで、また『封建制度、農奴制、身分制の遺物』の完全な根絶に向けられた。土地布告、『人民の權利宣言』、教會と國家および學校と教會との分離に關する法律、裁判所や、學校や、身分と民族のおよび信教的組織の廢止に關する法律等々——すべてこれらの布告は、『……一九一七年十月二十五日から憲法議會の解散（一九一八年一月五日）に至る約十週間に、我々がこの領域においてブルジョア民主主義者と自由主義者（カデット）および小ブルジョア民主主義者（メシエヴィキと社會革命黨員が）が自己の權力の八ヶ月間に、なしたよりも千倍も多くのことをなした\*』といふ結果に導いた。

\* レーニン、第二十七卷、二五頁。

『……我々はソヴェト共和國を、ブルジョア議會共和國の最良のものよりも測り難く高度であり且つ民主主義的な國家の新しい型を移入し且つ鞏固にした。我々は貧農層によつて支持されたプロレタリアートの獨裁を樹立し、そして廣く考慮された社會主義的改造の體制を開始した。我々は萬國の數億の労働者の中に自己の力の確信を目覺まし且つ熱狂の火を點じた。我々は到るところにおいて國際労働者革命の叫びをあげた。我々は萬國の帝國主義的掠奪者に挑戦した\*』。

\* レーニン、第二十二卷、三七五—三七六頁。

ソヴェト權力の社會主義的方策は勝利した十月革命を固める仕事において最も重要な意義を持つてゐた。一九一七年十一月十四（一）日の布告によつて、労働者管理が實施された。資本家の經營に一定の限界を劃することが労働者管理の任務の一つであつた。労働者の許可なくしてはたゞ一人の資本家も企業を休止する權利を有せず、すべての商業的活動は労働者代表の管理に從屬せしめられた。企業を指導することを資本家から學ぶこともまた労働者管理の任務の一つであつた。これはまだ産業の國有化ではなかつたが、それは労働者管理を通じて準備された。

一九一七年十二月五日最高國民經濟會議——國の經濟生活の指導におけるプロレタリア獨裁の



機關——の設立に關する布告が發表された。銀行の國有化は大なる社會主義的方策であつたが、最初は大々國立銀行だけが國有化され、爾餘の銀行はソヴェト權力の管理に従屬せしめられた。反革命に同じ物質的援助を與へたブルジョアジーのサボタージュは、すべての銀行および信用機關の國有化とその指導者の逮捕との必要を喚び起した。一九一七年十二月レーニンは最高國民經濟會議幹部會へ『國民經濟の社會化に關する布告草案』を提出した。この『布告草案』の中には、すべての株式企業が國家の所有たることが宣言され、内外の國債が破棄され、十六歳乃至五十五歳の市民に對する一般的勞働義務が實施されることが述べられてゐる。プロレタリア獨裁の次の方策は、鐵道、外國貿易、商船隊の國有化であつた。プロレタリア獨裁の初期——レーニンの謂ゆる『資本に對する赤衛軍的攻撃』の時期のすべてのこれらの方策は、ロシアのブルジョアジーの勢力を根こそぎにし、またその資本がロシアの工業および銀行企業に投せられてゐた國際ブルジョアジーに打撃を與へた。『……資本に對する「赤衛軍的」攻撃は——とレーニンは書いた、——成功し、勝利した、何故なら我々は資本の軍事的抵抗にも資本のサボタージュ的抵抗にも打ち勝つたからである\*』と。ソヴェト權力のすべてのこれらの初期の布告、社會主義的方策は、たゞ我國のみならず、大衆がソヴェト權力のこれらの最初の行動について知つた萬國の勤勞者大衆

によつて歡喜を以て迎へられた。

\*レーニン、第二十二卷、四四五—四四六頁。

### ソヴェト政府の設立。反革命に對する鬭争

第二回全露ソヴェト大會においてソヴェト政府が組織された。最初の人民委員會議は全くボルシェヴィキによつて構成された。グニート・レーニンが人民委員會議長に選舉された。

しかしこれは、我々が最初から他の黨の政府への參加を許すことを拒絶したことを決して意味しなかつた。我黨は左翼社會革命黨員との『名譽の聯立』の可能性に對するレーニンの見解を支持した。この同盟(即ちボルシェヴィキと左翼社會革命黨員との同盟)は、左翼社會革命黨員がこの時期に農民層のかなり多數の利益を表現した限りにおいて、『名譽の聯立』たりうる、何故なら賃銀勤勞者の利益と勤勞および被搾取農民の利益との根本的な不一致はないから、とレーニンは主張した。社會主義は兩者の利益を完全に満足させることができる。こゝからプロレタリアートと勤勞および被搾取農民との間の『名譽の聯立』の可能性と必然性とが生ずる。これに反して、一方、勤勞および被搾取階級と、他方ブルジョアジーとの『聯立』は、これらの階級の利益の根



本的不一致の結果、『名譽の聯立』たりえない。そして我々は、左翼社會革命黨員が當時ソヴィエト權力の立場に立つてゐた限りにおいて、かゝる聯立を彼等に最初から提議したのである。けれども左翼社會革命黨員は動搖し、右翼社會革命黨員その他の小ブルジョア黨と決定的に決裂しようとする決心しなかつた。だが權力の形成の問題は遷延を許さなかつたから、最初の臨時勞働者農民政府——人民委員會議は全くボルシエヴィキ的であつた。勿論これはすべての他の黨の側からの狂暴な攻撃を喚び起し、それらはソヴィエト權力の破滅を豫言した。

小ブルジョア黨がまだ支柱を持つてゐた場所では、——都市デューマその他のまだ無難であつた小ブルジョアの組織においては、日刊新聞においては（大多數の新聞はブルジョア新聞であつて、それらは最初は閉鎖されなかつた）、ボルシエヴィキが叩かれ、近日または近週中における彼等の破滅が豫言された。

鐵道組織『ヴィクゼリ』（鐵道従業員組合全露執行委員會）は、メンシエヴィキに指導されて、メンシエヴィキや右翼社會革命黨員の小ブルジョア黨と權力を分配すべきことをボルシエヴィキに要求し、鐵道の運轉中止を以て脅かした。權力は他の諸都市においては一度にソヴィエトの手に移らなかつた。ペトログラードにおいては人民委員會議が活動したが、一方モスクワではまだ數日間

街上で鬭争が行はれた。ペトログラード自體においてもまた權力を顛覆しようとする反革命家の試みがなされ、十月二十七—二十八日にはボルシエヴィキに對して街上の煽動がなされ、あちこちでエンケルは、ボルシエヴィキに對して敵對的氣分を有するブルジョアの群衆の援助の下に、赤衛軍や水兵を武装解除し、殺害さへし、電話局、郵便局および電信局を占領しようとした。『祖國および革命救済委員會』——主としてペトログラードおよびモスクワのデューマ、メンシエヴィキおよび社會革命黨員によつて設立された反革命組織——は、士官學校生徒、反革命的士官層および反革命的學生層を組織した。だから一九一七年十月二十九日には士官學校の生徒および士官學校の武装解除が企てられた。けれどもこれはまだ我々がペトログラード自體において反革命を武装解除したことを意味しなかつた。冬宮から脱走したケレンスキーはカザック將軍クラスノフに、ソヴィエト權力の顛覆のためにペトログラードへ進軍すべきことを説得した。當時鐵道電信はまだ『ヴィクゼリ』の掌中であり、無線電信もまたまた我々の掌中になく、従つて電信はブルジョア新聞を通じて、ボルシエヴィキの權力奪取に激昂した巨大な兵力がペトログラードへ進撃しつつある、といふ極めて挑發的な無稽な噂を傳へた。すでにペトログラード自體にケレンスキーとクラスノフ將軍とによつて署名された檄文が擴がり始めた。クラスノフはカザックと共にガッチナを



占領した。ペトログラード守備隊は、最初の瞬間には、クラスノフ將軍の指導の下に戦線から進軍した部隊を迎へることに全く準備されてゐなかつた。それは組織された砲兵を持たず、まだ十分眞面目な軍事組織を持たず、司令部を持たなかつた。権力が僅か三日前に殆んど血を見ずしてソヴィエトの掌中に移つたのを見た兵士大衆は、カザックは武器を執つて進出しないだらう、と考へた。けれども情勢は脅威的になつた。ブルジョアジーは頭を擡げ、彼等の新聞と檄文とは益々確信的になり且つ無禮になり、ボルシエヴィキ権力の終結について益々大膽に語つた。電報はボルシエヴィキの不可避的破滅について全世界に報道を送つた。我黨の軍事革命委員會は労働者階級に訴へた。我々はペトログラードの労働者に、かくも高價に購はれた十月の征服が如何なる危険に曝されてゐるかを指示した。數千人の労働者が武器を執つて起ち、強力な武装組織を作り出し、砲兵およびすべての必要な部隊を組織し、そしてケレンスキーに向つて進軍した。カザックの砲火に遭遇した赤衛軍とカザックとの最初の重大な衝突は、カザックをして退却することを餘儀なくさせた。我々はツールスコエロの無線電信局を占領して、全世界にケレンスキーに對する勝利について報道した。だがそれまでこの無線電信局は、全世界にたゞ我々の敵に必要なことのみを傳へてゐたのである。この後には闘争を中止することをカザックと協議することは我にもはや

容易であつた。カザックはたゞ彼等をドン地方または戦線に送ることを要求した。クラスノフ將軍は逮捕され、そしてソヴィエト権力に對する闘争を中止すると約束した。この約束によつてクラスノフ將軍は釋放されたが、間もなく彼は他の反革命家達と共にソヴィエト権力に對する進出を組織した。プロレタリア革命の敵に對するソヴィエト権力の闘争はこれで終らなかつた。メンシエヴィキおよび社會革命黨の指導者は戦争に赴き、ツールの將軍やまだ改選されなかつた聯隊委員會とボルシエヴィキに對する闘争について協議した。個々の部隊はペトログラードへ向つて進軍しさへした。しかしメンシエヴィキと社會革命黨がソヴィエト権力について擴めた情報の虚偽を確信してゐたこれらの部隊の中の最も意識的なものは、ボルシエヴィキに結合した。

一九一七年十月から一九一八年一月にかけて、プロレタリア革命は『凱旋行列をなして』全國において進行した。ソヴィエト権力はウクライナに樹立された。ドン地方においては四十六カザック聯隊が暴動を起し、そしてカメンスカヤ村において、ドン地方の反革命に對する——カレディン將軍に對する闘争のために、軍事革命委員會を組織した。この頃オレンブルグが奪取され、ドットフ將軍の部隊が撃破された。ソヴィエト権力はウラルに、シベリアに樹立された。プロレタリア獨裁はフィンランドとラトヴィアにおいて勝利した。ソヴィエト権力は擴大して、舊ロシア



の領土のかなりの部分を包括した。

### 党内における意見の相違

我々はすでに暴動の前夜における若干の中央委員会委員の動搖を知つてゐる（ジノヴィエフ、カメネフその他）。

けれどもこの動搖はソヴィエトの掌中への権力の移行と共に終らなかつた。我黨がその責任を悉皆引き受けたソヴィエトの掌中への権力のこの移行こそ正に、我黨と労働者階級とを一部の同志を狼狽させたやうな困難に當面させた。その背後で反革命機關——『祖國および革命救済委員會』——が活動した『ヴィクゼリ』の如き、都市デューマの如き組織と小ブルジョア黨との重壓の下に、中央委員会および人民委員會議の成員の前記の部分は、國の今後の運命に對する責任を悉皆引き受けることは共産黨にとつて全く不可能であると考へた。

メンシエヴィキ防衛的主戰論者は第二回ソヴィエト大會から脱退して（この大會の壓倒的多数の喝采と嘲笑との下に）、かう聲明した——

『……この情勢からの唯一の可能な平和的な出口は、全民主主義層に立脚する権力の形成について臨時政府と協議することである』と。

右翼社會革命黨もまた大會を見棄てた。その宣言の中において我々はボルシエヴィキに對する闘争の同じ呼びかけを讀むのである。

社會革命黨員およびメンシエヴィキの仕事に着手したブンド派は、哀れに且つ不名譽に大會から脱退した。メンシエヴィキ國際主義者の名においてマルトフは『全民主主義政府の形成』を要求した。

一九一七年十一月一日中央委員會は小ブルジョア黨との協調を拒絶する決議を採用した。十一月四日中央委員會委員カメネフ、ジノヴィエフ、ルィコフ、ミリューチン、ノギンは、他の社會主義諸黨（即ち社會革命黨とメンシエヴィキ）との即時の協調を必要と認めたが故に、中央委員會の中から脱退することを聲明した。これらの中央委員會委員は、『かゝる聯立政府の設立はヨリ以上の流血、切迫しつゝある飢餓、カレデン派による革命の破碎の豫防のため、豫定期日における憲法議會の召集および平和綱領の眞實の實行の確保のために必要だ』と考へた。彼等は『中央委員會の破滅的政策』に對して責任を負ふことを願はないで、その中から脱退することを決意し、以て『自己の意見を労働者および兵士大衆に公然と述べ且つ彼等を我々の叫び「ソヴィエト諸黨よ



り成る政府萬歳！ かゝる條件に基く即時の協調！」を支持するやうに召集し」ようとした。

そして一九一七年十一月五日にはノギンが自己およびソヴィエトに参加した人民委員同志ルィコフ、ヴェ・ミリューチン、イー・テオドロヴィチ、アー・シュリャブニコフ、デー・リャザノフ、デルグィシエフ、アルブゾフ、ユレネフ、フエドロフおよびユー・ラーリンの名において、彼等もまた『すべてのソヴィエト諸黨より成る社會主義政府の形成の必要の見地に』立つことを聲明した。この道の外には彼等はただ一事を——『政治的テロルによる純ボルシェヴィキ政府の維持』を見た。『この道に、——と彼等は書いた、——我々は進みえないしまた進むことを欲しない』と。これらの日和見主義者の一部は人民委員の肩書を自己から取除き、一部はただこの瞬間の政治的評價のみ加はつた。勿論かゝる行動は、一方では我々の敵の最大の歡喜を喚び起さざるをえなかつたし（何故なら彼等はこの中に黨の弱點の現はれを見たから）、また他方では、この行動は黨全體の反撃を喚び起した。中央委員會の檄『全黨員に、ロシアの全勤勞者階級に與ふ』の中にレーニンはかう書いた——

『……我黨の如き大なる黨においては、我々の政策のプロレタリア革命的な進路にも拘らず、人民の敵に對する鬭争の仕事において十分堅忍不拔ならざる個々の同志が現はれざるをえなかつた。今日我黨の當面してゐる任務は眞に測るべからざるものであり、困難は巨大である、——として以前責任ある地位を占めてゐた若干の我黨員は、ブルジョアジーの攻撃のために混亂に陥つて我々の中から走り去つた。全ブルジョアジーとすべての彼等の補助者とはこれに關聯して狂喜し、他人の災厄を見て喜び、崩壞について叫び、ボルシェヴィキ政府の破滅を豫言してゐる。』

『同志諸君！ この虚言を信する勿れ。逃げた同志は脱走者として行動したものである……我我はこの脱走を決定的に審判しよう……しかし我々は聲明する、我黨の上層部からの數人の脱走的行動は、我黨のために活動する大衆の統一を一瞬間もまた毛ほども動搖せしめず、従つて我黨を動搖せしめないであらうといふことを\*』

\*レーニン、第二十二卷、五九頁。

左翼社會革命黨についていへば、この黨は大動搖を以て右翼社會革命黨と分界され、一時自己の行動をボルシェヴィキの行動と結合した。十一月に成立した農民ソヴィエト大會はその壓倒的多數において左翼社會革命黨的であつた。若干の社會革命黨員は人民委員會議員となつた（コレガエフ、ペー・プロシヤンおよびシュテインベルグ）。この聯立はブレスト講和の署名まで、貧農委員會の成立まで續いたが、その時農民層においては一層深刻な分層が行はれ、その時左翼社會革命



黨は益々クラーク層の利益を反映しつつ、ボルシエヴィキに對して暴動を起した。

### 憲法議會の解散

ソヴェト權力の完全な勝利の下において、プロレタリア獨裁の組織の存在の下において、憲法議會の選舉を行ひ且つそれを召集することが必要であらうか、といふ疑問が自然と發生する。特記しなければならぬことには、ボルシエヴィキの中には、左翼社會革命黨の中におけると同様に、憲法議會は解散する必要がない、それがソヴェト權力によつて採用された法律を認可し、多くのブルジョア革命においてなされるやうに、十月の征服を『合法的に』鞏固にすることが、憲法議會によつて達成されるのだ、と考へたところの、個々の憲法議會議員（カメネフ、ノギン、リュコフその他）があつた。

憲法議會のフラクシヨンの中には『右翼的氣分と中央委員會の意見とのその不一致が存在した』（中央委員會議事録より）ことに鑑みて、特別の中央委員會議さへ召集されなければならなかつた（一九一七年十二月十一〔二十四〕日）。

大衆が經驗に基いて、また一部の農民層、都市の小市民および小ブルジョア・インテリゲンチヤ

が持つてゐた憲法議會の萬能の信仰を無くすることを助けるために、大衆が我々のスローガンを我がものにするのを助けるために、黨は憲法議會の選舉に進むことを必要と認めた。『……大衆自身が自己の經驗に基いてこれらのスローガンの正しさを納得しなければならぬ。たゞその時においてのみ黨のスローガンが大衆自身のスローガンとなるであらう。たゞその時においてのみ革命が眞に人民革命となるであらう\*』。

\* スターリン、十月革命とロシア共產主義者の戰術、『レーニン主義の諸問題』、九五頁。

憲法議會の選舉は九月に行はれた。それは投票の約二五%をボルシエヴィキに與へたが、ペトログラードにおいてはボルシエヴィキは四五%を、モスクワにおいては五〇%を取得した。我々は兩首都において投票の約半數を取得した——プロレタリアートの大多數は我々に賛成であつた。軍隊は半數ボルシエヴィキに味方したが、我々は兩首都と兩首都に近い部分の戰線において（西部戰線、クロンシュタットおよびバルト艦隊において）優勢であつた。それにも拘らず社會革命黨員はメンシエヴィキと共に投票の約六二%を取得した。これは、選舉名簿がまだ社會革命黨員が大なる影響を持つてゐた時、彼等の中から左翼社會革命黨員がまだ分離しなかつた時に（名簿は共通であつた）發表されたことによつて説明される。選舉は國內における勢力關係の眞實の反映を與



へなかつた。

またその召集前にレーニンは『憲法議會に關するテーゼ』を發表し、その中で、かゝる條件の下においては『憲法議會の代議士の構成と人民の眞實の意思との間における不一致』が不可避であることを指示した。レーニンは、憲法議會の問題を形式的に、勢力關係を根本的に變化させた『階級闘争と内亂を考慮せずして』取扱ふことができないことを警告した。レーニンは、十月暴動とプロレタリアートの獨裁の任務とを評價しえなかつたボルシエヴィズムの上層部の若干の人が陥つてゐるところの誤謬についてのすべての人に警告し、形式的見地に立つものは、プロレタリアートの事業を裏切り、『ブルジョアジーの見地に移行する』と述べた。

憲法議會は、それが反革命にとつての掩蔽であることが全く明かになつた、召集の初日に、全露中央執行委員會の決定によつて解散された。憲法議會の議員——ボルシエヴィキと左翼社會革命黨員とは、レーニンによつて作成された宣言の公示の後、憲法議會の會議を見棄て、全露中央執行委員會の構成に包含せしめられた。これに關聯して公然の進出を組織しようとした右翼社會革命黨員とカデットとの哀れな試みは、不面目な崩壊に終つた、即ち大衆はこの進出を支持しなかつたのである。

### プレス ト講和。「左翼共產主義者」およびトロツキー派に對する闘争

すでに講和に關する布告——十月革命後の最初の布告——の中に、『戦争の繼續は人類に對する最大の犯罪である』と述べられてゐる。ソヴェト政府は『すべての交戦國民と彼等の政府とに公正な民主主義的講和について即時談判を開始する』ことを提議した。けれども『同盟者達』は、主要事を達成せず、——ドイツ帝國主義に對する勝利を達成せずしては、談判を開始しようとはしなかつた。他の諸國家が談判に同意するのを待たないで、ソヴェト政府はたゞドイツおよびオーストリーとの談判に着手した。

十二月五日ソヴェト代表はプレス トリフトフスクにおいて戰鬪行爲の停止に關する協定に署名した。一九一七年十二月末談判が開始された——帝國主義戦争による人民大衆の恐るべき疲勞の情勢の下に、大衆的な逃走、戦線からの部隊の撤退、全線の崩壊の情勢の下に。談判中に、ドイツ帝國主義が併合と賠償とを拒否する意向は全くないこと、それは講和條約の署名に對して高利貸的利子を取らうと欲してゐることが明かになつた。やつと權力を奪取したばかりの勞働者階



級の前には異常に重大な課題が発生した——一時的息継ぎの名にもせよ、ドイツおよびオーストリーの資本主義の前に退却すること、これである。

正にこの問題について——ブレスト講和の署名問題について——我党内には重大な討論が発生した。勿論講和問題はたゞ十月革命後にのみ我々の前に存在したのではない、それはすでに、我々の最初の仕事は講和の締結であらう、と我々が聲明した十月革命前に、我々の前に存在した。我々が十月以後持ったやうな勢力関係の下においては、息継ぎを得るといふ條件で、我々はレーニンの謂ゆるこの『破廉恥な』講和に對してでも同意しなければならない、とレーニンは考へた。一九一八年一月七(二十)日に書かれた『講和に關するテーゼ』の中で、レーニンは、ロシアにおける社會主義革命が殆どすべての労働者および壓倒的多数の農民の支持によつて確保されてゐること、『あらゆる戦争と結びついた激烈な崩壊と混乱との若干の期間が不可避免的である』にも拘らずソヴェト権力には内亂における勝利が確保されてゐることを指示した。我々はブルジョアジーの武装的抵抗のみならず、サボタージ、ブルジョアジーの手先の買収等々に耐へなければならぬことを、レーニンは豫見した。我々が『社會主義的改造』の道に入つたことは、彼にとつて何等の疑ひもなかつた。すべての問題は、我々が『社會主義的改造の組織的任務』を遂行しうる時

期に歸着する。講和のため、息継ぎのための闘争において、レーニンは、世界社會主義革命の展開のための據點としてのロシアにおけるソヴェト権力を固めなければならぬ、といふ基本的命題から出發した。『ロシアにおいて社會主義革命を有する事情が我々のソヴェト権力の國際的任務のすべての規定の基礎に置かれなければならぬ』(レーニン)。即ち國際プロレタリア革命の利益から出發することによつて、ソヴェト・ロシアは講和を締結しなければならぬ。

國內情勢の正しい評價は講和の即時の締結を要求した。舊軍隊が崩壊した、それを速かに復員しなければならぬ、といふことを考慮しなければならなかつた。兵士達を農村に行かせて、ソヴェト権力が地主や資本家の抑壓を終結させたといふことを經驗によつて納得せしめよ、その時彼等は自己の土地、自己のソヴェト権力の擁護のために赤軍に流れ込むであらう。我々には、たゞ中央においてのみならず、地方においてもまたソヴェト権力を鞏固にするために、赤軍を設立し且つ訓練するために、息継ぎが必要だ。

ドイツとの講和の即時締結を主張するレーニンの方針との闘争のために、他の問題におけると同様に、党内には『左翼共產主義者』の反對派が形成された\*。

\* 『左翼共產主義者』分派には、エヌ・ア・ハリソン、ゲー・ホキ、アー・ア・アノフ、エム・プロンスキー、グエ・ドレツキ



1、アー・コロシタイ、エス・コシホル、ヴェ・グイアイシエフ、クリツマン、ヴェ・マクシモフスキー、アントノフ・ルイーキ  
ン、ヴェ・オシンスキー、エム・ボクロフスキー、イェ・ブレオアラツェンスキー、ゲー・ビヤタコフ、カー・ラデック、エム・  
サグエリエフ、サプロノフ、ゲー・サファロフ、ヴェ・スミルノフ、ヴェ・ソリン、イー・ストウコフ、エム・ウリツキー、ゲー・  
ウンシュリフト、ヴェ・ヤコブレフ、エメリヤン・ヤロスラフスキーその他が参加した。

『左翼共産主義者』は當時、かゝる講和の署名は社會主義の裏切であらうと述べた。『左翼共産主義者』は、人民大衆が戦争を繼續することを好まないことや、これ以上戦争を行ふことが不可能なことを考慮しないで、革命戦争の即時宣言を主張した。一九一八年一月十日大多数が『左翼共産主義者』より成るモスクワ地方局の總會は、ドイツの帝國主義者との講和談判の中止を宣言し、また萬國のすべての信任状を有する掠奪者との外交關係の決裂を宣言した。革命戦争に呼びかけながら、『左翼共産主義者』は、農民大衆の疲勞を何よりも先づ過小評價することによつて、最大の誤謬を犯した。

トロツキー派は、『左翼共産主義者』の見地に近い見地を擁護した、即ち『戦争をするな、講和に署名するな』と。こゝに『左翼共産主義』プラス拱手傍觀による最悪のものがあるのを見ることは困難でない\*。一九一八年一月二十一日ペテログラードにおいて、約六十五人の最も有名な黨活動家が集まつた集會で、模範的な投票が行はれた。トロツキー派は十六票を取得し、レーニンは

漸く四分の一——十五票を取得した。

\* 『左翼共産主義』はトロツキー主義の獨特のふり返しのために苦んだと、いふ方が一層正しいであらう。

一月二十二日中央委員會議においては、同じ三つの見地に關する討論の後、トロツキー派の中間的見地が優勢を占め、かくて中央委員會は一月九(二十二)日『戦争をせず、ドイツとの談判を延期せよ』と決議した。しかし中央委員會は黨の今後の戦術のために正確な指令を與へなかつた。レーニンと彼を支持した同志スターリンとは中央委員會議において少数派であつた。當時すでに人民委員會議には左翼社會革命黨員が参加してゐたので、一月二十五日我黨の中央委員會議と左翼社會革命黨中央委員會は再びこの問題を審議し、この會議においてもまたトロツキー派の方針が通過した。しかしこの多数派は、ドイツ人は革命的人民に對する攻撃に移ることを敢てせず、移ることができないだらう、だかもし移るならば、これは萬國において非常に強力な革命的昂揚を喚び起すであらう、といふ考察から出發した。ペテログラード委員會は、モスクワ地方委員會議と同様に、『左翼共産主義者』に味方して、レーニンの方針に反對した。全く同様にウラルとウクライナもまた『左翼共産主義者』の見地を支持した。トロツキー派はこの鬭争において、トロツキー主義が常に取つた役割——意見の相違の隙間に這ひこむこと——を演じた。トロツキー派の



見地——『戦争にも非ず、講和にも非ず』——は或る程度まで第三回ソヴェト大會においても優勢を占めた。けれどもこの大會においては、それによつて人民委員會議が講和の締結の問題について十分廣汎な全權を與へられた決議を行つた。

かゝる諸條件の下に『左翼共產主義者』は特別會議の召集を固執したが、會議の決議は中央委員會にとつて拘束的なものでないから、中央委員會はこれを却下した。

レーニンが、これと反對の場合には我々が更に悪い講和條件を承諾しなければならないことを豫見して、講和の署名を固執したにも拘らず、二月十日ブレスト・リトフスクにおいて、ソヴェト代表トロツキーは、ドイツ代表ホフマン將軍が提議した條件でソヴェト共和國が講和に署名することを拒否する旨を聲明したが、それと同時に彼は、ソヴェト共和國が戦争を行はないで軍隊の復員を繼續すべきことを聲明した。やがてドイツ人は攻撃に移ることに決定した。中央委員會においては依然として動搖が繼續した。『左翼共產主義者』とトロツキー派より成る多數派は、依然としてブレスト講和の署名の反對者の側にあつた。二月十八日ドイツ人は攻撃を開始した。

講和のための闘争において、レーニンは、我々が戦争の中止によつて受ける『息継ぎ』の巨大な

意義を認めることを拒否した『左翼共產主義者』とトロツキー派の執拗な抵抗を克服した。國內における打ちのめされないで頭を擡げたブルジョアジーのプロレタリア的懲罰のため、破壊された經濟の復興のため、國の社會主義的再建のため、力の蓄積のため、戰鬥能力を有する赤軍の設立のために手を自由にするには、是が非でもこの息継ぎを得ることが必要であつた。

『左翼共產主義者』とトロツキー派に對する闘争において黨はレーニンの周圍に結成した。『左翼共產主義』は、まだ少し前に彼等を支持した諸組織において自己の影響を忽ち喪失した。

一九一八年二月十九日、即時講和を締結することが提議された電報を送るレーニンの提議が採用された。一層有利な講和條件を確保するために、ドイツ人は攻撃を繼續し、そして漸く二月二十二日にドイツ政府は、以前よりも遙かに苛重な條件で講和を結ぶことに同意を表明した。レーニンは二月二十三日最も鋭い形態で問題を提起しなければならなかつた。革命的文句の政策は終つた。もしこの政策が繼續されるならば、彼は政府および中央委員會から脱退するであらう。革命戦争のためには軍隊が必要である。それはない、——即ち條件を承諾しなければならぬ。今や談判の最初の段階におけるよりも、一層苛重な條件が宣言されたにも拘らず、中央委員會はドイツの司令部の條件を承諾して講和條約に署名することを決議した。



この決議は鬭争を非常に尖鋭化し、『左翼共産主義者』の一部は公然の反黨的、分裂的行動を——中央委員會の決議への不服従を準備してゐた。

問題の最終的解決のため、今後の政策の樹立のために、第七回黨大會が召集され、そして中央委員會は黨にかう報告した、『講和條件の署名の問題について中央委員會には一致が存在しなかつたが、一度採用された決議は黨全體によつて支持されなければならぬ……全黨員は黨の義務の名において、我々自身の隊伍における統一の維持の名において自己の中央指導機關——黨中央委員會の決議を實施する』と。モスクワ地方局はそれにも拘らず中央委員會の不信任の決議を採用し、そしてそれは『近い將來における黨の分裂を殆ど避け難いもの』と認める、と聲明した。

彼等の見解の反ボルシヴィキ的性質を理解するためには、一九一八年二月二十四日のモスクワ地方局のこの決議の中から極めて短い抜萃を引用すれば十分だ。『國際革命の利益のために我々は今や純粹に形式的なものとなつたソヴェト權力の喪失の可能性に向つて進むことを合目的である」と認める。レーニンはこの會議を『奇妙且つ驚くべきもの』と稱した。レーニンはかう書いた、『……最も深刻な、絶望的な悲觀論の氣分、最も完全な絶望の感情——これがソヴェト權力の謂ゆる形式的意義と、ソヴェト權力の喪失の可能性に向つて進む戰術の許容性とに關する「理論」

の内容だ。いづれにもせよ、救済策はない、ソヴェト權力をさへも破壊せしめよ、——これが驚くべき決議を口授したところの感情だ』と。ブレスト條約に署名すべき中央委員會の決議にも拘らず、モスクワ委員會は『中央委員會の決議は絶對的に認容されえないもの』と聲明した。さうするうちに平黨員大衆、大多數の黨組織および廣汎な労働者大衆は愈々益々レーニンの方針の正しさを把握し、『左翼共産主義者』が多くの點において小ブルジョア革命家の議論を反覆してゐることを見た。すでに三月四日のモスクワ會議においては、レーニンの決議に六十五人が賛成投票し、『左翼共産主義者』の決議に賛成したものは僅かに五人であつた。『左翼共産主義者』の一部を自己の側へ引きつけようとしたトロツキー派は、四十六票を集めた。第七回黨大會（一九一八年三月六—八日）においては、二十八票對九票および留保一票を以てブレスト講和問題に關するレーニンの決議が採用された。

\* レーニン、第二十二卷、三〇一頁。

レーニンは他日論文『不幸な講和』の中にかう書いた——

『講和の條件は耐へ難く重い。だがそれにも拘らず歴史は自己の進路を進むであらう……組織、組織、そして組織の活動に向つて。未來は——如何なる試練にも拘らず——我々のものである』



『コムニスト\*』——『左翼共産主義者』の機關紙(十一號發行された)——はそれによつて結合されたモスクワ地方組織における中央委員會に對する反對派を支持した。ウラルにおいてもまた中央委員會の方針に對する闘争が精力的に行はれた\*\*。しかしこれは黨中央委員會に對する『左翼共産主義者』の反黨的攻撃の最後の閃光であつた。

\* 『コムニスト』は本來黨のペトログラード委員會およびペトログラード地方委員會の機關紙であつた。

\*\* プレオブラジエンスキーミサファロフがこの方針を特に精力的に取り、彼等は『ウラルスキー・ラボーチー』紙上で黨中央委員會を違法呼ばはりした。

勿論共産黨の敵はこの意見の相違を利用しようとした。特に左翼社會革命黨がこの意見の相違を利用しようとする努力をした。

同志ブハーリンは後にかう聲明した、左翼共産主義者はレーニンの逮捕にまで至るブレスト講和の決裂に關する共同戰術の問題について彼等と協議しようとした。さればこそ多くの『左翼共産主義者』は自己の誤謬を納得し、そして『左翼共産主義者』が他の何れの黨とも共同してゐないことについて一點の疑ひをも残さざらんがために、『ブラウダ』に同志ヤロスラフスキーの論文『我々は彼等と同行せず』が寄稿されたのである\*、と。

\* 本書の著者エメリヤン・ヤロスラフスキーはブレスト講和の署名問題について『左翼共産主義者』と共同してゐた。

一九一八年六月三日にはボルシニク・フラクシオン、そして七月五日にはソヴイェト大會が留保九人に對する五百人の多數を以て中央委員會および人民委員會の政策を承認した。黨はこの最も困難な時期に自己の統一を示したのである。

三月二十一日ペトログラード黨會議は五十七票を以てレーニンの見地を採用し、中央委員會の以前の政策、並びに『左翼共産主義者』の機關紙『コムニスト』の方針を誤つてゐると審判した。會議は『コムニスト』の支持者に『特殊化された組織的存在』の停止を要求し且つこれらの同志に黨の一般的組織の中で友誼的に活動すべきことを提議した。

『左翼共産主義者』が第四回ソヴイェト大會における講和條約の批准(確認)に關する決議の投票の際留保したことをなほ特記しなければならぬ。彼等は大會において批准に反對しなかつたが、一つの宣言を公表し、そしてその中には、『プロレタリア黨の分裂は今日革命の事業にとつて有害であらう』といふこと、この宣言を公表することによつて、『左翼共産主義者』は條約の批准の問題の投票に際して黨の決議に反對投票するのではなくて、留保するものであることが述べられた。これは疑ひもなく有害な、反黨的な、分裂主義的な行動であつた。けれども、『左翼共産主義



者』は第七回黨大會後もまた闘争を中止しなかつた。今や闘争は主として對内政策の問題について行はれた。『左翼共產主義者』は黨の隊伍において『狂亂した小ブルジョア』、階級落伍的インテリゲンチヤ層の氣分を反映した。『左翼共產主義者』は、トロツキーと同様に、プロレタリア獨裁の清算に導く最も實際の降服者の政策を革命的文句によつて隠蔽した。

我黨のその後の歴史は、『左翼共產主義者』の見解が『左翼的』スローガンに被はれた無政府サンチカリストのおよびメンシエヴィキの見解の混合物であることを示した。

レーニンはなさない『左翼』の新聞『コンムニスト』を前マルクス時代の『共產主義者』と稱した。ドイツ人は攻撃しえないだらう、といふ『左翼共產主義者』の説教は、ドイツ人の攻撃を援助したところの最も有害な欺瞞を蒔き散らした、何故ならこの欺瞞は消極性、無爲を支持したからである。

第七回黨大會において、戦争と講和について報告しつゝ、レーニンは、『戦争にも非ず、講和の署名にも非ず』といふトロツキーの革命的文句がただ『深刻な誤謬』、即ち國際革命の運命を弄ぶところの事實の過重評價の他の一面にすぎなかつたことについて述べた。『……黨内における左翼反對派の形成と關聯して、我黨が經驗しつゝある重大な危機は、ロシア革命によつて經驗され

つゝある最大の危機の一つである\*』。レーニンは新聞『コンムニスト』の空虚に響く革命的誇張に關聯してかう述べた、『……彼等の新聞は「コンムニスト」といふ名稱を帯びてゐるが、それは「シュリヤフティチ」(ポーランドの小貴族)といふ名稱を帯びるべきものだ。何故ならそれは、劍をもつて立派な姿勢で死にながら、平和は恥辱だ、戦争は名譽だ』といつたポーランドの小貴族の見地から見るからだ。彼等はポーランドの小貴族の見地から議論するが、私は農民の見地から議論する\*\*』と。

\* レーニン、第二十二卷、三二二頁。力點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

\*\* 同上、三二七頁。

レーニンは『左翼共產主義者』の小ブルジョアの立場に對する闘争に多くの論文や小冊子を獻げた。『左翼共產主義者』の誤れる見解の基礎には、我國における社會主義革命の確立と一國における社會主義の勝利との不可能に關するトロツキーの立場が横はつてゐた。世界社會主義革命なくしてはソヴェト國家における戰勝的な社會主義革命は不可能である、と彼等は考へた。『左翼共產主義者』の反黨的、分裂主義的行狀は、黨に巨大な害毒を齎した。左翼社會革命黨との反黨的および反革命的プロックは疑ひもなく後者をソヴェト權力に對する暴動に突き進めた。されば



こそ『左翼共産主義者』に對する黨の鬭争、彼等の誤謬の暴露は、かゝる巨大な意義を持つてゐたのである。

『左翼共産主義者』およびトロツキー派に對するボルシェヴィキの鬭争は、國際的意義を持つてゐた。ボルシェヴィズムは到るところにおいて右翼および『左翼』日和見主義に對する鬭争の中に成長し、強化し、鍛鍊される。『労働者運動の内部の如何なる敵との鬭争のうちにボルシェヴィズムは成長し、強化し且つ鍛鍊されたか』といふ問題に對して、レーニンは『共産主義における「左翼主義」の小兒病』の中に次の如き答を與へた、『……第一に、そして主として、一九一四年に決定的に社會排外主義に變質し、プロレタリアートに對するブルジョアジーの側へ移行したところの、日和見主義に對する鬭争の中に。これは、當然、労働者運動の内部におけるボルシェヴィズムの主要な敵であつた。この敵は實に國際的規模における主要な敵である』。他方では、『……ボルシェヴィズムは、無政府主義に類似しまたはあれやこれやをそれから借用するところの、辛抱強いプロレタリア階級鬭争の條件および要求から飽くまで本質的な點において退却するところの、小ブルジョアの革命主義に對する多年の鬭争の中に、發生し、形成され且つ鍛鍊された\*。レーニンは小ブルジョアの革命主義の社會的基礎を『革命の恐怖のために狂亂した小ブルジョア』と考へてゐる。

後に我々は、如何にこの小ブルジョアの革命主義が、無政府主義的、メンシェヴィキ的、トロツキー的および無政府サンチカリズムの本質を隠蔽しつゝ、その後の進路において黨内に發生した種々の分派的、反黨的グループの中に現はれたかを見るであらう。

\*レーニン、第二十五卷、一七九—一八〇頁。

### 第七回黨大會（一九一八年三月六—八日）

第七回黨大會は主として講和締結問題の決定のために召集された。大會は、黨全體がそれに代表されようとは少しも考へられなかつたやうな條件の下に召集された。何よりも先づ戦線における危険な状態とソヴェト國家の幾多の地方における信じ難いほどの崩壊とがこれを妨げた。

國際情勢は當時非常に重大であつて、講和問題について大會で採用された決議さへも新聞紙上において公表されないで、たゞ大會が講和の署名を確認したと報せられたにすぎなかつたほどである。この決議の中にはかう述べられてゐる、『我々が軍隊を有しないことに鑑み、墮落した戦線部隊の極端に病的な状態に鑑み、ソヴェト・ロシアに對する帝國主義者の攻撃前における息継ぎの最小の可能性にもせよ、あらゆる可能性を利用する必要に鑑みて、大會はソヴェト權力に



よつて署名されたドイツの最も苛重な、屈辱的な講和條約を確認することを必要と認める』と。この決議の中には、『……ソヴィエト・ロシアに對する帝國主義諸國家の反覆的な軍事的攻撃が不可避的である』ことが特記された。だから大會は最先の且つ基本的な任務として次のことを提起した――

『ロシアの労働者および農民の自制と規律との向上のため、解放的、祖國的、社會主義的戦争へのロシアの歴史的接近の不可避性の説明のために、最も精力的な、無容赦に決定的および残酷的な方策を採ること\*』。

\* 一九二七年におけるトロツキスト反對派の中には、労働者階級が一九一七年十月に自己の祖國――ソヴィエト聯邦を獲得し、奪取したことを忘れて、ソヴィエト聯邦の労働者が自己の祖國を擁護する、さういふ聲明を奇妙なことに考へた人々があつた。

それと共に、ソヴィエト國家のプロレタリアートはロシアにおける革命を國際革命の一部と看做し且つ萬國のプロレタリアートの革命運動をあらゆる手段を盡して支持するであらう、といふことが力説された。

第七回大會においては黨綱領の改變の問題が決定され、また黨の名稱が改變された。すでに一九一七年四月テーゼにおいて（およびまだ一九一七年の革命前に）レーニンは黨の名稱の改變の

問題を提起した。この當時はプロレタリア革命の最惡の敵と勝利したプロレタリア獨裁の最惡の敵が社會民主主義者と稱してゐた。第二インターナショナルがプロレタリアの事業を裏切つた後、『社會民主主義者』の名自體は、最も困難な瞬間にプロレタリアートの利益を裏切つた者の名を著しい程度に意味した。レーニンは、マルクスおよびエンゲルスがすでに『國際共產主義者同盟』の名において共同して『共產黨宣言』を書いた一八四七年に、自ら共產主義者と稱したやうに、我黨を共產黨と稱すべきことを提議した。社會主義と何等の共通點をも持たなかつた人々がすでに當時自ら社會主義者と稱した一方、共產主義はたゞ革命的理論を意味したのみならず、共產主義のための革命的闘争を意味した。帝國主義戦争中にボルシェヴィキは國外において雑誌『コンムニスト』を發行した。

我黨を『ロシア共產黨（ボルシェヴィキ）―― P.I.I.I. (C)』と稱すべき提議は、大會の多數派によつて採用された、尤も括弧の中に、『共產主義者』と附加へて、ロシア社會民主労働者黨といふ舊い名稱を残し、または、ユー・ラーリンが提議したやうに、我黨を『ロシア共產労働者黨』と稱しなければならぬと考へた個々の同志はあつたけれども。

黨綱領については黨綱領を改變する必要について決議が採用されたが、その際その理論的部分